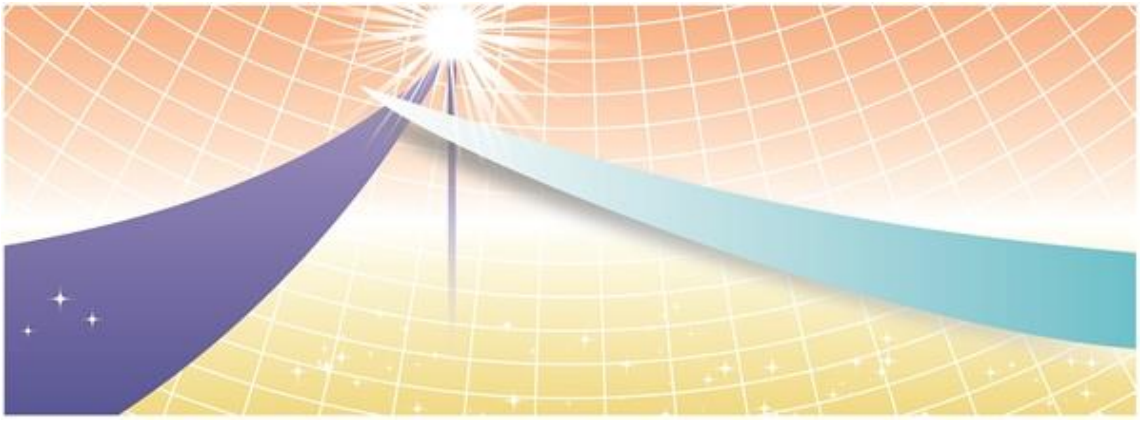


縮小社会通信　第 11 号

2022 年 7 月 11 日

目次

止まらない円安（ゼロ金利と円安危機）　中西　香　1
縮小社会へ　「軸の時代」　最適社会の実現へ　青野豊一　7
ジョン・レノンとプルードン　―マルクス主義とは縁もゆかりもない、もう一つの「近代」の可能性―　青野豊一　67
―未来の他者の呼びかけに応じるために―思考することの意味　青野豊一　78

一般社団法人縮小社会研究会

止まらない円安（ゼロ金利と円安危機）

2022 年 6 月２５日　　中西　香

1. ゼロ金利と円安はどう関係するか。

円安が進んでいる。安倍内閣は円安政策をとったといわれているが、安倍内閣の 2013 年から 2020 年までの約 8 年間はおおむね円安がゆっくり進んだ。（2013 年は＄１＝98 円、2020 年は＄１＝107 円）。むしろ安倍内閣が終って 2 年後の 2022 年５月以降、＄１＝130 円前後である。20 年ぶりの大幅な円安である。円安は安倍内閣当時でいわれた如く歓迎すべきなのか。それとも円弱体化＝日本経済の弱体化がいよいよ本格化していく予兆であろうか。まずは円安の理由を探ってみよう。

最近の円安の第一の理由は明らかに米日の金利差にある。10 年物国債の金利は 2022 年 4 月現在米国 2.94％を筆頭に欧米平均 2％程度なのに対し日本は 0.25％と低い。（2022 年 4 月 21 日付け日本経済新聞）

世界的には資源高で米国ではインフレが急加速している為 FRB は金利を上げて景気の過熱を抑えようとしている。一方、日本は資源を輸入に頼っており輸入インフレが景気を下押しし景気を悪くする恐れがあり、景気対策のためにも金融緩和（ゼロ金利）による産業支援はやめられないと日銀は言っている。

こういう場合、円対ドルの為替相場はどう決まるか？為替相場は美人コンテストの投票みたいなもので投資家は、金利が高いドルに投資した方が儲かりそうなので誰もがドルを買おうとして当然ドル高円安となるのである。

それなら日本も金利を上げたら大幅な円安は避けられたのではなかろうかとだれも思う。しかし、どうも日本には金利を上げられない事情があるのではないだろうか。

そこで円安の第二の理由は、金利を上げると日本一の借金王である日本政府が一番困るからであろう。日本の赤字国債は 1462 兆円（2022 年 4 月時点 IMF 推定）になっており、国債費支払いは年間２４兆円もある。金利を上げると財政破綻危機の赤ランプが点灯しかねないからではないだろうか。

2020 年から 202１年頃まではコロナ危機対策として各国がこぞって財政支出をしたので日本の財務危機はそれほど目立たなかった。ところが今年に入ってからは欧米の景気回復が進み、景気回復の遅さや金利アップできない日本の事情が注目を浴びている。

そして、円安の第三の理由は金利を上げられるほどに日本の景気は回復できていないから円安が続くのではではなかろうか。問題は 1990 年の戦後最大の金融恐慌とその後 30 年間引きずってきたデフレ不況にある。失われた 30 年と呼ばれている。日本では 30 年間、平均賃金はおおむね上がっていない。GDP の 6 割を占める庶民の賃金が上がらないでは景気が一向に回復しないのも当たり前であろう。上がったのは大企業の利益、内部留保、個人金融資産および消費税ぐらいである。要は日本経済の弱体化と富の一極集中、格差の拡大で

ある。

円安の第四の問題は日本経済の弱体化により円安がさらに激しく進行していることだ。円安は庶民から見れば悪いことが圧倒的に多い。2022 年 2 月から始まったウクライナ戦争によって、日本が世界中から買うエネルギー・材料・食糧などが円安もあり急激に高くなっている。日本の場合賃金が上がらず物価だけ上がる悪性インフレ、即ち悪い円安傾向である。また輸入増によって今後経常収支黒字を維持する事も容易ではなくなっている。少子高齢化、デジタル化の遅れ、2011 年の東日本大震災、福島原発災害なども日本経済の弱体化=円安をさらに促進している。

結局、円安は長期には日本国内にある財産が円安分だけ評価が下がり損をする。また大企業は需要多いアジアなど海外投資を拡大して利益増大をめざし、空洞化で日本国内の労働者は賃下げか解雇を迫られ割をくう。一方庶民は、円安になると食料や原油・材料などは弱い円で買わねばならないため円払い額は増え、困窮を増す。空洞化は非正規労働・賃下げなどの悪影響を労働者にもたらす。

残念ながら最早、強い円と技術力を背景に世界一の輸出立国でドルをため込んだ 20 世紀後半の成長時代は終了したといえそうだ。

今後はどうなってゆくか？円安で安くなった日本商品や土地等を目指して、再び日本ブームが戻ってくるかもしれないが、それで昔の円高に戻れると楽観はできまい。日本の経常収支が赤字になるかどうかに注目する必要がある。赤字になるようなら円の弱体化、日本の経済のさらなる弱体化は避けられまい。

2. 日米関係の略史から見た円・ドル

日本は戦後米国の庇護の下で復興し、1970～1980 年代は車や電子機器の好調に支えられて高度経済成長を果たした。対米輸出も好調で、米国貿易赤字の大半が日本からの輸出によるものだった。そこで日本は 1985 年プラザ合意によって先進諸国に対し円高を公約しドル防衛に協力せざるを得なかった。この結果として 1 ドルあたり円価は 1985 年 238 円から 1986 年 168 円、1990 年 145 円と円高が進んだ。

さすがに日本の輸出は限界を迎え海外投資への切り替えが進んだ。また、オイルショックもあり景気は過熱の末、1 990 年にはバブルの崩壊を経て深刻な金融危機から深刻な需要不足に陥り、2022 年現在までの 30 年間のデフレ不況のトンネルに入っている。

円はリーマンショックの 2009 年から 2013 年までの 5 年間は欧米の大不況下、安定通貨としての円が買われ 80 円～90 円を付け史上最高値となった。しかし日本は 30 年不況の真っただ中で低成長のデフレ経済が蔓延し、財政悪化、海外投資による空洞化、2011 年福島原発事故、少子高齢化など悪条件が重なり、次第に日本経済は弱体化し 2014～2021 年はほぼ 110 円台の円安で推移し、2022 年 5 月以降は 130 円を超える円安に突入している。

一方、米国は第二時世界大戦後一貫して莫大な貿易赤字に見舞われドルは流失し、ドル安が進んだ。そこで米国は日本や欧州、アラブ諸国、中国などの米国向け輸出超過国が、余っ

たドルを米国に投資して高利益確保ができる投資先を用意した。米国はこれによって貿易赤字で失ったドルを米国に還流させドル防衛することを目指した。こうした事情により永らく米国金利は高く設定されている。

また、2009 年米国発のリーマンショックという世界最大の金融危機が欧米を襲い、欧米はその火消しに追われた。サブプライムと呼ばれる住宅ローン担保証券は高利の米国投資商品の代表格であったが住宅価格の高騰を契機にバブル化して崩壊した。投機に手を染めたリーマンブラザーズ、シテイバンク、AIG 等名だたる大手金融機関は破綻した。

米国政府と FRB は投資で毀損した証券を米国債と交換するとか、金融緩和（QE）で企業を支援し、2009 年から 2014 年までなんと合計 4 兆ドル【約 500 兆円】を投入してやっと金融の正常化を果たした。巨大化する資本主義の失敗はその都度政府がかぶって税金と借金で処理される。その為には中央銀行という新たな貨幣鋳造機関も動員された。

リーマンショックは欧米・日本にも及び 2009 年から 2018 年ごろまでは世界的なデフレ不況、ゼロ金利時代となった。

この不況をいち早く抜け出したのは米国で、2022 年現在は世界的な回復期とみられている。米国は世界一の政治・軍事・経済力を背景とし 2000 年以降 GAFAM を中心にしたデジタル化や、シェールガス大増産で今なお自由主義陣営の世界をリードしている。ドルも基軸通貨の地位を何とか確保している。

しかし米国の財政悪化は年々巨大になりアキレス腱となっている。米国の財政は 2009 年以来 2018 年までの 10 年間で約 10 兆ドルの巨額の財政赤字を計上した。近年も貿易赤字は消費の堅調さもあり 2021 年は年間 1 兆ドル超と過去最悪レベルにも膨らんだ。また、コロナ対策のために 2021 年はコロナ前の 3 倍に財政赤字を増やした。この結果米国の連邦債務残は 31.8 兆ドル（日本の 3.3 倍）と突出し最悪状態になった。

債務残の絶対額は米国が日本の 5 倍と極端に多くなった。債務残の対 GDP 比は日本が 1.7 倍、米国が 1.3 倍で日本が大きい。財政赤字の歳出に対する比率は日本が４７％（2010 年台平均）で、米国は１８％（2015～2022 年平均）と日本が相変わらずひどい状態である。いずれにせよ日本と米国が世界最悪の一、二を競っており、改善する気配は全く見えない。

3. 円安が良いのか、円高が良いのか

大手自動車会社を想定して下記の如く円安の場合の損得シミュレーションを作ってみた。①②③で為替益が 0.3 兆円出るが、資産側では 0.6 兆円もの為替損が出る為、結論的には企業にとってみても円安が必ずしもいいとは言えない。むしろバランスシートは円安でじり貧になる恐れがある。

また⑤⑥⑦は個別企業がどういう経営戦略をとるかによって異なるが、日本企業の海外生産比率は 2002 年 13%から 2021 年には 22%と拡大して利益を増やしている。庶民や日本経済から見ると日本国内産業の空洞化、低賃金化、雇用機会の消失ともなり好ましいとは言えない。

円安の損得シミュレーション

① 製品　円安で 1 ドル=100 円から 130 円となると、1 台 2 万ドルの輸出価格は 200 万円から 30%上がって 260 万円となり為替利益が 60 万円となる。

② 材料費　材料費 100 万円は海外から調達するとして、円が 30%安いので 130 万円となる。

③ 以上で商売上の為替益は差し引き 30 万円出る。売上高比 15%である。年１００万台輸出時の為替益は　　輸出高 2 兆円 X15%=0.3 兆円/年

④ 資産の評価　製造設備、材料など　日本製が 2 兆円、海外製が 1 兆円の場合、連結決算上の資産評価損は　日本製が円安で 0.6 兆円評価ロスとなる。

⑤ 負債の評価　　日本からの借り入れ円安で 30%減

⑥ 従業員賃金・諸経費　日本法人：連結決算上円安で一律コストカット 30%効果あり

⑦ 海外投資子会社従業員：日本人賃金より低いならその分コストカット効果あり

⑧ 円安によるインバウンド増加　利益

4. 金利とは何か。ゼロ金利と銀行の未来

まず、金利とは何かという点に立ち戻ってみよう。金利はだれが決めるか、どの国でも公定レートといって金利の基準を中央銀行が決めている。

では中央銀行は何をもって金利を決めているか？中央銀行は景気が悪いと金利を下げて、産業界の借入金利負担を軽くし投資をしやすくし景気を上向かせようとする。景気が過熱しすぎると、金利を高くして、借り入れをしにくくして景気を鎮静化する。これが中銀の一般的な金利誘導による景気調整の仕組みである。

原理的に見れば、元々金利とは銀行が企業に貸付し、企業が投資して儲けた利益を利子（金利）として銀行に戻す仕組みである。こうして銀行は企業の投資資金を調達し、産業発展に貢献する。銀行への預金者も企業の利益の分け前を得られる。このように銀行制度は資本主義発展の梃子の役割を果す資金調達機能である。なお、今日ではこの機能が発達して、銀行が投機に手を染め独占・産業支配を進めたり中央銀行による国家への巨額の貸付といった変貌を遂げることも知られている。

水野和夫氏は日本で 1997 年から 18 年以上続く長期の極低金利を例にとり、こんなことは 5000 年の人類の歴史上まれだという。水野氏によれば、ゼロ金利とは、先進国を中心に資本主義の基本である利益が出せず、民主的な資本の分配もできず、資本主義は終焉時代に入っていることを意味する。

しかしその後の世界の成り行きを見ると、こうした懸念を振り払うように GAFAM（グーグル、アップル、メタ【旧名フェイスブック】アマゾン、マイクロソフト）を中心としたデジタル技術の台頭に伴い、欧米を中心に景気回復の機運が増している。今日ゼロ金利に固執する日本は取り残されている。

５． なお引きずっている 1990 年金融恐慌

日本は 1990 年の金融恐慌の影響を長年にわたり引きずっている。日本は 1990 年バブルが崩壊して、株は日経平均約 3 万 9 千円（全世界の株式時価の 33%）が 2010 年時点で約 4 分の 1 の 1 万円前後（全世界の株式時価の 10%）に暴落した（株式評価損 295 兆円）。この恐慌で金融界は 90 兆円（年間利益の 90 年分にあたる）の不良債権処理に追われ、主な 20 の銀行は再編・統合され現在の 4 メガバンクに整理されてようやく生き延びた。その他の地方銀行もゼロ金利下で銀行本来の利益源である利ザヤ（貸付金利−預金金利の差額でもうけを出す事）を確保できず赤字に苦しんでいる。

この為企業はリストラを進め新規雇用を絞り非正規社員比率を就業者の 4 割近くまで上げ、賃金負担を徹底的に下げた。また、大企業は国内投資ではなく海外投資を増やしたため国内産業の空洞化が進んだ。また政府は消費税 10%化により、企業の法人税負担は大きく軽減された。こうして福祉の庶民負担増と上がらぬ賃金で庶民の生活苦は深刻となっている。

6. 日本の財政

日本の場合、21 世紀に入って国家財政の破綻リスクはより高まっている。IMF 推定によると、国債発行による借入金など公的債務は 1462 兆円に達している（2022 年 4 月現在「世界経済のネタ帳」）。この額は対 GDP 比で世界一の 171%である。そしてその 3 分の 1 を超える 521 兆円の国債を第二の貸し手といわれる日銀が日本銀行券の発行増を背景に引き受ける。

これは日銀券の新規発行で国債を買い上げる財政ファイナンス（財政、即ち日銀を使った資金調達）でアベノミックスといわれる財政の打ち出の小槌の手法である。

因みにアベノミックスの柱は①金融緩和・ゼロ金利による企業支援②円安、輸出推進③株式市場への資金投入：企業利益拡大、景気拡大④日銀を使った財政ファイナンス、の 4 つであった。

財政ファイナンスは、日本の江戸時代幕府は金保有率を小さくした小判を鋳造して江戸幕府の財政破綻を救ったが、それに似た資金調達方法である。

こうした莫大な借入は 1990 年の金融恐慌以降、30 年間にわたり歳出を極端に超える毎年の国債発行によって年 24 兆円を超える国債費負担、年 36 兆円にも膨らんだ社会保障費支出などによって生み出されてきた。

日本の財政収支を 2010 年代の 10 年間の年間平均で見ると歳入 53 兆円、歳出 99 兆円、赤字 46 兆円（GDP 比 5.8%）で、歳出の 46%が歳入で賄えず国債という借金で賄われている。赤字はすべて国債発行で賄われた。その額は 1970 年代 65 兆円、1980 年代 145 兆円、1990 年代 232 兆円、2000 年代 396 兆円、2010 年代 462 兆円で 50 年間の累積では合計 1300 兆円の赤字国債発行であった。2010 年代で見ると GDP の 5.８%に相当する。2010

年代の GDP 成長率が 1.3%の黒字という表看板は実際は嘘で、赤字国債分の 5.８%を引くと差し引きマイナス 4.5%が日本経済の赤字実態とみるのが妥当であろう。

なお、こうした実力の GDP 成長率という観方で見ると 2010 年代は欧米、日本はいずれも赤字状態であり、黒字なのは中国だけである。

先進国経済は 21 世紀に入り成長実力は最早ない。実態を見ると超国家企業を国家と中央銀行がささえている。そして、GAFA の如きデジタル・AI 企業で利益率は 20%と世界中の富を独り占めしている。日本は庶民の窮乏化で需要は停滞し、社会保障費は次世代の人々からの徴収を予定し当面は国債で負担させる形で財政ファイナンスを綱渡りで行ったのがアベノミックスであった。その後の政権もアベノミックスの財政手法を受け継いでいるが、コロナ危機やウクライナ危機への対処で財政は益々悪化している。

戦後間もない日本においては GDP の 204%にも国債が増え、ハイパーインフレの下で預金封鎖と新円切り替えが行われた。国家の借金は最終的には国民の負担によって解消されたわけだが、結果として戦前の 1 ドル 10 円の円の価値は 1 ドル 360 円にまで切り下げられた。

2001 年には IMF 関係からかネバダレポートなるものが出た。真偽のほどはわからないが、危険水域に達している日本では何が起こっても不思議ではない。

以上

縮小社会へ　「軸の時代」　最適社会の実現へ

フランス社会主義、歴史の事実、その「尾ひれ」

人々はなぜアソシアシオン設立に熱中したのか、その歴史的教訓

アソシアシオンの意義　資本主義の変容　人々の意識の転換、

そして縮小社会へ　フランス社会主義(最適社会)の復活

補説Ⅰ「軸の時代」

補説Ⅱ ①プルードンの宗教的なもの ②現世利益の宗教について

補説Ⅲ 社会統合について

青 野 豊 一

は じ め に

以下の文章は、阪上孝『フランス社会主義−管理か自立か−』(新評論)の「序章 フランス社会主義の歴史構造」の読解を通した未来社会展望である。次の来るべき肯定されるべき社会は、どのようなものであろうか。今までの歴史に現れた一つの抑圧社会から別の抑圧社会へと歴史を繰り返すことになってはならない。

そのためには、個別具体の歴史を知らなくてはならない。そこから歴史的教訓をはっきりさせなくてはならない。その一つとして、19 世紀のフランスの人たちが何故アソシアシオン設立に熱中したのか、そしてその結果は、さらにその歴史から学ぶべきものをはっきりさせたい。これは、私たち現代人とって、ぜひとも知っておかねばならないことである。まずは、歴史の事実を知らなくてはならない。今後の社会の動向を見極めるためにも・・・!

＊「フランス社会主義」といっても、ここではフランスの社会主義思想の歴史を読解しているわけではない。現代に続く問題の開始をはっきりと告げている 1848 年の二月革命当時の、19 世紀の社会思想を通しての歴史的教訓の把握に限定している。

＊ アソシアシオン(フランス語)は、英語ではアソシエーションである。共通の目的や関心をもつ人々が、自発的に作る集団や組織。学校・教会・会社・組合などのことであり、しばしばコミュニティーに対置されるものである。

そして、後半では見田宗介氏の諸著作を参考として、縮小社会となるであろう近未来へと視線を伸ばしていきたい。私たちは、変わらなくてはならない。社会は、もう縮小しているのだから、・・・。

さて、私がこの文章で述べているのは、**見田宗介氏の分析・類型によれば、「最適社会」であろう**。社会関係は、そして人間関係では、どうしてもエゴの対立となる。そこで、このエゴのどこに均衡を見出していくかという視点でまとめた社会展望である。対立を止揚して別世界(コミューン)を、理想社会を展望しようとするものではない。

〈社会の転換期に生きて　歴史の事実、そして「尾ひれ」〉

2021/7/10 の毎日新聞に「安政コロリ流行記」(明治の仮名垣魯文原著の現代語訳 白澤社)の書評が載っていた。私としては、この書物を読む気はないのだが、評者の磯田道史氏の述べられている視点に注目したい。

＊磯田道史　国際日本文化センターの教員、NHK BS フレミアム「英雄たちの選択」等に出演。

この書評の副題は、「「尾ひれ」にこそ人間社会の本質」とある。安政のコロラの蔓延について、人々が感じ、そして語りあった。そのために膨らんだ「尾ひれ」について語っている。この「尾ひれ」に注目することが大切であると。その通りであろう。社会はこの「尾ひれ」の動向で、・・・。　＊斜体で記載

国際日本文化センターの井上氏は、*「事実から派生する「尾ひれ」こそが大事なのだ、と。事実でない「尾ひれ」がどのように付くか。そこにこそ人間社会の本質が現れるというのだ。」*

「幕末、コレラの病原体は見えない。幕末人は見えないコレラにおののいた。見えないままでは不安である。嘘でもいい。コレラを可視したい。その心理が働いた。そこで幕末人はコレラの正体＝狐狼狸という架空の獣の姿を脳裏に作り、それを集団幻想として共有した。コレラという事実から派生した「尾ひれ」である。」

・・・・「アメリカのペリー艦隊＝異人が日本に持ち込んだと認識されたから、アメリカは「憑き物使い」のイメージで観られていたと、本書(「安政コロリ流行記」)は指摘する。・・・幕末の攘夷運動には異人を狐狸の妖術使いに見立てる深層心理が働いていた。・・・「尾ひれ」の方が現実の歴史を大きく動かした。」

「IOC と東京都と国は(＊コロナウイルスの蔓延の中で)「恐怖の五輪」を開催しようとしている。正気の沙汰ではない。これほどの恐怖が国民に植え付けられれば、幕末同様、歴史を乱すに足る。「何らかの深層心理」が国民間に生じるやも知れぬ。」　＊印は、私の補足

政府の無策に、そして官僚の汚職と無策と失策に対して抗議の意思表示をしようとしない人たちに、意識ある人たちは悲しいかな絶望しかけている。しかし、磯田氏の話では、このコロナウイルスの全世界的広がりは、人々の心を大きく動かすきっかけとなるかもしれない、とも解釈できる。

「今だけ・自分だけ・お金だけ」の意識に取りつかれた人たちは、自分たちの周囲の人がどのような状態であろうとも、心を動かさない。ましてや、社会のことなど、どうでもよいような言動をしている。蔓延しているのは、コロナウイルスだけではない。お金さえあれば、スーパーに行けば、日常生活に必要な物は買える。他の人たちがどのような生活をしていようと、そのようなことはどうでもよいのだとする意識が、深く広く浸透している。

＊このような意識になった大きな理由については、3-1 情報化/消費資本主義を参照

それが、コロナウイルスの世界的広まりの中で、人々の意識の奥底に、黒く濁った溜水に、さざ波が立ちだしてきたようだ。「尾ひれ」が、コロナウイルスという妖怪が、現実の歴史を動かすかもしれない事態となりつつあるのかもしれない。人々に深く浸透した「今だけ・自分だけ・お金だけ」の意識は、経済の高度成長の終焉の後の政府の新自由主義政策で広まるばかりであった。この意識は深まるばかりで、今までどのようなことがあっても弱まることはなかった。それが、今回のようなコロナ禍の集団的体験を通して変化するのであろうか。

しかし、このことに、大きな期待を寄せることはできない。3・11 の地震と大津波、そして原発の建屋の爆発による放射能汚染で、日本の多くの人たちは自然災害の恐ろしさ、放射能汚染について言いようのない恐怖心が染みついた。しかし、その結果として「今だけ・自分だけ・お金だけ」の意識により一層とりつかれることになった。あれだけの大惨事があったのに、官僚と政治家の汚職と無策と失策があったのに、このことについて抗議の意思表示をはっきりとは示す人が多数派にならない。責任の所在をはっきりしない。そして、新しいライフスタイルへと踏みだす人が少ない。さざ波どころか、大波をかぶって多くの人たちが亡くなったが、・・・。この映像が繰り返し放送され、津波の恐ろしさは、私たちの心に染みついたが、原発から出た放射能汚染でそれまで住んでいた地から多くの人たちが立ち退かされたのに、・・・。私の周囲の人たちは、「今だけ・自分だけ・お金だけ」に一層とらわれてしまったようだ。

〈家族と社会が壊れてきている　ボランティアはアホのすること?〉

このようなことが生じるのは、社会保障が充実していないために金銭的な窮屈さを強く意識しているためであろうが、これだけが理由ではないようだ。一つは、日本社会が老人大国とも言い得る状態になって来ていることが関係しているようだ。2030 年には人口の 1/3 が 65 歳以上、そして 1/5 が 75 歳以上の人になると言われている。齢を経て、自分の事だけに気をつかう人たちが増えているのだ。人との関わりを減らし、新しいことにチャレンジしない生活態度になってしまった人たちが増えているのではなかろうか。これは、日本社会における助け合いの精神の欠落を示す現象として現れ出る。他者との関係を「ねたみ」根性で、・・・。劣等意識にさいなまれて、・・・。

そしてもう一つ、これまで人々を結びつけてきた絆(社会規範)が見事に崩れてしまったためである。でも、この旧来からの絆の崩壊がないと、今までのような絆の裏にこびりついていたそれまでの対人関係の毒(例えば、田舎の毒)は、なくならないが、・・・。だから、一度壊れてしまうことが必要なのだが、・・・。現状は、従来からの絆の崩壊で、毒ばかり目立つ事態となっている。

また、子供の数が減り人口が減少し、また、経済成長が鈍化したために社会的流動性、住まいの移動と階層移動が減ったため、社会全体に活気がなくなったために、このような毒ばかり目立つ事態となっている。日本はもはや経済成長が回復する条件がない。もはや工業立国ではない。アジアで唯一の先進国ではない。

だから、現在は、旧来の絆の崩壊、そして毒があらわになることで、・・・、この崩壊を経て新しく創造的な結びつきが作り出される過渡期であろう、と思えないこともない。この過渡期への営み(歴史の危機の時代)が、このコロナ禍で促進されていると見なすのが良いように思える。従来 10 年かけて変わってきていたものが、たった 1 年で、・・・。家族と社会が壊れてきている。

これらのことをまとめると、このコロナの感染の広がりで、日本社会のシステムの劣化、機能不全がきわめてはっきりしてきたと言うことになる。私たちがこれまで思ってきた以上に行政システム(公助)、そして人々の相互扶助(共助)も作動しないという現実であった。これは、政治の責任者が責任を取らないという政治風土にも大きな関係がある。この責任を取るという社会的合意が成立していたならば、もっと具体的、そして有効な対策が取れたのであろう。このことは不祥事を起こした企業でも同じことが成されている。これでは、戦前の、そうあの戦争へと突き進んだ失敗の繰り返しとなってしまう。

今後「今だけ・自分だけ・お金だけ」の意識が強まるのか、弱まるのか。少しは希望的なものを、別の新しい質のある人間関係を推し進めることができるのであろうか。ここからが、私たちの正念場であろう。

＊日本社会は、どうも、少しずつ改革していくことが難しい。西欧に比べて遅れて近代化・資本主義化を国家行政を通して上から始めたこの国では、すべての事が行政の利権がらみに固められている。現在も、・・・。そのために、多くの人たちが利権にぶら下がることばかり考えて、新しい時代の諸条件に即した改革を志向しない傾向が強い。そのために、社会は柿が熟して熟して下に落ちるがごとき様相を示さない限り、自己変革ができないようだ。

<農村社会の崩壊>

私は、田舎の農村社会に住んでいる。日々、米・麦・野菜等を生産している。この立場で、以下に私の考えを述べていきたい。私は、農民たちのエゴを否定しない。人間社会を精神主義的に、そして理想主義的には解釈しないようにしている。人は皆、エゴをすてることなどできないのだから、このエゴが大きな悪にならないような社会システムにしていくことが大切なのだから。

未来社会展望として、「生産・消費協同組合」について語られる方たちがいる。この時、人の「協力・連帯」という精神作用を過大評価する人たちがいるが、この精神の在り方を駆動力とする組織は、またまた人々の自由な思想と行動を制約する方になりがちである。そうではなくして、人が自己本位なエゴを抱いていても、それが大きな悪をなさない社会システムにしていくことが大切な事であろうと思う。「今だけ・自分だけ・お金(かね)だけ」は、昔から、そして今も人の心の中にはある。これは当然なことである。私が問題としているのは、この意識があまりにも露骨に出て基本的な社会関係にまで、大きな悪をなしているということである。中曽根・小泉内閣以来の「新自由主義」

に基づく経済政策から、この意識が当然のこととして人々の行動原理として前提化されていることに危惧感を持っている。そして、この政策により、農村社会と農業は今崩壊の瀬戸際にいる。この情勢の中で、人々の「今だけ・自分だけ・お金(かね)だけ」の意識は、この崩壊を一層推し進めることとなっている。要は、農業にまったくの期待を抱けないのだ。身体的にはまだまだ働けると思える人たちが、米さえ作らなくなっている。自家栽培としての野菜も、・・・。少し余分に栽培して余れば産直市に出荷すればよいのに、それもしない。確かに、儲けなど微々たるものである。でも、この出荷ということを通していろんな人たちと会話が、人間関係ができるのであるが、それをしようとはしない。労働意欲の著しい減退となっている。もう、米作りも放棄し、農業自体を止めようとしている。そして、農村社会の維持管理さえ放棄しようとしている。私の住んでいる地は筍の産地であるのだが、私の居住地の集落では、筍の出荷をしているのは私だけとなってしまった。

このような社会環境の中にいると、私まで変な気持ちになってきてしまう。周囲を見渡せば高齢者ばかり、ともに頑張るのではなくして、「ねたみ」・「ひがみ」が優先する対人関係が露骨に現れて来ることになっている。社会経済が縮小していく現実等についてはどうでもよくて、皆が貧しくなるには我慢できても、自分と比較して隣人や知人・親類の人たちが自分より良い暮らしをしているらしいことが我慢できず、・・・。隣の不幸は蜜の味となるのだ。社会的な移動性の大変少ない田舎社会では、・・・。外から人が移住するこれがきわめて少ない地域では、・・・。このようなことが、露骨に現れて来る。未来が今より幸せになれるという意識を持てないために、より一層! 未来への視線を持てないために・・・。未来展望がないために! そして、未来への視線がないということは、過去の歴史に対しても、・・・。もう、浮草なのだ。大地に根を張る農民なんていう幻想は、捨てなくてはならない。このような人たちにとって、ボランティアはアホのすることらしい。

現在も農業をしている人たちは、従来の農民たちと比べてインテリである。知的に農業の大切さを理解している人たちである。あるいは、経営規模を大規模化してアジア地区から来た労働者たちを低賃金で雇用して作物を栽培している経営者たちである。彼等は、農薬たっぷりの野菜や穀物を販売している。企業経営のために頭脳を使っている人たちである。日本の農業はインテリたちや経営者によって担われている、と言ってよい事態である。社会は、すっかり変わった。「根こぎ」されている多くの田舎に住む従来からの農民たちに語りかけても反応はない。戦後の自民党農政の農業・農民つぶしの政策が、今はっきりと現れてきている。

政府はアメリカ的な大規模農業を奨励してきたが、この温暖モンスーン気候のところで、アジア的農業地域でこのような大規模という営みが成功することはない。田舎が、地域社会がつぶれて農業は成立することはない。農事法人が、株式会社で、水利を管理し田畑を維持管理することなどできないのだ。特に、山間地で、中山間地

で、・・・。このようなことは成立しない。つまりは、歴代の自民党政府の政策は、片田舎で暮らすことを止めよと言っていることになる。このような地を放棄して、都会に移住して労働者として、そして貧民として生きよと言っているのに等しい。まさしく、現代版「エンクロージャー」である。＊P9 参照

〈社会統合の在り方についての思考を!〉

この様なことに対しては、日本政府はまったく無策であった。いや、社会の崩壊を促進する政策(新自由主義政策)を実施してきた。このような政策に対して、私たちは旧来の道徳観の押し付けに、戦前回帰の右翼的言動に、秩序の過剰に反対してきたが、それで事済む事態ではなくなってきているのに、このことについてどれだけ意識的に立ち向かうことができたのであろうか。私たちは、このような今までの姿勢を転換すべき時期に来ていることを、遅まきながらはっきりと気付くべきであろう。戦後日本社会は、景気が少し良くなると、お金さえ得られるとそれでよしとしてきた歴史がある。私たちは社会が今後どのようになっていくかについての思考が不足しており、また諸々の行動を十分に取り組むことができなかった。戦前の社会への回帰を目論んできた人たちの論調に反対してきたが、それを越えて、新しい社会秩序の在り方を模索しなくてはならなかったのだが、・・・。私たちは、社会秩序の在り方について、**社会統合の在り方について**思考しなくてはならない時期になったように思える。このようなことは、今までは右翼的な人たちが述べていたことなのだが、・・・私たちが思考・試行しなくてはならないことになってきた。

トランプや安倍達は、社会の中に分断を意識的に作り出し、宣伝して政権の掌握をしたり維持した。これは、歴代のファシストたちが行ってきたことである。社会統合より分断を、彼等は繰り返してきた。国内の自分を批判したりする人たちをターゲットにしたり、近隣の諸国を繰り返し批判することをしてきた。また。このようなことをマスコミは垂れ流しをした。そのため、このような意識が流布してきている。社会を維持していく絆は、彼らの言動によって見事に崩れてきている。20 世紀の戦後の社会ではとても考えられないような、批判性のない「今だけ・自分だけ・お金(かね)だけ」の意識状況となってしまった。

＊社会統合の意味するところは、補説Ⅲを参照

さて、ここまで人と人との関係性が希薄化し、崩れてしまったこのような社会では、理性的な対話という人との関わりだけでは、どうにもなりないのではなかろうか。理性では救い取れないもの、情念、そして美意識、さらに宗教意識をも取り込んでいかないと、・・・。公と私をつなぐものがいるのではなかろうか。宗教は個人の心の問題だけではなくして、人と人をつなぐ社会的なものでもある。この宗教の社会性が、旧来の宗教が抑圧的で封建的なものであったので、私たちはそれに反対することにエネルギーを費やしてきた歴史がある。しかし、今や、私たちは方向転換しなくてはならないようだ。宗教による社会統合の働きを考慮して思考しなくてはならない、と思われる。宗

教について語ることを避けようとする傾向が私たちにはあるが、このような社会情勢の中では、宗教が意味あるものとはっきりと現れ出ることがある。今までともすると宗教的なことについてはマイナスイメージで語ることが多かったが、既成の宗教団体には歴史的にはいろいろと問題があったのだが、宗教は個別科学とは異なり、人間の暮らしすべてのことを取り入れる全体的なシステムであるため、この組織はいかなる社会になっても持続が可能で回復力があるということだ。ここに、注目しなくてはならない。そのため、危機の時代には人々が共に生きていく新しいとりくみをしていこうとする時、ある面有効な組織でもあろう。この組織を通して、相互扶助の精神を発揮することができるかもしれない。宗教教団は、私たちに結びつきを、そして、個々人が担うべき役割を提示するのに大変役立つ組織となるかもしれない。これらの肯定的側面を、忘れてはならない。社会の危機の時代には、大きな意味を発揮することを、期待したいものである。しかし、そのためには、宗教の質、そのあの在り方が問い返されなくてはならない。これは、大変な事である。私たちが悲惨なことを体験しないことには、変わらないかもしれない。覚悟して、未来社会の展望をしなくてはならない。

「しかし，古い偏見と新しい思想が激戦を始めるのは，まさに今日である。動乱と苦悩の日々が始まったのだ。ひとびとは，いまと同じ信条，いまと同じ制度のもとでみんなが幸せに思えた時代を懐かしむ。どうしてこの信条が非難されねばならないのか。どうしてこの制度が廃止されねばならないのか。ひとびとは，あの幸福な時代こそ社会が隠す悪の原理を助長させたことを理解しようとしない。ひとびとは，人間を責め，神を責め，地球のエネルギー，自然の力を責める。悪の原因を自分の理性や心情には求めない。人は自分の主人，自分のライバル，自分の隣人，自分の行為を責める。諸国民は，多数の人口減少によって均衡が回復するまで，そして戦士の遺骨によって平和が戻るまで，互いに武装し合い，殺し合い，根絶やし合う。先祖伝来の習慣に手をつけることや，町の開祖がつくり何百年も墨守されてきた法律を改めることを，人類はひどく恐れる。」

＊プルードン『所有とは何か』1840 年　斉藤悦則訳

既成のシステムが機能不全になっているのだが、新しいシステムの姿がまだ見えていない、このような状況を**「歴史の危機」**という。経済の縮小は、もう始まっている。そして、本格的縮小社会は、ほんの少し目を凝らして観れば、もうそばまで来ている。それなのに、未だに、社会経済の拡大と成長に期待をよせている。いや、正確に述べれば、多くの人たちも、経済の成長がもうないことには気づいている。しかし、自分だけは今の消費生活が持続できることを願っている。社会経済が縮小すればするほど、・・・。他人のことなどどうでもよい、自分だけは今の生活水準が維持できることをひたすら願っているようだ。そして、これまでの生活スタイルを変更しようとはしていない。経済の高度成長の夢の中に、今も漂っているのだ。これは、変化することへの、

社会経済が縮小することへの恐怖心の表れであろう。そして、どうにもならない事態に追い込まれて、反対方向へと転換してしまうことが多い。このような状況下では、今も昔も、人のすることはそんなに変わらない。それまでの知性や道徳性などは、このような仮面はすぐはがれ落ちる。

＊宗教についての定義は、いろいろある。しかし、私としては、超自然的なものを前提にしているのを、宗教として考えたい。でも、宗教には大きく分けて二種類ある。人と人を結びつける絆の形成にあまり役立たない現世利益を誘導している宗教の問題性については、補説Ⅱを参照。

さて、絶望は愚かな事である。どのような時も、時代と社会の動向を見つめて、未来へと展望を見出していかなくてはならない。小さな行動も、それを起こすには、たくさん学習しなくてはならない。そして、歴史的事実を知るだけではなくして、・・・そう、「尾ひれ」に着目して、・・・。

社会は、今、大きな転換期になっていることは間違いない。そこで、私は、フランスの 19 世紀の思想と当時の人々の心の中に漂った社会心理の動向を理解することを通して、そこから教訓を見出して未来社会展望をしていきたいものである。ここに、大きな意味がある。

1　何故、フランスの歴史を学ぶのか?

フランスの歴史に学ぶことの意味については、阪上孝『フランス社会主義−管理か自立か−』に書かれていること以外の歴史的事実をもたくさん取り入れて記載したい。

日本の近代社会の実態については、ドイツ社会より実はフランスに似ていることが多い。例えば農民の実態と歴史について、さらに今後の農業・農村の在り方については、フランスの事例が参考になる。

ドイツ的な国民意識に大きな問題があることについては歴史的に多くの人がもう認識しているので、この事については、今回は述べないことにする。また、私たちの教えられた歴史では、日本はドイツに似ているとされてきたが、これは、大きな嘘である。国家権力による近代化ということではドイツと共通しているところもあるが、明治憲法の制定時にドイツの憲法を参考にしたのであって、その他の事は大きく異なっている。それに、フランスだって国家権力によって産業革命を推進し、資本主義化を図っている。

ドイツに比べて似ているのは、例えば、日本とフランスは、同一の領域内での自己完結的な国民国家形成がなされた。当時、ドイツは統一国家とはなっていなかった。プロイセンは、ドイツの領域内にいなかった。また、独立自営農民の存在でも、・・・。ドイツでは、農民は 19 世紀の初めまで農奴であった。このことを、詳しく述べたい。

＜ ナポレオン戦争の事例を通して ＞

ナポレオンが指揮官であった戦争では、ドイツの各諸侯やプロイセン、そしてオー

ストリアとの戦争では、ナポレオン指揮下のフランスがいつも勝利した。これは、兵士の質が違っていたためである。ナポレオンの戦略が、特別に優れていたわけではない。ただ、ナポレオンはそれまでの将校と違って、戦いの最前線に兵士たちとともにいた。そして、敵の陣形の最も弱い箇所を集中して攻撃し、すぐさま防衛の陣形も整えた。これができるには、意識の高い優秀な兵士たちでないと、・・・。当時のナポレオン指揮下の兵士の多くは農民出身であった。彼らはこの革命で、自分の土地の所有が認められた。これは、農民にとっての最大の願望が実現したことを意味した。当時のフランス貴族たちは、単婚小家族で耕している農民の収穫物に課税していたのであって、彼ら農民の意識では土地は自分の所有地という意識であった。だから、自分の判断で計画的に作物を栽培していた。これは、日本の江戸時代からの農民の姿そのものである。ここがドイツやロシアの農奴とは異なる意識である。だから、彼等は革命を起こしたのだ。土地に対して、農民としての**当事者としての意識**があったのだ。さて、国境の向こうには亡命貴族と反革命の国王に従う軍隊がいた。戦いに負けると、またあの貴族たちが帰って来る。土地所有は認められず、課税されて奴隷のような生活になってしまうことが分かっていた。だから、負けることのできない戦いであった。それに対して亡命貴族たちや反革命の国王が率いていた軍隊は傭兵の集まりであったり、土地貴族(ユンカー)たちの率いていた兵士たち(隷属農民たち)であった。兵士として戦うことで給与が出ていた。だから、戦うことはするが、戦闘でケガをしたり死ぬことは愚かな事であった。勝ちそうな戦いでは頑張って名誉と資産を増やす機会とするが、負けそうになるといっきに敗退していった。そもそも、戦争をすることの意味・意義のはっきりしていない兵士の集まりであった。この兵士の質の相違に気付かなくてはならない。ナポレオンという指揮官が特別に優れていたわけではない。当時の反革命の盟主、オーストリアの首相であったメッテルニヒは、このことが分からなかった。武器はフランスより優れており、そして人数も圧倒的に多かったのに、戦えば必ず負けた。このことの理由が分からなかった。農民の在り方に、兵士の意識に大きな違いがあったことが。＊追伸 1<フランス社会の特質>を参照

プロイセンでは、ナポレオンの軍隊に負け続けてベルリンにまで入城されて、やっと社会の後進性を認識して 19 世紀の初めに農奴解放をした。それまでのドイツの農民たちは、先に記載したフランス農民と異なり自立した農民ではなかった。村落共同体の強い規制の下で、貴族たちの厳しい監督下で農作業に従事していた。だから、土地の私的所有意識はまだ広まっていなかった。今のドイツの東側、エルベ川以東の土地貴族たち(ユンカー)は、農奴解放後は資本主義的な大規模農場経営を行った。解放された農奴たちの多くがフランスのような自営農民になったわけではない。ユンカーたちの経営する農場で雇われて、農業労働者となることが多かった。

＊ドイツでは、農奴解放時も、そして統一ドイツの結成時も、さらに第一次世界大戦後のワイマール共和国でも、農地改革や軍の機構改革は行われなかった。そのため、ユンカーたちの影響力は残り、

自営農民たちはなかなか増えなかった。彼らが官僚や軍人としてプロイセンを下支えし、そしてドイツ帝国をも、さらにヒットラーを強力に支持したのも彼らである。彼らは地域社会を完全に制圧していた。その地の教育・文化・経済を支配下に置いていた。しかし、第二次世界大戦後占領したソビエトが徹底的な農地改革を行った結果、ユンカーは解体された。

さらに遅れてロシアでは 19 世紀後半のクリミア戦争で負けて農奴解放がなされた。それでも、ミール共同体を離れて農民たちは生きていけなかった。だから、私的所有地を独自に経営する農家はあまりいなかった。そのため、ロシア革命後、コルホーズやソホーズという集団農場が大きな抵抗なく受け入れられたのだ。

このような特殊な歴史的背景があるのに、社会主義は農家の私的土地所有を否定するとイデオロギー的に理解されてきた。物事は個別具体の歴史から判断しなくてはならない。例えば、フランス社会主義は農地の公有・国有なんてことは主張していない。このような思想をもっていたさまざまな潮流のフランス「社会主義」は、20 世紀の初めにフランス社会党として結集した。フランス「社会主義」とは、フランス共産党のことではない。フランス共産党はロシア革命の後に結成されたもので、レーニン主義の政党である。

さらに特殊な歴史的立場として、イギリスでは日本やフランスのような農民はいない。彼らは、農業労働者たちである。イギリスでは、今も土地は貴族と国王の所有地が多い。この土地を借りて農業経営している借地農たちに雇われている労働者が実際の農業労働をして作物を栽培している。これは、15 世紀に農民たちの土地や共同地が強制的に奪われてしまい、農民たちは都市の貧民となっていったためである。

＊これをエンクロージャーという。領主および富農層が、農民から土地や住まいを暴力的に取り上げ、畑や共有地だった野原を柵で囲い込んだ。これは、当時高価であった羊毛を手に入れのために、羊を飼うための牧場に転換した。15世紀末に始まり、16世紀を通じてなされたのを第 1 次エンクロージャー(enclosure は「囲い」という意味)という。17世紀後半から18世紀にかけて、同じような農地の囲い込みが行われたがこれを第 2 次エンクロイジャーと言う。この当時のイギリスの農民たちは、フランスに比べて農業生産性が低く、まだまだ自立の程度が低く、団結して闘う条件のない状態であった。これによって農地を奪われた農民は離村して都市に流れ込み、**貧民化・賃金労働者化**していくこととなった。このため都会では、失業、浮浪、犯罪などの社会不安が増大した。彼等は軽犯罪でも重罰化され、強制労働や植民地送りとなった。この当時の物語として「こじき王子」が有名である。彼等は、産業資本主義の勃興期に過酷な労働条件で働くしかなかった労働者であった。資本制社会が成立するためには、生産手段と労働力を購入して剰余価値を搾取する資本家の存在と、労働力を売るしかないプロレタリアートの存在が必要である。このエンクロージャーで、産業資本主義の確立に向けた本源的蓄積の一つがなされた。だから、イギリスで、産業革命が一番早く始まった。マルクスの『資本論』第一巻の最終章参照。

19 世紀の世界の覇権国家であったイギリスの実情を知るには映画「シャーロック・ホームズ」を観るとよい。都会の路上に貧民がいて、汗して働く労働者たちの姿が、そして田舎には浮浪者たちがそこかしこにいたことが映し出されている。イギリスは、今も厳しい階級社会である。土地の多くは貴族や国王の所有地である。

日本でも戦前は、小作の人たちがたくさんいた。でも、この小作達の多くは、昔からずっと小作であったわけではない。明治の地租改正等で、資本主義経済のために没落していったもので、ドイツのような隷属的な農奴ではなかった。また、小作であっても、少しばかり田や畑や山林を所有していたりしていたのが多い。また小作をしていても、そこに何をどのように栽培するかは彼らが自分で決めていた。農奴とは、その意識が大きく異なる。

土地の私的所有意識は、日本社会では一様に始まったわけではない。商品経済の展開の程度によって異なる。近畿地方を中心にしてこの意識は広がっていった。時代的には鎌倉時代後期、「悪党の時代」のころから、はっきりしてきたと言われている。それまでの王朝の支配・被支配関係を食い破っていった「悪党たち」が活躍した時代があった。彼らは私的所有意識の広まってきた農民たちの支持を得て、寺社領、そして貴族の荘園支配を実力で食い破っていった。彼等新興の武士たちは、当時の有力な武家勢力につながり鎌倉幕府を倒した。

でも、東北地方の奥や島では、この私的所有意識はなかなか広まらなかった。長崎県の壱岐では明治初年まで土地は地域のものであって、農民の管理耕作地は 10 年程度で交替していた。貧富の格差を防ぐために、地域所有であった。

＊「悪党」とは、現代的な意味の悪の犯罪者たちという意味ではない。猛々しいとか、それまでの王朝的支配に従わない人たちの事である。新興の武士集団であった。

★私たちは歴史に学ばなくてはならない。そうでないと、**現実への不満の裏返しで「主義者」になってしまいかねない。主義者では、未来は築けない。**近代社会へと扉を開いた、近代の普遍的理念を提示したフランスの歴史について学ぶべきことが多いように思える。さて、「何故、フランス社会主義に注目するのか?」についてはまだきちんと記載していないが、次の「序章フランス社会主義の歴史構造」の読解の中で、はっきりするであろう。

★その前に、個別具体の歴史に学ぶことの意味の事例として、埼玉大学の三浦敦氏の指摘を掲載したい。フランスの歴史の個別の事実と社会主義の関係について、次のように述べている。*＊斜体*

・・・ただ、プルードンもそうですが、ジュラ(フランス東部、スイスよりの地方)を見てわかるのは、保守主義と社会主義は実は紙一重です。ジュラの農民は、確かに協同組合を強く支持していますが、それは社会主義思想に共鳴したからではなく、それが自分たちの意見を実現するのに最も都合がいいからであり、その農民たちは現実の政治的には保守志向です。

でも、その彼らが一度、都市に出て労働者になると、社会主義志向に転じます。19世紀の前半に、ジュラでは農業構造が変化(生活のための農業の多角経営から、利益を目指した酪農への専門化)して多くの貧しい農民が離農しました。その離農した

農民は都市に出て労働者になりますが、その一部、は国境をこえてスイス・ジュラに行き、時計職人になります。スイス・ジュラは、今もスイスの高級時計の産地として知られるところですが、その時計職人たちは、19世紀の後半に、ヨーロッパで最も急進的なアナーキズム運動を起こします。フランスのジュラからスイスに行った農民たちも、このアナーキズム運動を支えることになります（ちなみに、建築家のル・コルビュジエもスイス・ジュラの出身で、その父は時計のデザイナーだったのですが、文献では確認できないのですが、この父も多分、このアナーキズム運動に関わっていたはずです）。

これらのアナーキズム運動（マルクスは大嫌いだったみたいですが）は、それまで国家権力とは無縁に生きていた農民たちの、発展する近代国家組織への反発があったと思います。フランス・ジュラの場合、パリの行政権力がその末端の農村にまで及ぶのは、ようやく2月革命の頃だったからです。

農民の世界では、私的所有という制度はまだ十分には確立していませんでした。共同放牧といって、自然草地では、牧草の刈り入れが終わると、土地所有権は反故となり、誰もがどこにでも自分の乳牛を放牧しても構わないようになっていました。もちろん、この制度が、土地を持たない零細農民に生きるすべを与えました。

また、森林も中世以来、日本の入会地のように、村の一定の管理のもとで、農民は利用することができました（アフアージュと言います）。プルードンは若い頃、自分の印刷所経営に失敗した直後、森林をめぐる裁判に関わります。ジュラの山中には、ベルギーの貴族が所有する大森林（オート＝ジューの森林）があったのですが、その貴族が中世以来のこの権利を整理して、森林の半分を周辺農村に払い下げ、残りの半分を、農民が入れない自分の土地として確定したいと考えたからです。周辺農村は、この払い下げ自体には賛成したのですが、どのように分割するかで農村同士で対立し、実に数十年も裁判が続きました。そしてその裁判にプルードンは一年ほど関わり中で、「森林は誰のものか」という問題を考えることになります。ジュラの歴史を研究しているブルロという歴史学者（リヨン大学の先生）は、この森林問題をきっかけに、プルードンは「所有とは盗みである」と考えるようになったのではないか、と指摘しています。

＊「都市に出て労働者になると、社会主義志向に転じます」の事例の一人が、プルードンである。プルードン(1809-1865 年 56 歳)は、ほんの少しのブドウ栽培と樽職人の子として誕生している。

「12 才まで、わたしは野良しごとの手伝いをしたり、牛たちの番をしたりして、ほとんど田畑のなかですごしてきた。牛飼いのしごとも5年間やった。まったく百姓以上に瞑想的で、しかも現実的であるような生き方をしている者をわたしは知らない・・・。町にいると、わたしは何とも居心地の悪い気分になった。労働者は田舎の人間とは全然別の種族だ。第一に、話す言葉がちがう。あがめる神さえ異なっている」

「田舎の人間がいだいている迷信を、その根強い幻覚のありようを確かめもせずに、それはだめだと言い張る人々がいる。わたしはむしろそういう人々をあわれに思うことがある。わたしは大人になりかかっ

ていたころもなお、水の精や妖精の存在を信じていた。それを恥じる気持ちはいまもない。それを失わされてしまったことの方がわたしにとっては残念でたまらない」

＊「革命と教会における正義」1858 年　斉藤悦則訳

プルードンは貧しさゆえに、進学できなかった。彼は印刷所で働きながら学び、後に友人との共同経営で印刷所を始めたが、倒産してしまった。そのために、たくさんの借金を抱えてパリに行った。そして必死に学んだ。彼は、独学で学んでいる。だから、彼の簡潔さに欠ける分かりにくい文章も、このような境遇を知った上で、・・・。そして、彼の明晰な問題意識を感じ取り、その意味することを理解することに努めなくてならない。

2 「序章　フランス社会主義の歴史構造」の読解を通して

1848 年 2 月 24 日、1830 年に成立した 7 月王政は崩壊した。政治に不満を持ったブルジョワたち(共和派)と不況と失業のなかで生活苦にあえぐ労働者たちが立ち上がった。この革命は、現代に続く問題の開始をはっきりと告げるものであった。この二月革命には、大きく分けて二つの特徴があった。

①その民衆的性格—7 月王政を支えていた大ブルジョワたち(金融資本)と大土地所有者たちに対して、不利益を被っていた中小のブルジョワたち、そして共和政体を望んでいた知識人たち、さらに生活苦に苦しんでいた民衆によってなされたものであった。このように複合した勢力でなされた革命であったために、革命後の政治と社会の在り様についての合意は難しく、唯一「普通選挙による共和制」であった。パリの労働者たちは 1830 年の七月革命の時のように、また見捨てられるのではないかと、実際に闘ったのは自分たちであるのに・・・と。隊列を組んで臨時政府(共和派閣僚)に圧力をかけて、社会的共和制としての政策を要求した。その結果、ルイ・ブラン等が閣僚となり、宣言文等として、言葉での約束がなされた。

そのため、この革命は一見、反ブルジョワ革命のように思われた。

＊「フランス共和国臨時政府は、労働者が労働によって生きる保証を約束する。・・・労働者は、彼等の労働の正当な利益を享受するためには、相互に結合しなければならないことを、臨時政府は承認する。・・・。「臨時政府の宣言」1848 年 2 月 25 日

②この時期に、社会改革を目指す多数の理論・主張が展開された。国家の土台としての社会そのものを改革しようとしたが、それらは「社会主義」の名の下に語られていた。しかし、この革命では、社会変革は進まなかった。革命後半年もしないうちに、反動へと流れは変わっていった。「宣言文」はゴミ箱に捨てられた。そして、ナポレオン三世が大統領となり、さらにクーデターが起こり、彼は皇帝となり帝政が開始(1851 年)されてしまった歴史がある。

＊先にドイツではユンカーの支配の下で民衆が苦しんでいたことを記したが、フランスでも田舎社会では大地主＝産業家＝金融業者であった場合が多く、彼等はその地方を支配下に置いていた。でも、単婚小家族の小さな農家もたくさんあった。これは日本の江戸時代、幕藩体制は単婚小家族への課

税を基本的なものとしていたが、庄屋は地主であり地方の警察権・裁判権をも持っていたのと似ている。フランスの農民たちが当事者意識を持っていたというのは、ドイツの農奴と比べての話である。でも、この意識の差は、質の差としてフランス革命は全土で、片田舎でも起こった。さて、1830 年の七月革命で誕生した七月王政では、制限選挙がなされていた。当時の人口約 3500 万人の内、選挙権を有していたのは 20 万人に満たない。選挙権を持っていてその地方を支配していた彼等の多くは婚姻関係等で固く結びついている人たちであった。さらに、議員の内の 40%近くが官僚議員であった。このような閉鎖性であったために、政治体制は安定していたが、社会の推移や情勢に対応する政策をするより、保守することに、現状の利益の確保に努めることが多かった。贈収賄、そして縁故人事が横行していた。まさに、戦後の日本の保守政権のように!! このような地方を支配下に置いていた名士・地主たちが、1848 年の二月革命後の普通選挙(有権者 900 万人)では多数派の議員となり、革命から「社会主義」を消し去った。社会システムの変更をしないままで選挙をすると、このようになる。

さて、このような歴史なかでのフランスの「社会主義」なるものは、どのようなものであったのであろうか。この歴史的内容の理解と、そこから教訓をつかみ出さなくてはならない。

1830 年に成立した 7 月王政の時期は、フランスでは繊維産業を中心に産業革命が進行していた時期である。この中で、より豊かになる者、反対に没落して貧窮していく者たちというふうに、社会の二分化が激しく進行した。紡績業では、労働者たちは朝の 5 時から夜の 8 時まで働かされた。それも低賃金で、食うや食わずのカツカツの生活実態であった。そして農民たちも穀物価格の低落で、さらに農村工業の急激な衰退で貧困にあえいでいた。彼らは職を求めて都市に流れ込み、それが失業と困窮を深刻化した。都市には、労働者たち、いや貧民たちがあふれていた。彼らは暗くて狭い路地に密集した住居、日の差し込まないよどんだ空気の流れている街に、暮らしていた。下水設備が整っていず、トイレも整備されていなかった。これらの生活環境で、コレラとチフス等の病気が周期的に発生していた。1832 年、コレラが大流行してパリでは 2 万人近くが死亡した。7 月王政期は、失業と貧困と伝染病等の、まさしく社会の存立に関わる大きな問題が発生していた時期である。田舎から都会に流れ込んだ人たちは、悲惨な生活実態であった。

この様な当時の社会状況をまとめて述べると、

- 科学技術の産業への応用、そして生産の組織化は、産業ブルジョワたちの富の急激な増大を、そして貧しい労働者たちの増大、つまり階級的対立の激化、繰り返される恐慌と失業等の社会経済的問題をはっきりと示していた。
- 物質的利益優先、利己主義の深化の急激な広がりで、社会に競争と敵対関係ばかりが目立ち、人々を結びつける絆の急激な崩壊現象が起きていた。

これらの問題の解決は、単なる政治改革、政権の交替・転覆等で解決するものではないことを、多くの人たちが認識した。そして、多くの社会変革のプランが提示された。これらは社会変革のプランなので、当然社会の全体像を示さなくてはならなかった。社会の各領域の関係性を明らかにしなくてはならなかった。そしてまた、眼前の現実の社会を、歴史の中に位置づけなくてはならない。さらに今後の未来像の提示と変革の具体的方法まで見通したものでなくてはならなかった。このことは、今につながる社会と歴史を解明していく社会科学の成立につながるものであった。自然科学的な方法をもちいて、その因果関係把握することが可能であり、未来社会も自然科学に近づく正確さで見通すことができるという確信をもたらした社会状況であった。まず 19 世紀のフランス社会を大きく主導的に規定しているものを確定しなくてはならないが、当時このことを最も早く示したのは、サン・シモンの理論であった。

2-1　階級対立、恐慌と失業等の社会経済的問題とサン・シモンの思想

サン・シモン(1760 – 1825 年)は、フランス革命まで貴族の末裔であったが、1789 年のフランス革命後、フランスの社会主義思想を発表した。テクノクラートからは、テクノクラシー(科学主義的専制支配)の父としても知られている。サン・シモンの教義の核心は、富の生産を促進することが社会の重要な任務であり、したがって産業階級は貴族と僧侶よりも重要な要素である、するものである。一国の行政は市民の才能に任されねばならない。財産権は政治憲法よりも、社会の基礎を形作る上で重要な法である。彼は「50 人の物理学者・科学者・技師・勤労者・船主・商人・職工の不慮の死は取り返しがつかないが、50 人の王子・廷臣・大臣・高位の僧侶の空位は容易に満たすことができる」との言葉を公にして、告訴されている。

しかし、サン・シモンの場合、資本家と労働者は等しく産業階級であり、その対立は問題とされない。「資本の所有者はその精神的優越によって、無産者に対して権力を獲得した」との見解を持ち続けた。労働者は自ら自由を獲得すべき存在ではなく、使用者によって保護されるべき存在としている。また、人々を結びつける絆の急激な崩壊現象について、キリスト教の道徳を産業社会に適用する方策を夢想した。すなわち、新しいキリスト教は礼拝や形式から脱却して、人間は互いに兄弟として行動し、富者は貧者を救済すべきである、とする人道主義へと傾いた。

この思想はサン=シモンの死後、後継者によって一種の宗教に祭り上げられ、アンファンタンらは**サン・シモン教会**を設立した。また一方では、宗教的活動ではなく、実際の社会改良にサン・シモン主義をあてはめようとする人びとも現れた。フランス皇帝となったナポレオン 3 世はサン・シモン主義の信奉者であった。フランス第二帝政期の前半は産業重視政策が取られて労働運動を露骨に押しつぶしたが、後半は方針の転換をしている。＊ルイ・ナポレオンは、『貧窮の絶滅』(1844 年)を出版している。

1860 年、ナポレオン三世は関税の大幅引き下げ、輸入禁止項目の廃止などに踏み切った。これ

は、帝政がそれまでの国内産業の育成・保護政策から、自由貿易政策に転換したことを意味している。同様な条約をプロイセン、ベルギー、イタリアなどとも締結し、ここにヨーロッパの自由貿易原則が成立した。保護貿易政策で守られていた旧来の産業資本家の反対を見越して極秘に交渉され、皇帝大権として締結された。このことは、フランス産業はイギリスの工業製品との競争にさらされ、手工業的中小企業は淘汰され、技術革新と資本の集中が一段と進むことを意味している。また、この時期、銀行の設立・鉄道の普及などの金融・社会資本(インフラ)の整備・首都パリの改造も進んで、フランスの産業革命がほぼ完成した。そして、彼は、労働者への保護政策、労働運動への理解を示しだした。

フランスの資本主義の発展にとっては、ナポレオン3世とその第二帝政は決定的な役割を果たしている。フランスの近代社会の成立である。ナポレオン3世の評価を変えなくてはならない。ナポレオン3世はマルクスの述べているような人というより、若い頃からイギリス古典派経済学やサン=シモンの産業社会論を知り、そのアイディアを独裁権力のもとで実行したと、言った方がよい。投資銀行の設立、鉄道の普及、万国博覧会の開催、パリ大改造、そして自由貿易政策への転換などがそれであり、これによってフランスは産業革命を継続させることができた。ナポレオン3世を愚かな陰謀家と見なすのではなくして、また第二帝政も単に抑圧的な独裁体制と決めつけるのではなく、彼を国家権力によって産業革命を加速して資本主義経済をフランス社会に定着させ、そして現代の消費資本主義の原型を作ったとも言い得るのではなかろうか。特に、帝政の後半は、それまでの政策と異なり、労働運動に理解を示したりしている。

これらの政策には、サン・シモンの産業社会思想が大きな影響を与えたとされている。もっとも初代のナポレオン一世の栄光を利用して権力を握るという権力欲、そして帝政復活に意欲を持ち続けた人物であることは、間違いないことである。

サン・シモンによれば、社会は一つの有機的な結合体であり、諸要素は相互に依存・関連し合っているとしている。そして社会は外から栄養を取り入れることで存続できるから、富の獲得が最も大切である、としている。社会の在り方を決めているのは産業であり、この産業の原理で社会が組織されていないために当時のフランス社会が混乱の真っただ中にいる、とした。だから、「産業の組織化」が大切な事であるとする説は当時のテクノクラートたちに受け入れられ、これがフランスにおける社会主義思想の最初のものとされた。産業化を促進し経済の合理的な組織化をするために、社会の根本的変革が必要であるとしたが、「産業の組織化」とは、まず世界で初めて産業革命を達成したイギリスに追いつき、それに対抗していくことでもあった。そのために、この「社会主義」は、産業主義的、生産力主義的な性格を色濃くもっていた。

しかし、フランス社会主義は、イギリスの現状を肯定していない。物質的利益優先、利己主義の深化の急激な広がり、社会に競争と敵対関係ばかりが目立ち、人々を結びつける絆の急激な崩壊現象について批判した。その悪の代表がイギリス経済学であると考えた。利己心の肯定、自由放任思想を、市場の自己調整的機能という考えは、アダム・スミスの「見えざる手」という経済思想は、単に財貨の交換ということに限

定されたものではない。当時のイギリスの市民社会そのもの、社会の組織化のメカニズムそのものであったから、フランス社会主義はそれを乗り越える社会理論を創り出そうとした。経済学が調和と繁栄としたことに、フランス社会主義は無秩序と不平等の深化を観た。まあ、類型化すると、当時のイギリスの社会主義は経済学的であり、ドイツでは哲学的であったが、フランスは社会学的であったと言える。社会学の創始者と言われているコントも、サン・シモンとともに活動していた。

「・・・産業化の進行をふまえながら、フランス革命をとらえ直し、その精神を継承しながら、その不十分さを克服する方策をさぐる事、イギリス社会を模範として、と同時にそうなってはならない反面教師ととらえ、それとは別の発展道筋を見出すこと、これがフランス社会主義の出発点であった。」

＊阪上孝『フランス社会主義−管理か自立か−』

「我々は講義の中でしばしばイギリスを引き合いに出したけれど、それはフランスに比べてイギリスの産業組織の優位性を理解してもらうためであった。・・・しかしながら、機械力の大きな発展、つまり手段の大きな節約にすぎず、しかも産業組織全体の中には真の生命が欠落している。機械が多くの人々を容赦もなく踏みつぶしているのだ。かの国ではすべての社会関係は利益に基礎を置き、信頼は、産業活動の重要性と多様性から結果する一つの必要でしかない。すべての商業活動を支配する敵対の結果、・・・人々は、・・・すっかり狂わされる危険にさらされることになる。相互の間に何の関係も持たない個別的な銀行の破産によって、またある場合は、経営者、そしてなりよりも有閑者にのみ利益をもたらす機械の唐突な導入によってである。」

「フランスには秩序や統一の感情と習慣があるから、イギリスよりも長足の進歩を成しとげる準備ができている。・・・すなわちそれは、協同の感情における偉大な宗教的進歩は、そり結果として偉大な産業的発展を導くという原理である。」

＊『資料フランス初期社会主義思想』サン・シモン派のジャコブ・エミール・ベレール『信用改革』

2-2　人々を結びつけてきた絆の崩壊現象と、それに対する社会運動について

このことについての詳細は、白水社の宇野重規、伊達聖伸、高山裕二編著『社会統合と宗教的なもの―19 世紀フランスの経験』と『共和国か宗教か、それとも―19 世紀フランスの光と闇』を参照していただきたい。この本には、「あらゆる権威を否定した大革命後のフランスの新キリスト教から人類教、人格崇拝に至るまで、そこに幻出した「神々のラッシュアワー」状況を通じて社会的紐帯の意味を問い直し」、「政治と宗教をつなぐ新たな思想地図」を模索した 19 世紀の歴史が描かれている。

編者の一人である宇野重規氏は「一つの社会において統合が可能となるために、いかなる精神的基礎が必要か、我々はそのことを、19 世紀のフランスを事例に考えてみたい」と述べている。このことは、大変納得のできることである。このようなことを知るには、多くの大衆を巻き込んだ歴史を知るには、イギリスでなく、ドイツでもなく、

フランスの歴史によってであろう。

フランスの近代は、封建的な勢力とそれには対抗する人たちとの激しいぶつかり合いの歴史である。その旧体制を精神的に支えてきたキリスト教、カトリック勢力との100 年間かけた激しい闘いの中から、今日の公的な空間から宗教を徹底的に排除する政教分離政策(ライシテ)がなされた。20 世紀の初頭に、今日的なフランス社会が成立した。でも、この歴史は、実は、キリスト教に代わる何ものかを求めて左右に揺れた歴史でもあった。

宗教を批判すればするほど、逆に宗教の必要性を認識し、その不在を深く感じてしまった。宗教的なものを探し求めた思想家たちがたくさんいた。また、この時代の中で、思想が左右に激しくぶれた人たちが多くいた。思想家や政治家たちは、旧来の個々人を縛り付けていた伝統的な価値観から解き放つと同時に、人々の間に信頼に足る新しい絆を創造しようとしてきた。実は、1789 年のフランス革命は、それ自体ある種の宗教的要素をたくさんもっていた社会運動でもあった。「自由・平等・友愛」をスローガンとする普遍性をもっている。これは、世界的に通用するものである。この宗教には特定の神や礼拝形式もないが、民衆への信頼と社会変革と人類の再生への使命感がある。このような宗教色を持っていた。

宗教とは区別されるが、社会の存続にとって不可欠な精神的な要素、これをこの本の著者は「宗教的なもの」と名付けているが、この著作の中で様々な立場の人たちの思想と活動が報告されている。

例えば、ラムネ(1782-1854 年)は、次のように述べている。

「確かに現代は、我々の父祖たちが少なくとも同じ程度には知らなかった一種の精神的苦悩が存在します。彼らの場合は波に打たれても、つかまる不動点が見つけられました。今日、すべてが漂っています。何も根をもっていません。考えも心も、何に対しても結びつくことかできないのです。それはねすべてが変わり、すべてが新しくなる偉大な時代の特徴です。古い基盤は時代遅れで腐敗し、粉々になっていますが、まだそれに代わるものが観えません。もはや存在しない過去と、未だ存在しない未来との間で、住処としては雨風雪がいたるところに浸み込んだ、形をなさない廃墟しかありません。」 ＊『社会統合と宗教的なもの』より

＊ラムネは、司祭としてローマカトリックの熱心な信者、自由主義者、政教分離、社会正義の実現へと思想的変遷をした独自の思想家である。死に望んで神父の立ち合いを拒否。二月革命後、憲法制定議会議員となり反動的な政治に反対した。不平等と不公正に抵抗するよう、民衆に団結を呼びかけている。

〈サン・シモン主義者たち〉

サン・シモンの説を崇拝した人たちは、当時の経済的無政府状態は、資本家や所有者たちの個人的「欲と得」に委ねられているからであり、国民経済についての全般的視野の欠落を意味していた。だから、全体的視野を持って産業を配置して統率するこ

とが必要であるとして「全般的銀行制度」＊の実施を求めた。これは国民経済全体を単一の指導的中枢に組織していくことであった。社会全体を、一つの工場のように、・・・。個人主義と自由競争が批判されてその克服が「社会主義」の共通のテーマとなったのは、個人的能力や自助努力では、当時の労働者たちにとって、そこからの脱出は不可能であると見なされていたためである。個人主義は、彼等にとって、社会が統一性を失い、有機的な結合体でなくなったことの表れと解釈された。

＊「全般的銀行制度」については、先に引用した『資料フランス初期社会主義思想』ジャコブ・エミール・ベレール『信用改革』を参照。

しかし、これは、現代的視点から見ると、とんでもない思想である。もし、このような政治をする集団が政権を掌握すると、これはまさしく全体主義社会となってしまう。サン・シモン主義者たちにとって、よりよき有機的結合がなされている社会では、産業活動が指導中枢によって組織されるだけではなくして、人々の価値観、思想・道徳・宗教等も一つの権威的な価値によって組織され指導されるとされた。このような上からの精神的権威の再建というとんでもない恐ろしい社会は、サン・シモンとその主義者たちにとっては、彼等の言う新しい宗教は、人類の組織化を目指すための政治システムとされていた。

このような思想性は、ロシアマルクス主義、レーニンやスターリンの思想に通じるものがある。経済的後進国の特有の、・・・。このことは、プルードンによって激しく批判されたものである。

＊アンファンタン・・・サン・シモンの死後、サン・シモン主義の普及に指導的役割を果たした。彼はサン・シモン主義者を階層秩序のある教団に組織してその最高教父となり、パリ市中での宣教活動や機関誌などによって信者を増やしていった。1832 年集会条令違反のかどで禁錮(きんこ)刑を宣告されたが、翌 1833 年出獄。以後、彼の活動は産業社会の確立というサン・シモン思想の実現に集中され、スエズ運河建設のために国際的な研究組織を設立するなど一貫して努力した。またパリ―マルセイユ間の鉄道会社の重役として鉄道建設と会社の合併を推進した。

＊1860 年の自由貿易政策の実現に尽力したシュヴァリエや、そしてアソシアシオン(労働者生産協同組織)の結成へと向かった人たちの多くは、若い時サン・シモンの思想に共鳴してともに活動していた。

2-3　1789 年のフランス革命後の社会―アソシアシオンとプルードン思想―

1789 年のフランス革命は、中間団体の廃止・一掃、そして極度に中央集権化された国家の成立であった。職業集団や地域の意見を集約して表明する機能の喪失した社会システムでの最大の犠牲者は、労働者等の民衆であった。しかしこの中間団体の廃止・禁止は、最初は労働者大衆への弾圧のためというより、それまでのブルボン王朝の支配形態の全廃のための方策としてなされたものである。

それが 19 世紀のフランスにおいて産業革命が進行していくと、労働者大衆は生活苦等に対して、徒党を組むこと、労働組合を結成することを、職人組合を作ることが非

合法化されてしまった。それでも彼らは秘密裏に組織を作り助け合い闘った。そして厳しい弾圧がされた。でも、苦労して勝ち得た成果も、次の不況で失われた。また、内部対立で消耗したり、機械の導入や農村からの流入者との競争については、この団結・連帯も有効な手段にはならなかった。そこで、職人組合等に代わって彼らの利益を守れるものとしての新しい組織の設立が求められていた。彼らは、それを労働者による生産協同組合にそれを見出した。

特に、1840 年発刊の『アトリエ』誌では、アソシアシオンは、この時代の労働者たちの運動の合言葉となった。自らの利益を代表する組織は労働組合ではなく、自分たちの手で生産と経営を行う生産協同組織であった。これは労働組合の結成が禁止されていたためであり、またこの当時の労働運動を担っていたのが職人的な熟練労働をしていた人たちであったためでもある。彼らは小さな作業場で、自らの職人としてのプライドを持っていた人たちである。だから、自らの手で自己の解放を勝ち取ろうという理念を抱いていたのだ。

1830 年の 7 月革命で成立した七月王政の下でフランス産業革命が進展していた。農村から流入してきた未熟練労働者たちが、機械制工場労働者として低賃金・長時間労働・過酷な労働現場のなかで働いていた。それでも当時はまだ、熟練を必要とする小さな規模の工場で働いていた人たちの方が多数派であった。そして、この二つの労働者たちの利害は一致していなかった。熟練工の作る被服に対して安価な機械制の既製服が、建設業では未熟練の下請け労働者たちが、手間暇かけて作られた高級品は安価な規格品との競争がなされていた。多くの職種で、分業のさらなる進展、新技術の導入、労働のさらなるスピードアップ、つまり労働の強化が大きな工場ではなされていた。このような状況下では、意識ある労働者たちの行うストライキ戦術は、有効ではなかった。団結禁止法で労働組合が結成できなかったというだけでなくして、新規の労働者の流入と新技術のという状況下では、従来の多くの熟練工たちにとって有効な手段とはならなかった。これに対して、生産協同組合は、労働者が生産手段の所有者になることで、機械と新技術のもたらす利益を自分たちのものとすることを可能とすると考えられた。しかも団結禁止の「ル・シャプリエ法」の適用外であって合法的なものとなっていた。だから、当時の熟練工たちを中心とする労働者層にとって、この生産協同組合は社会的条件に適したものとなっていた。そして、これらの思想と運動は、フランス的「労働者社会主義」とも言い得る源流となり、後のサンディカリスムスの思想と運動へと続いていくことになる。

＊谷川稔『フランス社会運動史　アソシアシオンとサンディカリスムス』山川出版を参照。

これをサン・シモン主義者たちの「社会主義」と対比すると、その違いが分かる。サン・シモン思想の「社会主義」はあるべき理想の社会原理であった。社会と歴史を上から目線で説明する原理であった。社会と国家の統治者の思想である。これに対して「アソシアシオン」は、労働者たちの利益と要求を表し守る組織であった。社会の真の

主人公は自分たちであるという自尊心をもって社会全体の変革のプランを創り出そうとしていた。この二つは、向かうべき方向性が逆であった。サン・シモンの思想は一般大衆までは広がらなかったが、多くの知識人たちに支持された。これに対して、『アトリエ』誌は純然たる労働者たちによる新聞であった。サン・シモン主義は、エリート支配であり国家権力の肥大、そして集権的な経済の計画的管理をめざしていた。これは、労働者たちの自主管理・自己決定とは鋭く対立することになる。

＊アトリエ(仕事場の意味)誌の思想を要約すると、・・・。19 世紀の前半フランス社会でかたちづくられようとしているのは資本と生産手段を所有する資本家＝産業家たちの特権的な支配を生み出している「新しい封建制」であるとした。このような状況下で労働者たちは苦しんでいる。労働の権利を踏みにじられ、労働の成果に対する権利も取られてしまい、市民＝人間としては無知とモラルの崩壊で、自らの尊厳を傷つけられ労働者としての矜持(きょうじ)を喪失しようとしている。そこでこのような状態からの脱出として、生産手段の共有と成員の連帯・貢献に応じた分配を基礎とした労働者生産協同組合に期待した。

＊この当時の諸思想については、『資料フランス初期社会主義二月革命とその思想』河野健二編平凡社を参照。

さて、このような思想と運動のどちらも批判したのが、プルードンである。彼は中間団体の廃止・一掃された、そして極度に中央集権化された国家の問題を繰り返し指摘している。特に、1848 年の二月革命時には、ルイ・ブラン等の社会共和派に対して、政治革命より経済的な革命こそが社会でなすべきことであると、またそれは政府の手ではなし得ないと厳しく批判した。政治権力によって経済改革がなされると、巨大権力の国家と無力な個人という 1789 年のフランス革命後の事態を拡大再生産されると思われた。中間団体を排した平等主義は、全体主義的状況をさらに生み出してしまうと、・・・。

＊革命当時の臨時政府の閣僚であったルイ・ブラン思想の問題点、そして亡命へと至った経緯については、『1848 年革命の射程』的場昭弘、高草木光一編(お茶の水書房)を参照。

プルードンをアナーキストであり、無政府主義者としている方たちがいるが、それは大きな過ちである。当時のフランスのあまりにも中央集権的な統治システムの問題点を鋭く指摘しているのだ。そして社会に広がっていた思潮に対しても、・・・。彼はアナルシーを述べてはいるが、その意味するところをつかまなくてはならない。国家は必要ないなどとは述べていない。アナーキズムを無政府主義とするのは、誤訳である。

＊1789 年のフランス革命後は、徹底した中央集権的な統治システムとなっていた。この事例としては、ナポレオン三世の第二帝政では、選挙は政権への承認システムとなっていた。官選候補者への、内務大臣—知事—郡長—市町村長という任命制の人たちが、威嚇と報償による投票の誘導であった。

★プルードン思想をそのまま賛美してはならない。当時の社会状況と彼の個別具体の出来事を学ばなくてはならない。河野健二氏は、『プルードン研究』(岩波書店)の中の「プルードン主義の背景」で思想史研究の在り方について、下記のように述べている。

思想史的な研究を規定している一つの条件は、思想史上の問題は思想の枠の中では決して解かれないということである。思想の中に「科学的」な思想と非科学的な思想、あるいは正しい思想と間違った思想とがあって、・・・なぜなら、思想はいかなるものであろうとも、現実に対する価値的な対応であり、ある一つの対応は別の対応を必ず予想している点で相対的たることをまぬかれない。従って特定の価値観を「科学的」と認めて、他を退けることはできない。(＊科学的たろうとする思想であるとしてもそれは)思想の枠の中にとどまるものであって、それ自体が科学的であるはずがない。
(＊そうなると個々の思想は自己の正当性を主張するから、相対化する可能性が内部に見えてこない)従って、思想史が個々の思想の無意味な羅列に終わらないためには、どうしても思想の外に出て、思想の外部にある客観的な状況―社会とその歴史―とのかかわりの中に個々の思想を定着し、つなぎとめる作業を必要とする。

＊上山春平氏は同著の中の著作解題「19 世紀における革命の一般理念」(1851 年)の中で、次のように述べている。

*プルードンの叙述ぶりは、マルクスやウェーバーのような体系的な理論になじんだ読者には、何となくとらえどころのない、思い付きの羅列のような印象を与えるかもしれないが、彼のかけがいのない取柄は、**幼少からの勤労体験を通して身に着けた確個とした不動の革命精神と、観念的な色眼鏡によって惑わされることのない的確無比な現実認識であり、その堅実な庶民的常識に支えられた革命精神が、自由への熱烈な志向によって貫かれている点であろう。***

さらにアソシアシオンについては、プルードンは「連帯」とか「協力」という非経済的意識を賛美しなかった。精神性を重視して、それを賛美することで成立する経済活動を厳しく批判している。

「こうしてプルードンは、1847 年後半にはアソシアシオンに対する自己の態度、言い換えればプルードン自身の社会変革のビィジョンを確立していた。つまり来るべき革命は政治革命ではなくて経済革命でなくてはならないこと、その経済革命は相互性に基づいて遂行されること、そしてその相互性が交換＝流通にかかわる原理である以上、経済革命は流通と、その基本的条件の一つである信用を課題とすべきものであること、などであった。」＊阪上孝『フランス社会主義』

プルードンもアソシアシオンを株式会社に代わる新しい原理、モデルと考えたが、人間の相互関係は交換的正義に満ちたものにすることを考えていた。分配的正義ではないことに、注目しなくてはならない。当時のアソシアシオン主張者たちは、共有制の原理を絶対視して家族的な関係性をモデルとする間違いをしていた。

プルードンは、次のように述べている。

「彼らは美しい情熱をもって共同の労働をうちたてることに熱中したが、彼らが作ろうとしたものは、一つの信仰、一つの宗教にほかならなかった。」

＊プルードン「株式取引所における投機家提要」(1854 年)より

二月革命後に設立された生産協同組織のほとんどは消滅してしまったという歴史

がある。そこでプルードンは、生産者の自由と適合する労働者アソシアシオンを創造しようとした。そのような協同組織契約を求めた。協同組織の原理は「連帯」にあるが、この連帯は利害とか必要という外的な条件によって成立するものであって、これを自己目的化してはならないのだ。人は協同組織を維持発展させていくには、あまりにも自己本位的であることを、忘れてはならない。人は、眼前の欲得に深くとらわれている存在であることを忘れてはいけない。**連帯という精神性に思い入れ過ぎてはならない。連帯ということを、目的化してはならない**と述べている。そして、これを目的化すると、その先にはこの連帯を推奨している権威への服従となってしまいかねない。これについては、日本の今までの左翼組織の実態を振り返れば納得できることであろう。＊太字は私が強調のためにした。

「・・・階級や党派性の名の下に行われた運動の宗教化よるこの問題の見せかけの解決がどれほどの悲劇を生んできたかを知っているだけに、・・・。」「当時の社会主義は、理想社会における、またそれを準備する組織における共同性と個体の調和を手放しで楽観して、この問題に重きを置かなかったし、全体への献身の道徳的要請によってこの問題そのものを消滅させようとしたのであった。」

＊阪上孝『フランス社会主義』Ⅲ「プルードンの社会革命論」

所有は生産が人々の労働をどのように組織してなされるかによって、その意味を問い直される。そして、協同的組織の在り方も、連帯のあり方も大きく規定される。

*「労働者の間の連帯は、**彼らを結びつけている経済的関係の緊密さに比例すべき**である。したがってこのような関係が認められない場合、あるいは無視しうるほどのものである場合には、協同組織を考える必要はないし、これに反して、このような関係が優勢で、自由意志を抑制している場合は、協同組織を考えるべきである。」* ＊プルードン『19 世紀における革命の一般理論』(1851 年)より

プルードンは、このようなことを 1848 年のフランスの二月革命の渦中にいて思考した。暮らしに困っている人たち、労働者や農民は、アソシアシオンの結成に夢中になった。しかし、事態はうまく推移しなかった。

「アトリエ(＊仕事場の意味)」誌の中心人物であったコルボンは、この第二共和政の挫折後 15 年(第二帝政の後半、フランスの労働運動の蘇生期)に次のように回顧している。

「・・・これ(＊連帯を重視し個性を抑圧する)では、実際上、新しい体制を実現するためには、現在の人類とはまったく別の人類を必要とする、ということになってしまう。」

「・・・人は一般に、人間の尊厳の念に由来する輝かしい成果を魂の堕落と見なしてきた。」

＊『パリ民衆の秘密』コルボン『資料フランス初期社会主義―二月革命とその思想』より

「連帯」や「自己犠牲」、「協力」という精神性の強調をしていた当時の「労働者協同生産組織」の在り方について、コルボンはこのように述べている。これは、「連帯」や

「団結」という精神性を強調するだけでは、社会経済はうまくいかないということを、表している。彼は当時国会議員になっていて「労働者アソシアシオン助成法」の成立に向けて努力した中心人物である。その彼が、後にこのように総括している。

プルードンは、彼のアソシアシオンの理想的形態として次のように述べている。

「可能な限り小さく相互に独立した諸グループによるアソシアシオンの分割—これが自由の原理だ。これが節約と安価の原理でもある。管理の集中と、非常に不均等な産業を単一の指導のもとに結合することが、費用の低減をもたらすと一般に考えられている。これは間違いだ。というのは分割すれば、官僚制は必要でなくなるからだ。」

「協同組織は、・・・分業、競争、信用、機械そのものと同じく、<u>経済的手段に過ぎない。</u>」 ＊プルードン「株式取引所における投機家提要」(1854 年)より

しかし、多くの人々の共同・協力なくして成し得ない産業では、例えば大工場、鉱山、そして鉄道等では、当然大きなアソシアシオンの結成を目指さなくてはならない。これこそが、プルードンの言う「*経済的関係の緊密さに比例*」して、・・・。そしてその上で、アソシアシオン諸活動の成果が出た後で、社会構造が変化した後で「*可能な限り小さく相互に独立した諸グループによるアソシアシオンの分割*」を目指さなくてはならない。

プルードンは、理想としては、職能を身につけた諸個人が小作業場で働き、独立して相互に助け合い・協力し合う協同組織を思案している。作業場の構成員は自由で独立して、作業場の運営管理に参加して自発的な結合関係をつくり出していることを・・・。また、農業や小さな企業活動では、協同組織をことさら無理して結成することはない、と述べている。また、このような小さな作業場の存続と繁栄の物質的条件を提供する「交換銀行」を提案している。つまりは、自発的な連帯の場としての中間団体の設立を目指したと言える。中間団体を社会全体へのマイナスとしたのはルソーである。だから、プルードンはルソーを激しく非難している。また、「所有」ということについての問題は、所有の廃止ではなくして、所有の均衡を、さまざまな所有形態を組み合わせて、それを可能とする社会システムを構想していた。

彼は「所有は盗みである」と『所有とは何か』(1840 年)で述べていても、この言葉は私的所有を否定はしていない。この言葉は所有ということを前提にして、「所有は所有の侵害である」と言っているだけである。私的所有は他の所有から奪うしか成立しないという意味であり、私的所有を積極的に肯定する論理が見いだせない、という意味である。だから、批判はしても、私的所有の否定を意味していない。だから、彼は別の箇所で、所有は自由の基礎であるという意味のことも述べている。

<農業労働について>

土地所有という土台に基づく農業労働は、その自然な尊厳をもって現れる。それは、あらゆる仕事の中で、道徳および健康という点から見て、最も高貴で、最も健康的な仕事であり、知性の訓練という点から見れば、最も百科全書的な仕事である。こ

れらすべてのことを考慮すれば、農業労働は組合形態を必要とすることの最も少ない労働である。むしろそれを最もきびしくしりぞける労働である。

＊『19 世紀における革命の一般理念』

商品経済の展開の中で誕生してきた個人主義は自足的個人を想定して、そのような人たちによって社会が形成されているとする社会契約説に基づくものである。これは「市場での貨幣による交換関係」が主導的なものになることで封建的な支配・被支配関係からの解放をしようとするものであった。これを言い換えれば、集団とはこのような自足的諸個人が自分の利益を求めて一時的に関わる場であって、便宜的なものとされてきた。このような意識で日常生活がなされているのが資本主義社会である。これに対して、プルードンは中間団体が個人と社会に対して大きな意味があるとした。家族の廃止論に対して家族を正義の炉床とし、そして家族制度を存続させるために相続財産を承認し、職場や地域社会を土台にして社会展望をした。一見すると、彼の主張は革新ではなく保守的と理解されたりしてきた。彼の言う人民とは、生産の自立的な基盤(家族や物的な所有)を有し、思考する物と情報の生産者であった。だから、人々の自発的な願望を、例えば宗教を肯定している。人民は、失うものを何も持たない存在ではない。失うものを持つ生産者であり、社会の創造者であるとしている。

＊プルードンの思考については、彼の言う「アンチノミー」についての理解が必要である。

「たしかに初期の私的所有論　では、社会を生産者と不労所得者という根源的分割によって思考する傾向が顕著であった。しかしそのような対立を生む私的所有が全否定されることはなくなり、上述の通り他の制度との「組み合わせ」のもとで再検討されるし、晩年の「農工連合」もまた、対立線の引き直しといえよう。これらは本稿で論じてきた弁証法的発想の成熟に対応していると考えることができる。」金山準「プルードンと弁証法」より

プルードンの「アンチノミー」については、「経済的諸矛盾の体系、あるいは貧困の哲学」を参照。このことについては、ここでは記載しない。

＊プルードンの家族観・・・「家族こそ、社会経済の核心であり、所有の本質的な対象で社会秩序の構成要素であり、・・・。家族がなければ、労働者は働くのを止め、むしろ詐欺師か盗人になろうとするのではないか。反対に家族があればこそ、労働者は警察の束縛に耐え、税金を払い、独占によって抑圧されても、無一文にされても、生皮をはがされても我慢し、・・・。家族がなければ社会もなく、労働もない。」「経済的諸矛盾の体系 13 章(斉藤悦則訳　平凡社)

〈その後の歴史の歩み〉

この革命のすぐ後になされた普通選挙(制憲議会選挙)で選出された多数派(社会主義派に対抗する共和派と保守派)は、「労働権」の保障ということを、労働者を「賃金奴隷からの解放する」という理念を変質させて、賃金労働者を維持する政策とした。革命の年 1848 年の暮れ、コルボンは、政府委員を辞任することになる。議会の多数派によって、「労働権」が否定された。憲法の第一次草案にあった「労働権」は、削除

された。2 月 24 日の革命の翌日 25 日に宣言文に書かれたことは、ゴミ箱に捨てられた。共和派と保守派にとっては、労働権は大都市に群がる怠惰な労働者たちへの賃金支払い程度の理解であった。労働権に代えて慈善を、権利に代えて義務と一時的な救済を、というのが彼等の見解であった。「労働権」は、社会の本質的権利である所有権への侵害とされてしまった。この議会ではプルードンも国会議員であったが、彼の提案議案も圧倒的な数で否決されている。アソシアシオンは、再編された国家権力によっても、押しつぶされた。

そして、次の年の立法議会選挙では、7 月王政時の支配階層が権力を掌握した。48 年 2 月に労働者たちとともに革命を起こした共和派も、少数派となった。革命後すぐに普通選挙を実施したために、田舎の支配体制そのままに、大地主層、企業家たち、そしてカトリックの勢力が多数派となってしまった。地方の多くの有権者はその地方の名士に言われるままに隊列を組んで投票所に行き、言われるままに投票した(トグヴィル『回想録』)。その結果、2 月革命は完全に押しつぶされた。社会システムの変更をしないままで選挙をすると、このような結果となる。当時、結婚式に自分で署名できない者が 1831 年に 53%、1854 年には男 34%、女 46%であった。それに、パリ周辺のフランス語の通じない人たち、地方がたくさんあった。

「・・・農民は当てにならない公的扶助、ましてや大都市の下層民が要求する社会保障に頼る前に、慈善を励行する自治体の長や領主、あるいは聖職者をわが父と呼び、これらの伝統的慣習的存在に政治的委任を与えたのである。」

＊『1848 国家装置と民衆』ミネルヴァ書房　高木勇夫「二月革命と普通選挙」

4 月の選挙によってえらばれた制憲議会が政治的に白紙の新人たちによって担われたのではないのだ。選ばれた議員の多くは、旧来からの直接税 500 フラン以上の高額納税者たちであり、このような政治的階層は 7 月王政期から政治活動を続けて来た人たちであった。

当時の革新的と言われていた人たちは、このような地方の実態について、農民たちの現状について甚だしく無知であった。西川長夫氏は、次のように記述している。

「大衆は常にその語の定義によって政治的前衛や知的先進分子よりも「無知」であるのだから。・・・ルイ・ブランには自己の選民意識に対する自覚や反省がまったく欠如している。・・・・。

・・・そもそも農民蔑視を捨てきれないルイ・ブランの社会的共和国など、農民にとってどれほどの価値があっただろうか。・・・。

＊『1848 国家装置と民衆』西川長夫「1848 年革命とフランスの農民」

議会はさらに反動化し、出版・言論の自由、集会・結社の自由に大幅な制限をし、さらに選挙資格さえ制限を加えていった。普通選挙は、廃止された。だが、このような旧来からの保守派も、ナポレオン三世のクーデター(51 年 12 月)によって壊滅させられた。

このような旧来からの保守派の政治勢力が落ちるのは、1871 年の「パリ・コミューン」後の第 3 共和政においてである。この第 3 共和政において、「ライシテ」、徹底した政教分離、公的部門からのカトリック勢力の一掃が 20 世紀初めになされた。フランスは 1789 年のフランス革命の後、100 年かけて絶対主義王政時代からの鎖をやっと払いのけることができた。しかし、旧来の保守勢力を退けた第三共和制の多数(共和)派は、そのために、今度は社会主義派(フランス社会党、サンジカリスムスの潮流)に対して保守派となってしまった。

＊この当時のフランスの保守勢力とその思想については、『1848 国家装置と民衆』の中の小林清一「二月革命とフランス保守主義」参照。

農民にとっての 1848 年の二月革命

当時の人口の 3/4 は、農村人口であった。しかし、当時の、そしてそれ以後の歴史家たちも、そして政治家たちも、農村に住む人たちの立場で政治や歴史について考えようとはしなかった。西川長夫は、『1848 国家装置と民衆』ミネルヴァ書房「1848 年革命とフランスの農民」の中で次のように述べている。*＊斜体*

「都市住民のあいだに広がった農民蔑視の感情を、歴史家たちもまたいつの間にか無意識に共有しているのではないだろうか。そしてまことに不幸なことに、歴史家が進歩的であり革命中心の歴史観に引き寄せられればられるほど、歴史は都市中心になり、農村軽視の傾向は一層助長されていったのではないだろうか。農村と都市の分業は農村の犠牲において進行したのであった。農村はしばしば一国における第三世界であり、都市に対するまさしく周辺であるとすれば、虐げられた民衆への共感を表明している研究者たちの間でさえ、農民がともかく忘れられがちなのは奇妙な現象である。また農民への言及がなされている場合でも、農民の立場からではなく都市の住民の立場からの言及が多いように思う。」

「これは事実、農民たちの無知と保守思想体質がなければ二月革命は、・・・の意識が多くの歴史書には繰り返されている。そして、社会の進歩と革命を阻む悪者たちにされたが、では、彼等の言う革命とは誰のためにしようとしていたのであろうか。」

まあ、このような無知で地方的に孤立している未開人のごときに見なされた農民たちが、この時代都市の住民と農村の住民は、同時代人とはみなされていない人たちが同じ国民として統合されるのは、19 世紀後半から 20 世紀前半においてである。このことは、日本社会にも当てはまることである。だから、この 1848 年当時は、まだまだ近代的国民国家の一員としての国民意識を持っていないというのが現実の姿であった。

さらにもう一つ、次の事を忘れてはならない。田舎から都会に出て来て社会主義者となったプルードンは、農民の意識について、次のように書いている。田園生活を賛美しながら、その一方で農民には否定的な評価をしているプルードン(1809-1865 年

56 歳没)の「矛盾的見解」とも言える言説を見よう。農本主義者橘孝三郎等の人たちと異なって、良い面も悪い面も鋭く見つめるリアリストの目がそこにある。彼は、体系化の意欲を先行させた社会科学者や思想家たちの陥る過ちをしていない。農民への視線は暖かく、そして厳しい。悲しいかな、ここに書かれている農民の姿は、この 21 世紀の日本社会にも当てはまるようだ。卑しい小ブル根性そのものなのだ。農民たちは、このような意識状況下にある。だから、現状の政治意識は、保守的なのだ。革新勢力にくみすることは少ない。これは、現代日本においても同じである。

プルードンは私的な手帳(1847 年 11 月ごろ)に次のように書いている。小さいころから接してきた農民たちに対して、きわめて辛辣で批判的なまなざしを投げかけている。

＊斉藤悦則氏の HP より　*＊斜体*

「農民の思想は人民の思想ではない。ド･バルザック氏は農民の醜悪さを描き出したが、それはすべて当たっている。フランスの人口の大半をしめるこの農民。かれらはもっともおぞましく、もっとも利己的で、もっとも心が狭く、もっとも金銭に汚く、もっとも保守的で、もっとも偽善的な階級であり、もっとも過激な所有者なのである。この連中の心根の卑しさによって、地主や工場主や大商人たちの所有に対する真正面からの攻撃は妨げられている。

陰険な土地どろぼう、商取引ではずる賢くたちまわろうとするこの農民こそ、国民の本当の腐敗部分である。体制はそこから力を得、それによって支えられている。･･･進歩にとっての真の障害、それが農民だ。農民と労働者は、中世時代の農民と貴族と同じくらい対立しあっている。いまでは農民がかつての貴族に相当する。･･･この連中をやっつけて封じこめる手だてを見いださないかぎり、農民をひきつれたまま進歩らしい進歩を獲得するには百年以上かかるであろう。逆に、その手だてが見いだされたならば、進歩はまたたく間に得られよう。」

＊下線は強調のため青野がした。

さらに、次のようにも書いている。*＊「革命と教会における正義」1858 年*、斉藤悦則氏の HP

「農民ほどロマンチシズムや観念論から縁遠い人間はいない。現実にどっぷりと浸って、ディレッタント＊などとは正反対の生き方をしている。田園風景をどんなにすばらしく描き出した絵でも、それに 30 スウも支払うのは捨て金だと思う･･･。白状すると、わたしも昇る朝日や沈む夕日、月の光や四季のうつろいを描いたものの良さが楽しめるようになるまでには時間とそれなりの学習が必要であった」

現実の多くの農民は、自然の織り成す景色に心（＊カントのいう自由な美意識)が動いていないのだ。悲しいかな、これが現実である。四季の移り行く自然の景観などについて、私は近所の人たちと会話などしたことがない。自然を愛するが、その繁殖力以上に自然の魅力に心が動かされることはない。芸術家の眼で自然を摘み取らない。これは、無理な事であろう。

＊「ディレッタント」とは、芸術愛好家のこと、芸術研究の学術的専門家と異なり、趣味で芸術品の蒐集（しゅうしゅう）、鑑定、研究を行う人たちのこと。半可通の芸術知識をひけらかす人という意味もある。

このような意識の農民たちにとって、パリの革命を素直に受け入れることなどない。当時の農村に暮らす人たちのことを理解していない自称革命家たち、社会主義思想家たちの言説が、農民たちに届くはずがない。反発しかもたらさなかったであろう。

さて二月革命の導引となった一つは、47-47 年の農業危機である。天候不順、病害が激しく、穀物の収穫が極端に少なく、値段はそれまでの二倍以上にもなっていた。さらに貧民たちの食糧であったジャガイモもアイルランドのジャガイモの病害がフランスにも及んでいた。保守的な意識の中にいた農民たちも、激しく揺り動かされていた。このような情勢下で革命は勃発した。

しかし、この二月の革命騒ぎ、そして淡い期待感は、臨時革命政府の打ち出した農民への課税で幻滅へと変化した。直接税 1 フランにつき 45 サンチームの付加税が課せられたのだ。農村からの収奪で政府の財政を運用しようとした。ここに、彼等の農村と農民への無理解がはっきりと現れている。これと同じことを、明治政府もしている。

＊付加税とは他の租税の税額を課税標準として課される租税で、サンチームは補助通貨単位。1 サンチームは 1 フランの 100 分の 1。つまり、税負担は約 **1.5** 倍となる。

西川長夫氏は、さらに次のように書いている。

「48 年革命は都市と農村の矛盾対立をこの上なく明確に示した最初の(そしておそらく最後の)革命であった。農民は 48 年革命を通じて都市の理想と同時に都市の独断とエゴイズムを知ったのであった。48 年革命の思想的意味を、48 年 2 月以降の最初の数週間のあいだに輝いた都市の理想の中だけにさぐるのは、おそらく片手落ちであろう。「保守的」な農民の「保守的」な反応の中には、文明と資本主義に対するよりラディカルな拒否の姿勢があり、権力の本質に対するより深い洞察があったことを、第二共和政を通じての農民たちの反抗(＊繰り返された武装叛乱等)は物語ってはいないだろうか。」 ＊「繰り返された武装叛乱等」は私の補足

＊再度、はっきりと私は述べたい。マルクスの『ブリュメール 18 日』だけで、この 2 月革命やルイ・ナポレオンの帝政を評価してはならないと!! ましてや、エンゲルスが書評として述べている史的唯物論を適応した歴史叙述でもない。議員代表制の大きな欠陥を指摘している書物なのだ。さらに付け加えると、ここに記載したことは、追伸 1<18・19 世紀のフランス社会の特質>に関連している。

3 アソシアシオンの意義、資本主義の変容、そして縮小社会において!!
<ノスタルジーとパトリチズム、未来社会の萌芽>

以下の文章はある方からのメールである。ここに未来社会展望の萌芽がある。

小学校時代，昭和 30 年代は町のいたるところは個人商店と町工場でした。樋を作っている家，建具を作っている町工場，鉄鋼加工工場もあり，学校帰りに 1 時間も作

業を眺めていました。それぞれ父親が経営し，それなりのプライドを持って仕事をしていました。その後高度成長でそんな個人経営の工場はすべてなくなり，個人商店もスーパーマーケットに負けて姿を消し，経営者は雇われの身になりました。そこでは大きな組織のもとで上司の指示通りに働く労働者であり，ボロクソに言われ，プライドなどは消し飛んだでしょう。子供が見る父親，母親は上司の言うままに動く労働者になり，プライドを持って仕事をする人間ではなくなり，自信を喪失した両親になってしまった。すべてがそうだとは思いませんが，確率的には高いと思います。背景は資本主義にあります。現状は資本主義の強欲が限りなく膨張し，個々の人間は振り回されている状況，と考えています。

ここに書かれていることこそ、ノスタルジーとパトリチズムそのものであるが、ここに目指すべき未来社会の在り方の萌芽がある。そのためには、政治が強欲資本主義を規制していくことが大切な政策となるであろう。このような方向性の向こうに、より良き社会が形成されるであろうことは間違いない。でも、身も心もとろけるようなパラダイスなんていうものは、何時まで待っても到来しない。このような覚めた意識も必要なのだ。蛇足ながら付け加えたいが、・・・。

さて、郷愁(ノスタルジー)とパトリチズム(郷土愛)の装いで未来社会が到来を希求することは、ある面当然であろう。大衆は、現代社会の問題を論理的に思考しようとして本を読んだり耳学問をしようとはしない。そのために、どうしても「今だけ・自分だけ。そしてお金だけ」の視点で考えてしまう。問題が立っていないのだ。自分がどのような生き方をしなくてはならないかなんていうことは、このような思考回路で考えない。そうなると、物事を考え判断する基準は昔の事柄との、自分が体験した限りの昔の人たちの生活との比較を通して、現状の在り方を、自分の不遇さからの脱出の方法を思考することになる。だから、郷愁(ノスタルジー)とパトリチズム(郷土愛)という保守思想で装いをしてくる。だから、私たちは、このような保守思想を頭から否定するのではなくして、この中に含まれている新しい社会構想の芽をつかみ取り、視線を未来へと推し進めなくてはならない。今までの歴史を観ても、より良き社会の到来には、それまでにたくさんの人たちによる視線を未来へと推し進める下準備がなされてきていたことを忘れてはならない。それができていない場合は、そして多くの人たちが自らの階級的立場に基づく自負心の希薄な場合は、社会におろしている根が枯れてしまい消費生活に漂っているだけでは、自分のしている日々の仕事についてのプライドを持っていない場合は、ファシズムの再到来となる可能性が高くなる。

＊ファシズムの再到来については、2021/8/13 の毎日新聞に、中島岳志氏(東京工業大学)が次のように述べている。大変よく分かる言葉である。

「結果(コロナウイルスの爆発的拡大)が予測できたのに引き返さず、思い込みと楽観論に頼った。まるで、新田次郎の小説「八甲田山死の彷徨」だ。」・・・いったん始めてしまったことだからと前進し続け

た。・・・加えて怖いのは、五輪をめぐる世論だ。開幕まで 7 割方が批判的だったが、始まってしまえば「やってよかった」という空気になった。今後、さらに感染拡大が止まらなければ、「やらない方がよかった」へ反転するのではないか。世論は・・・空気でコロコロと変わる。政府も「感動物語さえ与えておけば世論はなびく」と思っていたからこそ、開催を強行したのだろう。

こうした世論と政府との不健全な関係が、かつてのファシズムを支えた。ファシズムは強固なイデオロギーではない。気分や雰囲気に流される大衆と、それを利用する為政者との共犯関係こそが実態だった。」

トランプ、安倍、ヒットラー等のファシスト達は、社会の中に分断を意識的に作り出し、宣伝して政権を掌握した。安倍は近隣諸国への批判を繰り返し述べたり、自分に賛同しない人たちに反日的とレッテルを貼って批判することで自己正当化し、右翼的な人たちの支持を得て来た。

〈社会の大きな転換期に生きて、視線の変更〉

1831 年フランスのリヨンの絹織物工たちは「働いて生きよう、さもなくば闘って死のう」の合言葉で立ち上がった。この言葉には宗教がかった運動であったことを示している。この絹織物工たちの闘いは、プルードンの若き日の思想形成に大きな影響を与えたものであった。この絹織物工たちの言葉は、商人たちや権力者の支配の網からから自立して、職人・労働者として自らの仕事に誇りをもって生きようとしていることを意味している。これは、自分たち自身の日々の仕事に、している労働に、その結果としての絹織物に自信と誇りを持っているといことの表れなのだ。もっと述べれば、彼等は自分たちの事を、他の仕事をしている人たちに対して、別の階級・階層の人たちに対して、自立した階級の一員として生きようとする意志、「自負心の表れ」の表れでもあった。

プルードンにとって社会的な連帯とは生産者たちの職能的な活動に基づき、その労働の交換を通して実現される結合関係の事であった。例えば、ある専門的な仕事をしている人が自分の日々の活動の社会的な位置を自覚することは、それは誇りであり、他に対する独立の根拠となるであろう。これが「自負心の表れ」となる。この一個人としての独立心は他者との関係の中で成立しているのだから、相互に連帯的である。職能に基づく自由と連帯、これがプルードンの社会の理念像であった。プルードンの述べている人たちは、失うものを持たない人たちではない。

七月王政の下では、労働者(職人)たちは、厳しい監視と抑圧と貧困の中にいた。そのために、彼等は傷つけられた尊厳の回復への熱望を強く抱いた。自分たちによる尊厳の回復の理念は、社会主義思想を受け入れる基盤となっていた。1848 年 3 月 22 日、革命後ほぼ一月後、彼等は祭礼服と徽章を付けて一万人を超す人たちがパリ中を示威行進した。尊厳の回復への熱望を示している。

しかし、自分の生産手段を持っている人たち、このような人たちは巨大資本の前に、

次々と没落していった歴史がある。さらにしかしであるが、私たちの理想とするのは、やはりプルードンの述べているようなアソシアシオンが結成され、その活動を中心として社会経済が成立している社会であろうことは、間違いない。

さて、ここで大きな問題がある。「自負心の表れ」と書いたが、悲しいかな、この自負心が大きく欠落しているのが現代社会である。農民として、そして職人として、労働者としての自負心が極めて薄くなっているのが現代社会である。日々のマスコミによる情報に流され、消費生活に漂う浮草的存在となっているのが、昨今の多くの人々の意識である。この現状からして、プルードンたちの抱いた理想はなかなか実現しないことになる可能性が高い。こうなると、繰り返して書くが、ノスタルジーとパトリチズムによる意識は、より良い社会へと向かうよりファシズムへと向かってしまう可能性が高くなる。ここに大きな問題がある。消費生活に喜びを見出している人たちに、多くを期待することは難しい。このことについては、今後の課題であろう。社会に根を張ることのできなかった、自分のしている労働に誇りを持てない人たち、つまり「根こぎ」されてしまった人たちには、どう働きかけたら良いのであろうか。これは、難題である。

例えば、農業を、暑い日差しの中で汗を流して働くことを、人々は嫌がる。従来の自分の田を所有して農作物を収穫していた人たちは、そしてその子供たちは、もう農業をしたくないとの意識である。耕作放棄地がいたるところにある。彼等は、働かない。額に汗して働かない。農産物が低価格であるため生活が成り立たないということは理解できる。でも、兼業農家としては今でも成り立つのであるが、それをしない。もう、農民としての根が枯れている。

ここからもう少し思考してみよう。そうしないと、未来展望はなかなか開けてこないことになる。社会経済の成長への、物質的に豊かになる事への生産労働を通しての「自負心」だけに目を取られていては、これからの社会を切り拓くことはできないであろう。そう、私たちの視線の変更こそが大切なのだ。まずは、社会の在り様が、資本主義経済の在り方が 20 世紀には、19 世紀とは異なってきたということを認識しなくてならないのだ。このことについては、見田宗介氏の著作からの引用を通して、考えていきたい。

3-1 情報化/消費資本主義

＜ 現 状 認 識＞

＊以下の文章は、見田宗介著作集 1「現代社会の理論」2011 年(岩波書店)より引用。特に明記しないのはこの著作からである。*見田氏の文章は斜体*で、下線と太字と赤字は青野がした。

「2006 年にある種社会的な話題となった映画「ALWAYS-三丁目の夕日」では、1958 年という、高度経済成長始動期の東京を舞台としている。この映画のほとんどキャッチコピーのように流布した標語は、「人々が未来を信じていた時代」というものであっ

*た。「未来を信じる」ということが、過去形で語られている。1958 年と 2006 年という 50 年くらいの間に、日本人の**「心あり方」に、見えにくいけれど巨大な転換があった。**」*

*「1950、60、70 年代くらいまでの青年たちにとって、現代よりもずっと素晴らしい未来、よい未来、豊かな未来が必ず来るということは、ほとんど当然の基底感覚であった。それがどのように素晴らしい未来、であるかについて、さまざまなイデオロギーやビジョンが対立し、闘われていた。21 世紀の現在、このような「未来」を信じている青年は、ほとんどいない。**人々の生きる世界の感覚の基底の部分に、沈黙の転換**はあった。」*

この意識転換は、NHK 放送文化研究所が 5 年ごとに行っている「日本人の意識調査」にはっきりと現れている。この二つの時代の明瞭な変容を、少なくても次の二つの領域で見ることができる。

「第一の顕著な変化は、〈近代的な家父長制家族の解体〉と呼ぶべき一群の変容である。・・・ナショナリズム、天皇制、職場や地域の関係の意識などよりも以上に、「家族」と関連するジェンダー関係の理想と欲求とモラルの領域に集中してきわだっている。」

これまでの男女の、夫と妻のはっきりとした役割分担は、経済成長の推進力となっていた。しかし現在は、専業主婦と企業戦士による家族像というものではなくなってきた。そして、性規範、性的関係は結婚や婚約を前提としてのみ許される規範は、すっかり消え失せてしまった。従来の家族観は、大きく揺らいでいる。生殖とセックスは大きくかけ離れた。家族は大きく変化し、瓦解して来ている。

＊これについての私の意見は、縮小社会研究会の HP にある「家族の復権　多様な形態の家族」を参照

「・・・第二の大きな兆候は、〈近代合理主義的な世界像のゆらぎ〉というべき変容である。」

あの世や奇跡、そしてお守りやお札の効用を、それとはなしにそれなりに信じようとする傾向が強くなってきている。科学の発展に期待することが、薄れている。そのため、神社や寺にお参りすることへの抵抗感が薄れている。精神の自律・自立を求める意識(人生の**羅針盤**作り＊)が減退してしまい、その時々の流行に敏感に反応する**レーダー**機能＊ばかりを高めている。このような意識状況のため、怪しいカルト宗教が流布しだしている。

＊**レーダー機能**と**羅針盤**、これについてはリースマンの「孤独な群衆」を参照

さて、人々の生きる世界に対する感覚の「沈黙の転換」がどうして起こったのであろうか。私なりに考えられることは、二つある。一つは、若者たちが「情報化/消費資本主義」の中に漂っているためであろう。これはまさしく「情報漬けの便利さ」ばかり求めているためである。私たちの青年期は、今と比べて情報は限られていた。情報が多すぎない方が、未来は明るく見えるのだ。実際は大苦労の連続であったが、・・・。今の若者は詳しく知りもしないのに、いろんな情報は次々と飛び込んでくる。人生の苦労はしてみないと分からないのに、初めから意気消沈している。子供のうちから未来に絶望しているとも言えよう。女子高生が自分の事をオバサンと言う。便利さを求めすぎ

て、他の人たちと比較(レーダー機能)ばかりして不幸になっているようだ。もっと便利な、もっと素敵なモノがどこかにありはしないかと探し回り、心が落ち着かない。情報と、うすっぺらな便利さに振り回されているのではなかろうか。そして、額に汗して働くことを嫌がる。これはもう、日本社会の崩壊の前兆であろう。

もう一つは、私たち(青野、1951 年生まれ)の時代は、今貧しい生活をしていても、いやそれ故に、未来には豊かな生活をしようと頑張ろうとする意思があった。未来は漠然とはしていたが、良いことがありそうだと期待した。思想の力が生きていた＊。また、戦後の経済成長によって、社会的流動性が極めて高かった。貧富の格差は明らかにあったが、未来に期待していた。この期待感のため、露骨な格差を絶望的なものとする意識にとらわれなかった。田舎では農地解放によって、戦後の民主化の改革で、貧富と家柄等による差異が小さくなっていた。社会が、大きく変化していっていた。自分の周りの環境が次々と年々変わっていっていた。戦後日本の新しい家族は、ちゃぶ台の代わりにミカン箱一つの生活から出発した。炊飯器を手に入れ、テレビと冷蔵庫を手に入れるために懸命に働いた。

＊思想の力の弱体化、つまりこれは「近代文学(小説)」の役割が終了したということ、主体性の確立に向けて苦闘する若者がなくなってきたということであろう。そして、文学が倫理的・知的な課題を背負うがゆえに影響力を持っていたかつての社会状況ではないということである。このような意識の転換を認識しなくてはならない。

これに対して、今の青年たちにとって、自分の周囲の生活環境の変化が私たちのころに比べて少ない。日本の社会経済の大きな成長は、もはやない。この変化しているという体験が薄い。そして、物質的に豊かな時代に生きていて、家の中からあふれ出ようとするたくさんの品々、小さいころからのたくさんの子供用の遊び道具に囲まれてきた。漠然とした未来への淡い期待などない。未来社会が素晴らしく良くなるという期待感もない。昔のような火傷するような熱い思いが、ない。そのため、現状を幸福であると見なして保守的になっていることが、うかがわれる。変化をあまり求めない、という意識になっている。不満があっても、社会的不正があっても、自分の周りの小さな世界にとどまろうとしているようだ。静観・傍観するという、最悪のパターンの行動形態をする人たちが増えてきた。まあ、こう思わないことには、希望ある未来像をもてないのだ。額に汗して働くことを嫌っているのでは、・・・。

このために、これまでの物質的な生活条件の獲得に努めていた 20 世紀型の左翼や革新勢力の要求は、青年たちの心に響かなくなった。これは、今までの政治装置とその方法の「失効」ということを意味している。伝統的な左翼組織の弱体化という現象が起きている。

スマホを片手に持ち、歩きながらも見ている若者、食事をしながらもスマホを操作している人たちがいる。私には、理解不可能である。食事中に、スマホをいじって何が楽しいのか。家族と話をしながら食べたら、料理がおいしいと思うが、・・・。これは、私

の長男の事でもあるが、もう、どうにもならない。情報の波に飲み込まれてしまって溺れていることに気付いていないのだから、・・・。

＊このような若者の意識については例えば、大澤真幸「未来との連帯は可能である。しかし、どのような意味で?」（FUKUOKA　U ブックレット　弦書房)を参照。コンパクトにまとめられて読了しやすい。

そのために、現代社会の若者たちは未来への希望が持てないため、働く者たちの連帯を守ろうとしてきた労働組合等の組織の影響力が著しく低下したため、彼等を支える組織と人がいなくなったために、生活が苦しくなったり、精神的に生きづらさを感じると、自分とは異なると思える人たちを排除したり差別しやすい意識状況にいる人たちが結構いるということになる。これは、部落差別や在日の人たちやアジアの人たちへの差別心として現れてきている。これは、悲しいかな、知的理解力も十分育っていないことの表れでもあろう。

さらに、事態はさらに変化してきている。見田氏の本の出版から 10 年経った。埼玉大学の三浦敦氏は、次のように述べている。人々の意識の変化、人と人を結びつける絆について、述べている。

宗教の問題はとても大きな問題です。19世紀において宗教は共同性を回復するもの(＊と意識された人たちが多くいた。)で、創価学会が大きく発展したのも、<u>都市に出てきて労働者となった農民たちに、共同性を回復する契機を作ったからでした。</u>でも、今は、創価学会的な共同性はもはや求められなくなってきています。日本には新宗教教団が700くらいあり、政府に登録された宗教法人の信者の数を合計すると、2億人(！)になるのだそうですが、かつてのオウム真理教の修行風景がそうであったように、信者たちはお互いに向き合うことよりも、あたかもお互いのつながりを避けようとしているところがあります。

これは近年の社会運動論で指摘されていることとも一致します。かつての社会運動といえば、同じような立場(例えば「労働者」、あるいは「農民」)の人間が集まって、しばしば政党と結びついて展開していましたが、1970年ごろからそうした集団が生まれにくくなり、個別のテーマごと(女性の権利とか、原発反対とか)に社会運動が起こるようになり、人々は政党を忌避するようになります。そして今は、むしろ個別の利害に基づいて社会運動に参加したりしなかったりします。これは世界的な傾向です。

こうした背景にはもちろん、1960年代まであった、科学技術と社会の進歩に対する信頼が、すっかり失われてしまった、ということもあります。結局、科学では個々人の個別の人生の問題は解決できません(とはいえ、面白いことに、アメリカでは人生に困った人は精神分析医を訪ねますが、日本では占い師を訪ねます＊)。まあ、困難な時代になりました。2021/8 月

＊占い師に頼るのは、ある種の宗教心であるとも言い得る。しかし、この宗教心には大きな問題がある。

このことについては、補説Ⅱの「魔術・呪術的、現世利益の宗教について」を参照。

「二十世紀の後半は・・・「近代」という加速する高度成長期の最後の局面であった。この最終の局面の拍車の実質を支えていたのは〈情報化/消費資本主義〉のメカニズムである。」

・<19 世紀型の資本主義> 消費市場の需要に対応する生産

例として、フォードの車、規格化された大量生産方式、低価格の堅牢な大衆車

マルクスの資本主義理解は、この次元である。自らの生産用具を持っていた職人たちが非熟練労働者へと資本に支配される存在となっていった。

・<情報化/消費資本主義> 車は、デザインと広告・宣伝とクレジットで売れる

これは、GM(ゼネラルモータース)の生産と販売の戦略である。情報化の様々な方法で車をファッション化した商品とした。定期的にデザインや性能を変更して、それを宣伝して車の借り換えを促し、需要を喚起した。これは、情報による消費の創出である。これにより、それまでの定期的な過剰生産恐慌を克服した。資源の無限の開発と廃棄物の域外への排出をすることで、環境容量を無限化した。

「おそらく大半の人々にとっては、少なくとも相対的に、またさまざまな条件付きでは、この情報化/消費化社会は、世界で最も魅力的な世界である。」

「・・・魅力については誰の目にも見え、見えやすすぎるという仕掛けになっているから、・・・。」

冷戦の終結は、「*軍事力の優位による勝利ではなかった。・・・軍事力に関する限り、二つの陣営は、互いに他を圧倒して勝利することができないという膠着の状態にあった。この膠着を突き崩したのは「自由世界」の情報と消費の水準の魅力性であり、一層根本的なところでは、人間の自由を少なくとも理念として肯定しているシステムの魅力性である。」*

技術開発でもソ連型社会主義は負けたのだ。資本主義経済で利益を得るには、技術革新を図らなくてはならない。それは、社会的に強要されている。技術の革新なくしては他との競争に負け、いくら労働者を働かせてもモノは売れないことになる。剰余価値は発生しない。この社会的圧力による技術革新に対して、国家官僚支配のソ連は大きな後れをとった。

「ビートルズもディランもサンタナも、あの輝きと歓喜に満ちた 70 年代コミューン＊の日々も、この現代の情報消費社会の水準に支えられていた。情報と消費のシステム自体へのあらゆる批判と反発を許容しさえする「豊かな社会」と、その自由とに支えられていた。」

＊60 年代後半からの学生運動の高揚、新左翼運動等の社会変革への熱き思い

「現代の消費社会の成功は、情報化を媒介として欲望を自由に創出することを通して、市場システムが自由な展開を持続するための、「需要の無限空間」ともいうべきものを見出してということにある。それは欲望の文化的恣意ともいうべきものの、「必要の大地」からの離脱を前提していた。」

「<人間の生きることの歓び>というものは、「必要」にさえも先立つものでありながら、どのような「必要」の限度も越えて、限りなく自由な形態をとることのできるものであ

る。」

このことは、今の私たちの家には物があふれていることからも理解できる。必要なものではないのに、便利だから、かっこいいから等で次々と買い求めてきた現代社会の人々の行動そのものである。現代は「必要」の程度を越えて欲望が作り出されて、そして宣伝されて、この消費文化に溺れている人がたくさんいる。

●さて、この現象を厳しく一方的に批判して清楚な生き方を推奨する人がいるが、この必要の程度は社会の在り方によって異なって来ることを忘れてはならない。生きて行くには、食糧・住居等々、しかし、現代はこれに加えて上下水道・医療品・普通教育の制度・電話・テレビ等も必要なものとなっている。これが無くては、社会生活に参加できないことを、忘れてはならない。消費文化の単純否定など、できない質を持っていることを認識しなくてはならない。ここに、安易な批判を許さない現実がある。

さてこう理解すると、現代は 19 世紀の資本主義とは大きく異なってきていることを認識すると、労働者や農民としての「自負心」、なんていうものの意味が大変希薄化してしまっている現状を、それなりに納得できる。だから、もう「自負心」なんていうものに固執した思考では、未来社会展望は開けないことになる。では、どのように考えたらよいのであろうか。お金さえあれば、スーパーに行けば、日常製品は何でも購入できる。・・・消費生活に漂っている根無し草となっている現状に絶望するしかないのであろうか。

3-2 縮小社会へ、・・・非物質的な様相を変えていく!

ここで、さらに考えなくてはならないことがある。<情報化/消費資本主義>も、もう終焉に向かっているということである。グローバルな虚構に虚構を重ねたシステムは、ある現実という一点から破綻する。これは、間違いのない事実となる。この現実を直視できなくて、苦しみ悩み悶えているのが、現実の姿なのだ。

第二次大戦後は、IMF 管理通貨体制(ドル基軸)で世界経済の安定を図った。それが、1971 年、金とドルとの交換停止、IMF 体制崩壊へとなった。

さらに、2008 年のリーマンショック(金融の崩壊)によって GM は倒産した。これは、*「証券化に証券化を重ね、国際化に国際化を重ね、・・・強固な現実であるかのごとき相貌を獲得した巨大な虚構のシステム」*が一気に崩壊した。これは、<情報化/消費資本主義>の限界を露呈したものである。

この現実には、極端に豊かな人たちと、極端に貧しい人たちがいることだ。金融というバーチャル世界は、その始まりと終わりには肉体労働をしている貧しい人たちがいて、もう貨幣による市場交換関係だけでは機能不全となる現実に突き当たる時期が来ることは間違いない。銀行や証券会社でスーツを着て働いている人たち(企業の官僚)の裏には、このような肉体労働に社会が支えられている現実がある。この現実から、貧困と資源問題等が噴き出しある瞬間爆発することとなる。グローバルな金融

空間が生まれたのは、資本主義経済なるものが、社会に大きな格差・差異がないと、そして成長しない限り維持できないシステムであるためである。格差・差異がないと資本主義経済は回転しない。だから、失業したり、低賃金の生活苦の層をたくさん作ってしまう。ここに、大きな問題がある。そして、このシステムが危機になると国家が公的資金を入れて大企業を救済するという国家社会主義の手法をしているというまったく矛盾した状況にいる。これが、現代の状況である。

「「近代」という高度成長期の人間にとって、自然は「無限」の環境として現象し、開発と発展のための「征服」の対象であった。「近代」の高度成長の成功の後の局面の人間にとって自然は、「有限」の環境容量として立ち現れ、安定した生存の持続のための「共生」の対象である。・・・「近代」に至る文明の始動期(＊補説ヤスパースの言う軸の時代)に、この新しい社会のシステムは、人々の生と思考を、共同体という閉域から解放ち、世界の「無限性」という真実の前に立たせた。」が、

現代社会では、この無限性が成り立たないことがはっきりしてきた。自然の有限性のために、地球環境がもうもたないことがはっきりしている。だから、私たちは社会経済が縮小へと転ずることを前提として思考しなくてはならない。

＊ヤスパースの言う「軸の時代」については、補説Ｉを参照

＊縮小社会への必然性については、「縮小社会研究会」の HP 参照。ここでは、詳しく述べない。

〈歓喜と欲望、「変化と移動」の大切さ〉

―フランス社会主義、プルードン思想の復活!―

●さて、この時大切な事を、見逃してはならない。社会経済の成長が鈍化した後も、縮小しても、**人には歓喜と欲望が満たされ得る可能性が必要**である、ということである。このことを忘れて縮小社会の倫理の押し付けをしてはならない。「足るを知る」なんて言う倫理的な思想を強要してはならない。欲望を禁圧してはならない。社会は、「成長、そして変化と移動」がなされることで健全になるのだ。この視点を、忘れてはならない。そして、生きて行くには歓びが、この期待が持ち得るという状態の社会でなくてはならない。だから、**歓喜と欲望は、必要より根源的であるとも言い得る。これを感じ取ることができないのであれば、生きていることの意味を失うことになりかねない**。だから、必要という下限が満たされていて、この上の歓喜と欲望へと開かれていないといけない。

さて、縮小社会でさらに成長・変化することが健康的であるのは、非物質的な様相を変えていくことであろう。この在り方を変更していくことが大切な事となる。歓びとしての情報の発信と交換は可能性としてありうるのだから、この方向へと、欲望と感受性を転回していくことしかない。考えられることは、このような文化活動の意味を高めていくことが大切であろうと思われる。このようなことをするアソシアシオンを創り出していくことであろう。そこでは、先に記述したようなこれまでのモノづくりの「自負心」で

はないかもしれない。その在り方が、その質が変わっていることであろう。だから、未来に対して諦めの意識を抱くこともないようだ。

これまでの近代の思考を引き続いてしている人たちにとって、成長の停滞した世界は魅力の少ないものと感覚されるであろう。けれども、この時代の転換期を乗り越えた人々にとっては、*「アートと文学と思想と科学の限りなく自由な創造と、友情と愛と子供たちとの交歓と自然との交感の限りなく豊饒な感動とを追求し、展開し、享受しつづける」*かもしれない。そして、さらに楽しむことのできるものとして*「社会的な生きがいとしての仕事、共存の環としての仕事」となるであろうと、見田氏は示している。* ＊見田宗介『現代社会はどこに向かうのか』(岩波新書)

「・・・人間にとって究極の幸福が、金を稼いだり権力を持ったりすることではなく、文化や自然を楽しみ、友情や愛情を深める、それこそが本来求めている価値だからです。貧しい社会ではそれは不可能です。豊かにならないとできない。しかし、豊かになった人がそうした価値を求めるのは、きわめて自然なことだと思います。」 ＊『二千年紀の社会と思想』見田宗介　大澤真幸　太田出版

物質的に限りなく豊かになる必要はない。生存しえる物質が保障されならば、無理して物的な経済成長をしなくてもよいのだ。富が社会内にそれなりに行き渡れば、今迄とは違った物・人・情報の交換関係が成立できることになる。

でも、このような文化・芸術・そして人的な交わりを大切にする活動を重視するには、社会保障のシステムが整っていないことには、・・・。生存しえる物質が生産されそれが人々まで届かないといけない。これが生産されない、保障されない縮小社会は、富の奪い合いをして、先に記載した産業革命期のような悲惨な社会状態となってしまう。そして、人々はまたサン・シモンのような思想を追い求めことになりかねない。化石燃料の枯渇という条件でこのようなことを繰り返せば、それは人類の生存に直結する大問題を発生させることになる。

それともう一つ、縮小社会で大切な事は、社会的移動の容易な社会にならなくてはならないであろう。社会が健全であるには、住居の移動と社会的階層の移動が、そして適正な競争が無くてはならない。また、男女間の結びつきと離脱も、そして子育てがもっと容易なものとならなくてはならない。つまりは、多様な家庭の在り方が、社会的に承認されていなくてはならない。社会は、「変化・移動」がなされることで健全になるのだ。このようなことを通して歓喜と欲望が満たされ得る可能性が開かれていなくてはならない。そして、繰り返すが、そのためにも、社会保障のシステムが整っていなくてはならない。

●また、物づくりのアソシアシオンを否定してはならない。ここにも、当然、歓喜と欲望は存在する。品物も、物づくり技術も、化石燃料の大量消費をしなくても変化し改良されていく。より一層磨きのかかった工夫されたものが作られていくであろうことは、間違いない。

〈縮小社会研究会代表　松久寛　談〉

技術革新への期待は技術者にも強いです。それは、期待というよりは、困ったことの先送りという処世術でもあります。農業の大規模経営は機械、農薬、化学肥料を使用したものであり、その原料は鉄や石油です。これらは地下深くにあったものを地上に持ち出し、結局 CO2、プラスチック、鉄くずなどの廃棄物を空気、海、土に捨てます。廃棄物を地下深くに埋めるには、膨大なエネルギーが必要であり、それはまた新たな廃棄物になります。環境（空気、海、土）は、これまでは無限の存在のように思われていました。現在は廃棄物の量が大きくなり、それによる環境の変化が人間にとって都合が悪いほど大きくなりました。もともと、技術によって環境をよくすることは不可能だったのです。地下の石油を燃やし出た CO2 を再度石油にして地下に埋めることはできません。現在の技術とは、化石燃料のエネルギーを使って物を大量かつ高速に製造することです。化石燃料を使わないと江戸時代の生活になります。江戸時代も化石燃料を使わないという条件での技術は発展していたのです。

だから、未来の縮小社会では、品物は大工場ばかりで生産されるのではなく、小さなアトリエで職人たちの手で作り出していなくてはならないであろう。そしてさらに、大工場の生産現場は、労働者たちの自主管理で運営されているシステムとなっていなくてはならない。利潤をひたすら求める経営は、もう成り立たなくなっているのだから、・・・。たくさんのエネルギーを使用した大工場・大企業、大店舗では採算が合わなくなっている。そして、自営農民と自営の商人たち、そして自営の小さな仕事場(工場、アトリエ)が成り立ちうる社会となっていなくてはならない。そう、前半に述べた「フランス社会主義」の歴史が示してきたように、・・・。プルードンが述べているように!!

★このような社会は、人々が思い描かれてきた理想社会ではない。エゴとエゴのぶつかり合いのどこに均衡を見出していくかという視点でまとめた最適社会の展望である

3-3 「歴史の危機の時代」 私たちの精神構造は、変わらなくてはならない!

—今も昔も、人のすることはそんなに変わらない。それまでの知性や道徳性などは、このような仮面はすぐはがれ落ちる—

〈まずは、**週末は田舎人に!**〉

「金を稼いだり権力を持ったりする」ことを重視する人たちは、「文化や自然を楽しみ、友情や愛情を深める」ことをバカにしたり、批判したりする。しかし、これは批判する人たちの方が実は卑しい生き方なのである。自分のこのような生き方しか理解できないので、冷ややかに眺めパロディ化してこき下ろしているだけなのだ。このことは、間違いない。私は、理念としての「縮小社会」は積極的に肯定したい。でも、このような社会になるためには、「胚芽」を現実の社会の内部から作り出されなくてはならない。私た

ちの精神構造は、変わらなくてはならない!!!　そう、努めなくてはならない。

さて、もっと述べると、・・・。例えば宗教について、・・・。一向宗でよく唱えられる浄土三部経の一つである「仏説　阿弥陀経」等では、経済的な富によって手に入れることのできる種類の幸福を極楽のイメージとしている。当時の北インドを支配していた騎馬民族のクシャーン朝支配下の貴族や富豪の生活様式を述べていると言われている。だから、これからの未来は、「軸の時代Ⅰ」に成立した宗教の質をそのまま是認することはできない。「軸の時代Ⅱ」に即した新しい質の宗教へと変革していくことが必要であろう。宗教も、変わらなくてはならない。

時代と社会が要請する新しい宗教・信仰を示されても、今はやりの新興宗教家たちが語っても、私たちはそれを素直に信じられるような時代精神の中では生きていない。だから、従来のような宗教思想では、新しい社会統合の原理とはならない。では、どのようなものか?

一つはっきりしていることがある。アニミズム的・迷信的・妄想的・昔ながらの宗教行為は、日本の神社宗教は、狂信的な精神的高まりはあまりないが、受動的であるが、これにとっぷりと浸かっている人間にとっては、言葉でいくら話しても、そして力で強制しても、社会統合の原理を思考することはあるまい。このような宗教で事足りているのは、一人の個人として自己確立に苦闘した経験のないままに今に至っているためか、精神が退化しているためであろう。また、眼前の利益に深くとらわれているためである。このような人たちにとって、私が述べてきたことなどなんの意味をなさないことであろう、このことははっきりしている。

宗教の質を変えていくことは、人は言いようのない苦悩、不幸を体験しないとできないことが予想される。未来は、明るいとは、とても言えないことになる。変わらなくてどうにもならない事態に追い込まれないと、人は反省しない。方向転換ができない。しかしながら、それでも、できない人たちがいる。このような人たちは、滅びるしかないようだ。悲しいことである。

この苦悩の「尾ひれ」の共有によって、地獄や極楽なんて言う信仰からの解放、そして現在に生きていることの意味を未来へと先送りすることのない時間感覚、他者や他の生き物たちとの関わりに歓びを見出していくことのできる社会システムを見出していくしかないであろう。

〈社会形態はモラルに先行する、モラルは変容を促進する〉

—脱「経済の成長」に向けての精神変容—

見田氏は、経済の高度成長期の終了した現代の若者の様子を三浦展氏＊の著作「シンプル族の反乱」「毎日同じ服を着るのがおしゃれな時代」から項目見出しやキー・ワードを引用している。

＊三浦　展（みうら　あつし、1958 年）は、日本のマーケティング・リサーチャー、消費社会研究家、評

論家。マーケティングリサーチやマーケティングプランニング、コンサルティング等の受託業務等を行う株式会社カルチャースタディーズ研究所代表取締役を務める。消費社会、家族、若者、階層、都市などの研究を踏まえ、新しい時代を予測し、社会デザインを提案している。 著書は、80 万部のベストセラー『下流社会』のほか、『第四の消費』『日本人はこれから何を買うのか？』『東京は郊外から消えていく！』『毎日同じ服を着るのがおしゃれな時代』『あなたにいちばん似合う街』など。

「引用している項目見出しやキー・ワード」

シンプルな衣食住を提案する店、シンプルな暮らしを提案する雑誌が売れている、物をあまり買わない、自分で手を加えたい、基本的な生活を愛する、自動車離れが進んでいる、異文化への関心

三浦氏は、「情報化/消費資本主義」に振り回されないということ、シンプル化、素朴化、ボーダレス化、脱商品化、脱市場経済化ということを説明している。

「ひとつひとつと見れば、そのあるものはほんの短い流行に終わるだろうし、いくつかは形を変えて、・・・いくつかは普及して・・・、全体として観れば時代の非常に大きい、深部からの「曲がり角」を告知するものであると思う。」

＊見田宗介『現代社会はどこに向かうのか』、以下もこの本からの引用

「考えてみれば、アートとモード、ファッションの領域における、20 世紀までの、「新しさ」という価値の自己目的化、常により「新しいもの」を求め続ける脅迫は、人間の歴史の第Ⅱの局面の、とりわけその最終のスパートであった「近代」という短い沸騰期、加速しつづける「進歩」と「発展」と「成長」を追い求めてきたステージに固有の価値観であり、感覚であり、美意識であった。」

「もちろん、何回もの「揺り戻し」はあるであろうが、基本的な動線としては、もっと巨大な歴史の曲がり角を告知するものであると思われる。」

さらに、西ヨーロッパと北ヨーロッパの若者の行動を調査・分析して、

「この事実(＊調査結果)は、経済成長の完了(終了)したのちの社会は、停滞した不幸な社会となるのではないかという、一般的な予測を端的に打ち砕いている。それは人々が、近代を支配してきたホモ・エコノミクス的な価値観＝経済的な富の増大を幸福の尺度と同一視したり、経済的な富によって手に入れることのできる種類の幸福を幸福のイメージとして考えるような倒錯から解き放たれて、もっと多様な、あるいはもつと原的な、幸福に対する感受能力を獲得し、増強するためと考えられる。」　＊見田宗介　前掲書

「目に見えないものは、空間的に遠い地域の人々に転嫁されているゆえに目に見えないもの、時間的に幾年も幾世代ものちの帰結であるゆえに目に見えないものであるだけでなく、モノとして存在しないゆえに目に見えないものであることがある。・・・測定し交換し換算しえないものへの視力、つまりかけがえのないものについての視力をふくまねばならないだろう。」

私たちは、未来への希望、未来の人や過去の人たち、そして見たこともない他の地

の人たちへの配慮をしていくという、現状の人たちにとっては難しい、困難なことを克服しないといけないことになる。このためには、情報発信の在り方、そしてその質の向上を図らなくてはならない。そして、個々人が情報選択と処理能力の、思考力の向上を図らなくてはならない。テレビで娯楽番組ばかりを見ていては、このようなことはなしえないであろう。また、生活していく上での目先の欲に心がとらわれることが少なくなるような社会福祉施策の充実が必要となるであろう。このような社会システムが整備されないと、非物質的な歓びが未来において良くなるという感覚になれない現実がある。文化的なことに目が向かない人たちが多いのだから・・・。

終 わ り に

歴史の「尾ひれ」、「沈黙の転換」、未来は私たちの行動如何による!

先に述べたように、日々の労働についての、そして自分の存在についての「自負心」が希薄になっている現代社会の在り様を心配してきたが、縮小社会の到来を通して、従来のものとは異なるものが出現して来ているのかもしれない。これまでの成長経済の中での「自負心」とは違ったものが人々の心の中にできつつあるのであろうか。社会の底流では、人々の生きているこの世界に対する感覚の「沈黙の転換」が起こってきているのか。ただ、この流れが歴史の表に出るためには、社会保障のより一層の充実がなされ生存の補償がなされている社会システムになっていなくてはならないであろう。これらの条件が整えば、19 世紀とは異なったアソシアシオンが、そうプルードンが渇望した形態の協同生産・消費組合がうまく軌道に乗るかもしれない。

私たちは、新しい社会システムを構想・構築していくことが大切であろう。繰り返すが、それは一個人の精神性・決意性に依拠したものであってはならない。そして、もう一つ大切な事は、この変化は、国家権力によっての強制だけではいけないということである。そう、私たちの日々織り成すこの日常生活から、・・・。私たちは、意識的に無理して変わらなくても、日々していること自体が・・・そうなるであろうシステムを創り出さなくてはならない。

でも、このようなシステムが作られるには、世界的に大きな悲劇を体験しなくては、人々の意識は変わらないかもしれない。歴史の「尾ひれ」が人々の心にしみこまない限り、・・・。例えば、コロナウイルスの蔓延による、・・・。この悲劇が人類の生存を危うくするものでないことを、願っているが、・・・。

私たちは、社会の大きな転換期にいる。ここで、話は一番最初に戻る。歴史の「尾ひれ」によって人々の深層心理の「沈黙の転換」が、社会心理の変容が、濁ったため池に波が立とうとしているのであろうか。そこが、問題である。でも、この尾ひれで社会改善は進むのであろうか。そうは、簡単ではない。さざ波でも、大波でも、これだけでは、歴史は前には進まない。私たちの今後の格闘の如何による。プルードンは、懸命に考えた。意識ある人たちは、学び、そして行動しなくてはならない。そう、19 世紀のフランスの歴史のように、・・・。

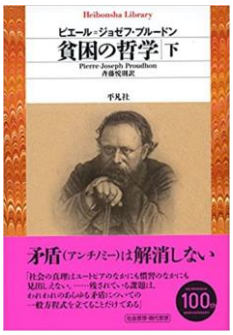
「新しい世界の胚芽となる、肯定的なものの実体がまず現在に存在し、・・・桎梏となるものがあるなら、それはこの生命自体によって、内側から破られるものでなければならない。この胚芽たち自体が、新しい世界を作る主体となるのでなければならない。そうでなければ、卵の内部生命は生きられず、新しい権力者のオムレツとして食べられてしまうだけだ、・・・。」＊見田宗介『現代社会はどこに向かうのか』

さて、マルセル・モースの『贈与論』(1925 年)をヒントとして、一つの意見を掲載してこの文章を終了したい。これは、プルードンが述べていることに通じていると思われる。モースは社会的な意識・社会規範は、贈与＝交換という法的な、そして経済的・宗教的な、そして審美的であるような「全体的社会事象」、つまり義務でありかつ自由な行為としての贈与という行為に宿っているとしている。社会規範は権威によって上から下に課せられるものではなくして、日々の社会関係を取り結ぶ行為それ自体に、つまりは自発的なものとして現れて来るとしている。言い換えれば、「社会」なるものを構成するのは、それは国家ではなく、集会・市場・祝祭の場、それは交流、交換の場である。このような場を通して形成され意識される人たちの集団関係の中で作られてくるものである。そこは、義務であり、そしてそれが自由であるとする社会関係が取り結ばれる自制的な秩序のことであった。

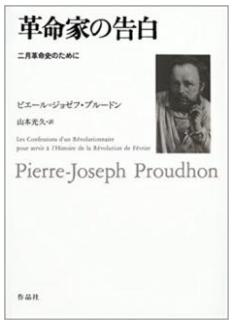
＊モースの「全体的社会事象」については、縮小社会研究会の機関紙創刊号に掲載されている私の「「贈与」＝交換関係の社会展望としての意味について」を参照。

最後に、私は、次の当たり前の事を提案したい。「市場での貨幣による商品交換」に頼ることから少しでも脱却する試みとして!!!

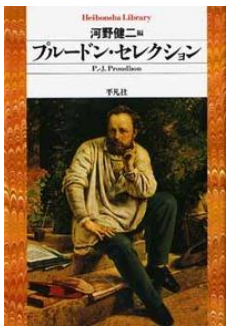
①生協や産直市等から日々の生活物資の購入をする。
②贈与＝交換(互酬)関係のより積極的な活用をする。
③「自産自消」を試みよう。田畑を借りて、・・・。
　都会から脱出して食料を生産しよう。週末は、田舎人!!



平凡社　斉藤悦則訳



作品社　山本久光訳



平凡社　河野健二編

〈追伸〉1　　〈18・19 世紀のフランス社会の特質〉

＊全文を読むのであれば『革命家の告白』のあとがきとして書かれている「中産階級礼賛」A を、選択された要旨を知りたければ『プルードン・セレクション』B を読了ください。私は以下に、この二つから「フランス社会の特質」についてのプルードンの文章を一部記載する。＊*斜体*

エンゲルスは「フランスは階級闘争が徹底的に闘われる国である(マルクスの『ブリュメール 18 日』への序文)」と述べたが、この理由を明確に示していない。プルードは、フランス社会を内部から観ている。この階級闘争の激しさの理由として、イギリスやドイツと比べての大地の恵みの豊かさ、気候の温暖さ、国土の 80%が耕作可能地であり、小農民、小商業者たちの多さ等に基づく中庸を求める気質から指摘している。このようなプルードンの言葉は、最初に記載した「何故、フランスの歴史を学ぶのか? 〈ナポレオン戦争の事例を通して〉」に通じるものである。豊かであるがゆえに、封建的支配体制から抜け出ようとしていた自営農が広範に成立していたことが大きな理由であろう。だから、2 月革命後に、社会改革に反対した。社会的共和国としての政策にストップをかけたのだ。中庸に戻ろうとしたのだ、と述べている。多数のフランスの自営業者や農民たちが求めているのは、中庸性の組織化であり、中産階級の礼賛ではないであろうかと。

A　・・・革命的立場の勝利を保証するもの、それはまさしく、最も革命的立場を失いがちだと見なされるもののことなのだ。すなわち、フランス国民に特有の穏健さであり、革命的立場を見分ける中道主義の精神であり、革命的立場に存在する安定性への欲求であり、・・・。

B　当面の観点から見て、我々フランス人が他の国民から区別されるとすれば、それはむしろ、・・・、我々の保守本能、習慣に対する敬意、中庸状態に対する愛着、・・・によってである。・・・誰も国民の性向を捻じ曲げることはできないし、・・・。

B　この我が国に特有な中庸状態への愛着は、我々を待ち受けている事件において、結局は力を創り出し、「革命」の成功を保障することになるはずのものであるから、・・・。・・・、根本的かつ総体的には、あらゆる点で中庸と安定の代表者である。・・・我々に何かの考えが浮かぶたびに、我々に何かの提言がなされるたびに、すべてをよく考え、検討し、批判した上で、結局次のよう答えることに帰着する。それでどうなるのか。それか何の役に立つのか?我々の値うちが上がるとでも言うのか?・・・、だとすれば、なぜ心を悩ませたり、やり方を変える必要があろう?自分たちの居場所にとどまろう!羊たちの許(もと)へ戻ろう。これが我々の永遠の讃美歌である。

B　我々のあらゆる過失、愚かさ、さらに成功と失敗は、このことに由来する。

B　・・・、我々の気質と好みにおいて保守的で、ただ必要と例外によってのみ革命的国民たらしめる。この中間状態への生来の愛好、中庸状態への信仰・・・。

B　反動においてであれ、革命においてであれ、フランス国民が激しい態度を示したとすれば、それはいつでも、想像するまま、理解するままに与えられているものとしての

気楽さが、あるいは君主の政策によって、あるいは党派やセクトの狂信によって危うくされていると思われたからにほかならない。つまり国民が諸利害、諸権利、諸思想における中庸状態が消え去っていくと感じたからである。

A ・・・フランスでは常に、革命は傷つけられた中道主義から生じた。

A ・・・物質的な中道主義を守るためにこそ、我々は理論的な中道主義の放棄を余儀なくされようとしている。・・・中庸に留まるためには自らを極端にしなければならない。

A 彼らは共産主義への恐れから、旧来の封建的状態に戻るのに同意するであろうか。とんでもない。フランスは、共同体も隷従も共に求めてはいない。・・・(＊求めているのは)それぞれの家庭が労働によって合法的な安楽を得ることが保証されるような安定システムなのであり、・・・。

A 現在のフランスには、二つのフランスが存在する。・・・(一つは保守主義者、そしてもう一つは革命家。)・・・*しかし、最終的な目的に関しては、このフランスは一体である。*

〈追伸〉2

(1)今の日本の農業の再建を展望するには、大切な事は、田舎に住む農民たちに自己変革を迫るより、農民以外の人たちが農民への、農業への眼差しを変更することであろう。もう日本社会では、農民人口は圧倒的な少数派となっているのだから、・・・。そうすれば、エゴまみれの農民をひきつれたままでも、社会の進歩を獲得することができよう。農業という営みを、切り捨てることなどできないのだから、・・・。

＊このように記載するのは、農民たちに自己変革を求めることの難しさのためである。このことについては、研究会の HP にある「農本主義のなれの果て、さてさて」を参照。ここには、社会変革を目指している者たちにとって、農民とは厄介な存在であるということについてのプルードンの言葉を掲載している。

(2)失業等の理由で都市生活ができなくなった人たちや、都会から脱出して農的生活を目指している人たちこそが、今後の農村社会を再興していくであろうことが予想される。

田舎の毒に染まっている人たちに金銭的に所得を補助しても、、働かなくなっている農民たちを支援しても、あまり効果がないことが予想される。

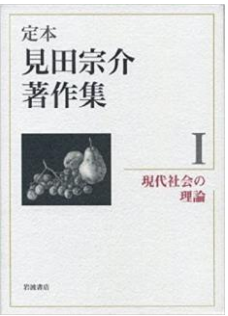
農村の人たちが層として代替わりしないことには、・・・。例えば、再度食糧管理制度を設けて米の値を上げても、もう農地の再耕作はしないであろう。彼等は、農民としての根が枯れてしまっている。まあ、自覚的意識的に農業をしていたわけではないのだから、・・・。

＊農民と言っても、田舎には単一の農民層が存在しているのではないことを踏まえなくてはならない。田舎社会では、しばしば相対立する階級的立場の者たちが存在しているのだ。つまりは、***農民と農村の多様性***を見据えて論じないといけない、ということである。

農民たちは、自分たちを一つの階級と見なしていなくて、旧来の身分的意識、昔から続いている古い階層的意識をともなった各地域なりの独特の生活様式を、今もそれなりに無自覚的に維持しょうとしている人たちが一定数いる人たちであると理解した方が良いように思える。
しかし、この旧来の生活様式は急速に崩壊している。崩壊の速度は早まり、昔の風習はもう見る影もないほど弱体化した。農村特有の社会的差別意識さえも、大きく揺らいでいる。力なくよれよれである。だからこそ、時として旧来からの諸行事に没入してしまい、その結果、時代錯誤の田舎の毒が流れ出す。

補説Ⅰ　「軸の時代」

＊「軸の時代」という言葉については、見田宗介氏の前掲の『現代社会はどこに向かうのか一高原の見晴らしを切り拓くこと一』(岩波新書)書を参照していただきたいが、以下に簡単に提示したい。



岩波書店

岩波新書

ちくま学芸文庫

この『現代社会はどこに向かうのか一高原の見晴らしを切り拓くこと一』に書かれていることを理解するには、下のロジスティック曲線を理解しなくてはならない。

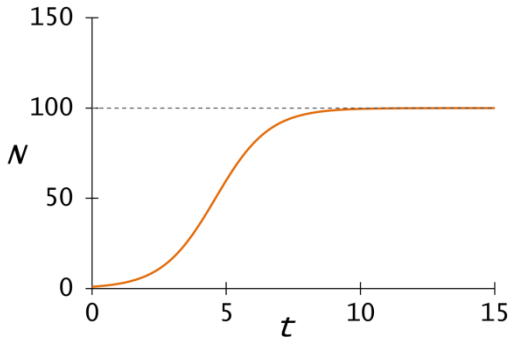
***ロジスティック曲線**は、生物の個体数の変化の様子を表す数理モデルの一種である。ある単一種の生物が一定環境内で増殖するようなときに、その生物の個体数(個体群サイズ)の変動を予測できる。人間の場合でいえば、人口の変動を表すモデルである。1838 年にベルギーの数学者ピエール＝フランソワ・フェルフルストによって、ロジスティック方程式は最初に発案された。フェルフルストは、1798 年に発表されて大きな反響を呼んだマルサスの『人口論』の不自然な点を解消するために、このモデルを考案した。マルサスは『人口論』で、人口は原理的に指数関数的に増加することを指摘した。しかし、実際には環境や資源は限られているため、人口の増加にはいずれブレーキがかかると考えるのが自然である。人口が増えるに連れて人口増加率は低減し、人口はどこかで飽和すると考えられる。ロジスティック方程式はこの点を取り入れて、生物の個体数増殖をモデル化したものである。フェルフルスト以後には、アメリカの生物学者レイモンド・パールが式を普及させた。*

＊フリー百科事典『ウィキペディア ikipedia)』より

世界の人口統計によると、1970 年に人類史的な人口の転換を迎えている。20 世紀に人口が急激に増えているが、人口の増加率を調べると、1970 年をピークとしてその後急激に減少している。人口はここしばらくは増えていくとしても、早くも 2050 年にはほぼ横ばいの状態となることが予想される。今までの生物の歴史によると、この**ロジスティック曲線**のようにならない種は滅んでいる。

＜ ロジスティック曲線 ＞

下記のグラフで、個体数が急に増え始めるのが第Ⅱ局面で、増加しなくなり高原状態となるのが第Ⅲ局面、第一局面は→、第二局面は⤴、第Ⅲ局面は→、そして、**この曲がり角が、「軸の時代」**である。最初の第一局面から第二局面への曲がり角が「軸の時代Ⅰ」で、次の曲がり角が「軸の時代Ⅱ」である。



＊縦軸は個体数(人口)、横軸は時間の経過

「人間にとってロジスティック曲線が現実に成立するのは、20 世紀末のグローバリゼーションにおいて、地球という惑星の全体が現実に一つの有限的「閉域」として立ち現れた以後である。・・・「外部の消失」ということによって、初めて、理論的にも現実的にも根本的な規定要因となった。」

「人間にとってロジスティック曲線を考える第二のポイントは個体あたりの資源消費量(および環境破壊量)の大きいことである。・・・第二局面の終結と第Ⅲ局面への移行とを、他の動物たち以上に、切迫して実現するという方向に作用するものである。」＊見田宗介『現代社会はどこに向かうのか』

*「ロジスティック曲線をめぐる人間に固有の条件として・・・テクノロジーによる環境容量の変更(拡大)の可能性である。」*が、・・・。

つまり、今後さらなるテクノロジーの進歩によって抜本的な環境容量を拡大することができるか、その必要があるのかという根本的な問題がある。考えられるのは大きく分けて二つある。

・一つは、環境容量の外延的拡大、地球の外に移住したり、他の惑星の資源の発見と地球への持ち帰りはあり得るのか。⇒これはほとんど現実的ではない、はかない希望的観測である。

また、海底深く深海やシベリアの永久凍土の中の資源の取り出し⇒さらなる環境悪化と新型ウイルス等の出現となることが予想される。

・二つ目は、遺伝子の組み換えによる作物生産量の拡大や病気の克服、あるいは、素粒子操作による核エネルギーの開発等による環境容量の拡大。これは、あり得るのか。⇒これらのことを無理矢理しようとすると、大きなリスクとなり跳ね返ってくることは、もう経験済みである。例えば、原子力発電を例に取ると、・・・。安全な原子炉なんてできないのだ。実験できないのだから科学技術の進歩なんてありえない。この分野の科学技術の進歩なんてありえない。・・・日本人は、もう 3 度もこれを体験しているではないか。それなのに、・・・。それに廃炉となった原発は、これから 10 万年間も管理しなくてはならない。リスクの未来への先送りばかりしている。遺伝子操作も同じことである、生命そのものの仕組みが分かっていないのに、・・・。生命の仕組みは近代的機械モデルのような簡単なものではないことを忘れてはならない。このことを無視して行うと、どのような結果をもたらすか・・・。これは、植物や家畜でも、大変危険なことである。このリスクは、大きい。将来に取り返しのつかない大きな影響をもたらしてしまう。

要は、科学技術の進歩に過剰な信頼をよせて未来を予想することはできないのだ。科学技術の限りなき発展、エネルギー効率の持続的発展は、ないのだ。この限界を認識しつつ、科学技術の発展に努めなくてはならない。しかし、マスコミは、深海やシベリアの永久凍土の中の資源の取り出しや遺伝子改造に未来があるがごとく報道をする。そのため、多くの人たちは、この問題をきちんと認識することなく、リスクの未来社会への転嫁を当然のこととしている。「今さえ」良ければ、・・・と、・・・。

〈加速し続けてきた歴史の突然の減速、ユーモアとエスプリを効かせて〉

「環境容量をむりやりにでも拡大し続けるという強迫観念は、経済成長を無限に続けなければならないというシステムの強迫観念から来るものである。あるいは、人間の物質的な欲望は限りなく増長するものであるという固定観念によるものである。」

「カール・ヤスパースが「軸の時代」と名付けたこの文明の始動期(＊都市の形成、貨幣経済の展開)の巨大な思想たち、古代ギリシャの哲学とヘブライイムズと仏教と中国の諸子百家とは、世界の「無限」という真実への新鮮な畏怖と苦悩と驚きに貫かれながら、新しい時代の思想とシステムを構築してきた。」＊は青野の補足

「かつて「文明」の始動の時に世界の「無限」という真実に戦慄した人間は今、この歴史の高度成長の成就の時に、もう一度世界の「有限」という真実の前に戦慄する。」

「「軸の時代」の大胆な思考の冒険者たちが、世界の「無限」という真実にたじろぐことなく立ち向かって次の局面の思想とシステムを構築していったことと同じに、今人間はもう一度世界の「有限」という真実にたじろぐことなく立ち向かい、新しい局面を生きる思想とシステムを構築してゆかねばならない。」

古代ギリシャの哲学とヘブライイムズと仏教と中国の諸子百家たちの思想と宗教が誕生した時代をヤスパースは「軸の時代」とした。この時代を「軸の時代のⅠ」とすると、現代は「軸の時代Ⅱ」となろう。まさしく、大きな転換期である。

「現代社会は、人間の歴史の中の、巨大な曲がり角にある。」

「「軸の時代」は、現代にいたる二千数百年間の人間の精神の骨組みとなる考え方が形成された時代であり、人間の歴史の第一の巨大な曲がり角であった。」

「この「軸の時代」の現実的な背景は、この時代ユーラシア大陸の東西に出現し急速に普及した〈貨幣〉の経済と、これを基とする〈都市〉の社会の勃興であり、それまでの共同体の外部の世界、〈無限〉に開かれた世界の中に初めて投げ出された人々の底知れぬ恐怖と不安と、開放感だった。この不安と恐怖と開放感が、新しく無限に向かって開かれた世界を生きる確かな根拠と方法論とを求めて、普遍化された宗教と合理化された哲学とを追求し、確立してきた。」

「貨幣経済と都市の原理が、社会の全域に浸透したのが「近代」であるから、「軸の時代」とは、「近代」に至る力線の起動する時代であった。・・・」

ここに述べられていることは、人々を定住させてして穀物生産を行わせることで都市国家なるものができ、それはやがて大きな「帝国」へとなっていった歴史の事であり、貨幣を仲立ちとした市場経済の形成・発展の事である。二つの交換関係である「収奪・再分配」主導の社会(国家・帝国の形成)から、近代の「市場における貨幣に基づく商品交換」主導の社会(資本主義社会)へとなって来た歴史のことである。ロジスティック曲線の第二局面♪の段階の歴史である。

「・・・〈情報化／消費化社会〉は、それが全世界をおおいつくした(グローバリゼーション)というまさにその事実によって、ここに初めて、この無限の発展の前提である環境と資源の両面において、地球という惑星の〈有限性〉と出会うことになる。」

「人間はどこかで方向を転換しなければ、環境という側面からも資源という側面からも、破滅が待っているだけである。」

「第一の曲がり角(＊「軸の時代のⅠ」)において人間は、生きる世界の無限という真実の前に戦慄し、・・・この思想を確立してきた。」

これは、普遍宗教の誕生、そして世界宗教の成立であり、古代の哲学思想の誕生のことである。しかし、軸の時代Ⅱには、そんなに時間的余裕はないであろう。急がなくてはならない。100 年も待っていられない事態となっている。私たちはこれまでの生き方を、大きく変更しなくてはならない。

ロジスティック曲線の曲がり角、「軸の時代Ⅱ」を見ると、*「加速し続けてきた歴史の突然の減速がどんなに急激なものであったかが分かる。未来へ未来へとリアリティの根拠を先送りしてきた人間は、初めてその生の空疎に気付く。」*

「この第二の曲がり角に立つ現代社会は、どのような方向に向かうのだろうか。そして人間の精神は、どのような方向に向かうのであろうか。」

ここに、見田氏の問題意識が、明確に語られている。

繰り返して言おう。今後の「軸の時代のⅡ」には、そんなに時間的余裕はない。「変わらなくてどうにもならない事態に追い込まれないと、人は反省しない。方向転換ができない。」では、遅すぎる。このままでは、後は破滅だけが待っていることになる。

でも、悲壮感にとらわれてはならない。ユーモアとエスプリを効かせて、多くの人たちとの関係を形作りながら生きて行こうではないか。

補説Ⅱ　　宗教について

①プルードンの宗教的なもの、そして、私たちにとっての意味

さて、プルードンの「宗教的なもの」についての見解を、少し述べておきたい。彼は今まで述べたように、「友愛」とか「連帯」なんて言う精神的なものを積極的には賛美しなかった。彼の思想がほぼ整ってきたころ(1850 年代)からは、宗教的なものを駆動力とした社会改革構想をしていない。このような精神性を讃える組織なんて、ともすると集権的になりかねないためである。プルードンは集権的にならない水平的な関係性、多元的ネットワーク的連帯関係を思考した。社会契約説に基づく個人でもなく、社会有機体説に基づく秩序にも反対した。ここに、彼の思想の現代的意味がある。

「我々人間がみな結合していない、などということがありうるのであろうか。・・・我々が結合することをなんら望んでいなくても、事物の力、消費の必要性、生産の法則、交換の数学的原理が我々を結合する。この原則の唯一の例外は所有者の場合である。」『所有とは何か』1840 年

「自分たちの生産物を交換する二人の労働する人間は、その他の協同関係がなくても、彼らがお互いに交換し合わなかった場合よりも自由である。・・・それに応じてそれだけ彼らの自由は増大する。」『告白』1849 年

プルードンは、宗教的なものを全否定などしていない。神は悪であると述べつつ、それでも私たちは神の娘であり、意識は神へと向かう。神という絶対者は、この超越性は、何らかの仕方でいつの時代も人々の心に想定され続ける。と述べている。哲学を少し学べば無神論者となり、たくさん学べば神にひれ伏してしまう、これが人間という存在なのであろうと。フランスの 19 世紀という時代性を色濃く感じられる思想家である。この当時、宗教について問を発することは、社会体制の在り方を左右する争点について思考していたということである。このことについて知ることは、現代の我々にとっても意味あることなのだ。

＊「経済的諸矛盾の体系、あるいは貧困の哲学」斉藤悦則訳　平凡社「貧困の哲学」からの引用文を下記に掲載したい。皆様には、この本の「プロローグ」を、ぜひともお読みいただきたい。その他の文章を読まなくてもよいから、・・・。ここに彼の思考の在り方が如実に出ている。

神とは何か。神はどこにいるのか。神の大きさはどれほどか。・・・分析の光で照ら

してみると、・・・神なるものすべて、形もなく反応もなく動きもなく、我々には理解できず定義もできない。・・・一言でいえば、存在の属性がことごとく否定されたところに行きつく。・・・神なる存在の属性はまったくの無の属性に等しいものになる。・・・無神論があらゆる神義論の根底なのである。

ある皮肉な思想家がこう言っている。「哲学を学べば宗教から離れ、たくさん学べば宗教に戻る」。

先ほど宗教の進化を手短に示したが、それでもう神の存在や魂の不滅といった形而上学の二つの謎は決着がついたと考えてはいけない。・・・今日、我々は宗教的なものの見方を批判して、・・・その批判を要約してみれば、神学の問題が再生産されているに過ぎない。

至高の存在なるものは人間の思念を人格化したものにすぎないと分かっていても、信仰行為を始めてしまえばのめりこみ、・・・それにあえて固執する。まもなく魔法の呪文によるお祈りまで再開されそうだ。

私の良心は私のものであり、私の正義は私のものであり、私の自由は至上のものである。私は永遠なるもののために死にたいものだ。しかし、少なくとも、太陽が廻っている間は、私は人間でありたいと思う。＊『イエスとキリスト教の起源』

無神論が誤っているのは、宗教とは人にとって何であるかという根本的な意味、そしてその機能について無知であるということだ。神話や奇跡の非科学性を述べているにしかない。これでは、・・・。

② 魔術・呪術的、現世利益の宗教について

宗教が非理性的な呪術的・アニミズム的なのか、崇高な意識をもたらすものかということの分類は、反省的な思考があるか否かにかかっている。迷信的なことを信仰しているというのは、日々に経験することを理性的に判断していることではないことに信頼を置くというものである。例えば、占星術、もし星々の位置とその組み合わせが人生に起こりうる運命について何らかの意味ある記号としてみなされるのであれば、天文学は学問とはならないことになる。雨ごいや真言密教等で護摩を焚いて呪文を唱えて祈祷するのも、これとよく似たものである。人間が自分の欲望・願望を得るために神頼みをしても、そこに神意に適した道徳的・倫理的なものが含まれていないのであれば、これは、もう妄想・魔術・呪術であるとしてもよいであろう。また、現世利益のために形式的な行為や祭りを行うことで神仏を崇拝するのであれば、人が道徳的・倫理

的に良き人物になる必要なんて全くないことになる。欲得まみれの日々の日常生活そのままで自己の利益のため神意を得ようとするのは、まさしく迷信的妄想であろう。このような意識は、人々に毒の働きをしている。

人は社会生活をしていくことで、どうしても社会的毒を含んでしまう。そのような時、この毒を解毒する人間関係がないと、人はいかに生きるべきかという意識を持っていないことには、この毒は、全身に回り人格の破壊となる。今まで述べたような現世利益べつたりの宗教意識は、「宗教的な義務が顧みられなくなると，社会全体の堕落が進むかもしれない」なんて心配することなど、まったくない質のものである。通常の非道徳的行動と異なるのは、超自然的力に頼るところである。

このようなことは、世界各地で、そして歴史的に数限りなく行われてきたことであり、今からも同様なことがなされる可能性が高い。牧師や僧侶たちの行う祈りも、神官の祝詞も、真言密教等の護摩を焚いて行う読経も、何らかの現世利益を得ようとするものであることが多々ある。これらの行為に何か神秘的な効用があると期待して行われるものであるが、祭りを主宰したり参加している人たちの心は、ちっとも道徳的・倫理的などではない。昔ながらの迷信や奇跡を期待している。神官や僧侶たちは、このような人たちを利用して自分たちの存在意義を再確認させ、利益を得てきた。日本各地でなされている神社の祭りなどは、この典型であろう。これらは、農耕や商売での収獲と利益への期待や感謝を込めたものである。特にアジアにおける稲作は水利の確保等に関わり一個人で対応できるものではないために、どうしても集団的祝祭行事が必要となっている歴史がある。そのため、干ばつの時でもなかなか水の枯れない泉や山にある巨石や巨木への畏怖が信仰となり人格化や神格化したしてきた。これらは、後に大和朝廷の神話の中に位置づけられてきたものもある。

このようなアニミズム的・迷信的・妄想的・昔ながらの宗教行為は、狂信的な精神的高まりはあまりないが、平静であり受動的であるが、そのために、これにとっぷりと浸かっている人間からこのような思想を解き放つことはなかなかできないことになる。

このような宗教の問題点について話したり、説得しても、そして力で強制しても、これで満足している人たちの心を変えることなどできないものであろう。このような迷信的とも言い得る宗教で事足りているのは、一人の個人として自己確立に苦闘した経験のないままに今に至っているためか、精神が退化しているためであろう。また、眼前の利益に深くとらわれているためである。これまでいろんな宗教家の言ってきた信仰の在り方なんてことは、このような人たちにとって必要とされていないのだ。これで足りている人たちにとって、現世利益に深くとらわれている人に、これ以上話してもどうにもならない。だから、このような人たちをうまく利用して営利を得ようとする人たちが出て来る。

生まれた地でずっと生活していて他の地域で暮らした経験がない人などは、「田舎の毒」にどっぷりとつかってしまい、このような現世利益の宗教を当然視している。こ

れらの人たちは、行っている宗教行事を、自覚的反省の視点で観ていない人たちであろう。これらの人たちは、実は、その地に根付いていない浮草的状態となっているのだが、自覚的にこの地で暮らしていないという「根こぎ」状態なのだが、このことにはちっとも気付いていない。

田舎では都会に比べて社会的流動性が少ない。そのために、日々の生活、人間関係では、露骨な「今だけ・自分だけ・お金だけ」が、都会生活者以上に露骨に現れてきている昨今である。そのため、旧来からの「贈与＝交換関係(互酬交換関係)」は、急速に機能しなくなってきている。昔ながらの相互扶助の精神は、ものすごい勢いで崩壊して来ている。昔ながらの神社の祭礼の諸行事等は形式的・強制的に実施していても、その実は金銭関係・現世利益優先という毒が露骨に現れている現状である。今の新自由主義政策のために、・・・。社会流動性の少ない地でこのような事態になると、都会生活以上に殺伐とした人間関係となってきている。

このような宗教的行事は個人的信仰に基づくものではなくして、地縁に基づいてなされているため、この祭礼を実施している人たちに精神的な宗教意識を語りかけても、個々人の心が耕されていないため、まったく受け入れられることはないものである。都市生活者も都会の神社の祭りに参加するが、でもその参加の仕方が異なっている。田舎では、はっきと拒否しない限り、参加は強制である。この宗教の質を問題にして述べても、彼らには理解できないのだ。もう農作物生産で共同作業はない。そして農業そのものを止めようとしているのに、参加を強制してくる。そして、神社の神官たちは、戦前の国家神道の復活を望んでいる。彼等神官たちは生活の安定を求めて、国家官僚になることを望んでいる。

さて、一神教の人たちから見て、これらは宗教とはみなされないかもしれないが、しかし、考え方によっては、私たちは実はものすごい宗教的な民なのかもしれない。特定の宗教の宗派に属していなくても、広い意味での宗教的であるとも言い得るであろう。でも、このような人たちは、宗教的であると自覚していないが、・・・。現世利益に深くとらわれた人たちは、関係の網(呪縛)に深くとらわれているのだが、そのことを自覚していない人たちなのだ。そのため、未来と過去と現代の他者への配慮が希薄な人たちなのだ。もっと言えば、来世を失った人や未来の子孫たちへの責任をとろうとしない人間にとっては、今の欲望にしか意味を見出せないことになっている。あの世の意識がなくなると、子孫たちへの責任を放棄すると、この世の欲望をコントロールすることが難しくなる。

迷信等の妄想ともいえるこのような宗教的意識は、その意識下に現世利益が色濃くあるため、ここから抜け出ることは難しい。この意識は、いかなる人にも、その程度の違いはあっても、抱いていることであろうが、・・・。

補説Ⅲ　　社会統合について

『自由への問い』シリーズ(岩波書店)「1 社会統合—自由の相互承認に向けて
の編集方針として、次のように書かれている。
「規制緩和などの新自由主義の思想に沿った自由の解釈は、・・・自由のかたよった在り方を生み出してきたのではないか。自己責任や自立を過度に強調する自由の主張は、社会の問題を個人の問題として受け止めさせることにより、一人ひとりの生に重すぎる負担をかけて来たのではないか。」「・・・どのような規範や制度が誰のどのような自由を可能にし、逆に誰のどんな自由を制約し奪っているのかを具体的に問い返しながら、同化や排除のない、より公正な自由はどのように考えられるべきかを構想するものです。」
この本で齋藤純一氏は、「社会統合」を、「社会の成員がその制度を自らにとって有意義なものとして受け止め、それを持続的に支持する関係が成立している状態」としている。
「自由は多義的に解釈される論争的な概念であるが、近年の解釈は、自由という
概念を規制緩和、自由競争あるいは自己責任といった言葉と結び付けて来た。
そうした解釈が、新自由主義の思潮に沿った社会秩序の再編に適合し、それを
正当化し、支持する一定の機能を果たしてきた・・・。」
「・・・規制緩和における自由の「拡張は、その裏面においてある人々の基本的自由の「はく奪」を引き起こしてきたと言える。」
「・・・新自由主義にもとづく自由概念の解釈は、相互の自由を可能にしたのではなく逆に自由の偏在を生み出してきたのではないか。自己責任を強調する自由の解釈は、社会全体にかかわる問題をパーソナルな問題として受けとめさせる解釈のコードを設定することによって、一人一人の生に過剰な負担をかけて来たのではないか、・・・。」
新自由主義的な「社会秩序の再編が、いわば「自由の相互性」を大きく損ない、誰もが享受しえてしかるべき基本的な諸自由をある人々からはく奪してきたとすれば、今試みるべき「自由への問い」は、自由の相互性を回復し、私たちが自由を相互に保障し合うことはどのようにして可能かという問いに方向づけられるだろう。」

社会は、その時の情勢により、社会統合の在り方は変わっていく。良くなったり悪い方向へとずるずると行ってしまう。まずは、良くない方に行ってしまった歴史的事例を記載したい。

「社会統合の視点から・・・、1848 年 2 月革命の意味」

『1848 国家装置と民衆』ミネルヴァ書房　高木勇夫「二月革命と普通選挙」には、次のように書かれている。

「フランスの 1848 年は、選挙権の拡大を目指す改革宴会でのロベスピェール追憶の完敗に始まり、民衆組織と急進派ブルジョアとの連帯の可能性が模索された。しかしながら結局は所有と反所有の間に引かれた線を互いに越えられないまま、六月事件の流血の惨事を招く。こうした一連の出来事は、古典劇の趣のある大革命に比すると、いかにも茶番という評が当てはまりそうにも思えるが、四月の総選挙の過程に示された民衆の政治参加の在り方は、当時の社会状況の危機の局面をリアルに映し出しており、その点だけからにしても、二月革命は単なる二番煎じではない。」

＊マルクスは「ブリュメール 18 日」の最初に、次のように述べている。ヘーゲルはどこかで述べている。歴史は二度繰り返す、と。さらに、ヘーゲルは次のように付け加えることを忘れていると。一度目は偉大な悲劇として、二度目はみじめな笑劇として、・・・。

でも、これは支配・被支配の観点からすると歴史の形式、社会的構造としての繰り返しと見なすこともできうるという意味であって、個別具体の歴史は切り返さない。一度きりである。そして歴史を詳しく観れば、以前の社会とは質的に変わってきていることを踏まえなくてはならない。同じことを二度は、繰り返さないのだ。この認識を、間違えてはならない。

この 1848 年の 2 月のフランスにおける革命は、当時のヨーロッパが、そして近代社会が経験したものである。この革命は、当時のヨーロッパ世界に瞬く間に広がった。まさしくヨーロッパ世界における同時革命であった。でも、その結果はみじめなものであった。しかし、この革命を通して、社会は質的変換をもたらした。この革命を契機として、現代社会の扉が開かれたと言えよう。この革命で、ヨーロッパ世界の在り方は、転換がなされた。まさしく、普遍性を有した歴史であったと言える。

この当時、この一連の歴史の中で政治体制として無傷であったのは、ロシアとスペインとイギリスだけである。

＊イギリスは、1642-49 年のピューリタン革命以来、外交的にはいつも反革命の立場であった。

ここから分かることは、ヨーロッパ世界や諸地方において、この間の一連の社会的出来事は、結果的には、

①イギリスを中心とする資本主義体制に激しく飲み込まれていったということ、

②この荒波の中で中央集権の国民国家形成という課題を背負った歴史であったということ、

③国民国家形成ということは、民衆を弾圧して支配することでは事済まない社会になったということである。国民として社会統合を図らなくてはならないということを深く認識した、と言える歴史であった。

このことを言い換えると、経済問題が政治の中心的問題となった事態なのであり、また一般の民衆の在り方を無視して政治はあり得ない事態となったことが明瞭となったということである。このことへの留意なくして、社会統合はなしえない社会となった。例えば、国民の治安と衛生、日々の社会生活をいかにして確保していくのかというこ

とが避けては通れない課題となった。このような国家と社会の創出・再編成がなされようとしたのが、この二月革命という社会運動の結果であった。労働者たちを、一般の民衆を単純な物理力と弾圧で抑え込むことで事済まない社会となったことを示している。つまりは、社会統合の在り方を思考して政治をしなくてはならない社会となったことを意味している。これは政治の課題を変えてしまっただけではなくして、***社会運動の場とその在り方が変化した***ということである。国民をうまく社会統合していくには、日々の管理、そしてそれを担う官僚組織や文化的思想的なことの比重が増してきたことを意味している。

〈絆の崩壊現象、私たちの視線の方向転換を!〉

戦後の日本社会で今まで社会変革を求めてきた者は、秩序の過剰、管理統制を厳しく批判してきた歴史がある。それが今や、秩序の過小について思考する時代状況となって来た。日本社会がなんというか、分裂し、ただひたすら〈今だけ・自分だけ・お金だけ〉を唯一の価値観としてしまい、人々を結びつけてきた絆の崩壊現象が露骨に進行している。社会は、人々の努力なくしては解体していく。秩序の過小いうか、空洞化に対して、今までの秩序からの自由を求めることから、新しい社会秩序というか、エートスというか、このようなものを再生していくことを本気で考えないといけない時期になっている。

プルードンは、生産と流通、物と情報・人の交流や交換を通して自然に人々を結びつける絆が出来上がると述べているが、現代の私たちとしては、手放しでそれを認めることはできないであろう。そこには、やはりそれなりのエートスが熟成されていなくてはならない。交換を通した対人関係の在り方が、それを導く倫理性、エートスが無くてはならない。そして、宗教の在り方も大きく関係するであろう。

プルードンは、秩序の過剰、旧来の意識の中で多くの人たちが苦悩し、またその社会規範の急激な崩壊のなされていた社会の中で生きていた。彼は社会の在り方について思考したのであって、・・・。先祖返り、つまりカトリックの宗教思想の中に回帰することを批判していたのだ。そして、双務的な人間関係を、流通、交換関係の中から新しい関係性を構築していくことを目指した。

＊マックス・ウェーバーの使用している「エートス」という言葉の訳語は必ずしも一定していない。「経済倫理」、「宗教倫理」、より広く「精神的雰囲気」などと訳出されているが、なんらかのあるべき姿をさし示す「倫理」とは区別された、本人のあまり自覚しない日常的生活態度である。日常的な生活行動や生活態度を深いところで規定し、常に一定の方向に向わせる内面的原理を意味する。

「フランス革命に続く一世紀は、宗教を激しく批判することで逆説的に宗教が果たしてきた役割を問い直し、その機能を新たに作り直そうとした時代である。と同時に、一度は断ち切った人々のつながりを、新たに作り直すことを自覚的な課題とした時代でもあった。このようなフランスの経験は、人々をこれまで結び付けていた紐帯が解体す

*るなか、新たな**社会統合**の原理を見いだせないでいる日本社会にとっても示唆するところが大きいだろう。」*

＊『共和国か宗教か、それとも　19 世紀フランスの光と闇』序章　宇野重規

〈二月革命と初等教育〉

＊以下のまとめは、『1848 国家装置と民衆』上村祥二「二月革命と初等教育」による。

1789 年のフランス革命以来、初等教育の在り方については、長く論議されてきた。それが、七月王政、そして第二共和政、第二帝政を通して、初等教育の必要性は、多くの人たちの承認するところとなった。フランス革命では、1791 年憲法では、自然権に基づいて教育を受ける万人の権利と義務という新しい理念が示された。しかし、教育の必要性がフランス社会の大勢となるのは、1830 年からの七月王政からであった。

①七月王政の統治者たち―「ギゾー法」の成立、これはフランス革命の経験から、無知な大衆は騒動を起こし凶暴であるという教訓を得た社会の支配層が教育の意味を見出した。このような人たちが期待したのは、宗教的道徳教育であった。しかし、ともかく、教育のシステムが作られた。師範学校が設置され、教員免許状の取得が義務付けられた。

②社会改良家たちの動き―フランス産業革命で引き起こされた都市化と民衆の貧窮を個人の問題としてではなく、社会の問題と理解した。都市と向上における労働習俗の矯正、規律化を教育に求めた。これは、新中間層とも言うべき新しい産業家や自由業者で名声があり富の形成できた人たちは、伝統的社会習慣とその規律の解体に危機感を抱いた。民衆の品性の堕落、工場での労働規律のひどさ、売春、アルコール依存症、窃盗、傷害事件等の頻発している現実からの社会の再建を求めた。法律や制度だけでは問題が解決しない、政治は一種の社会衛生である、とした。警察による取り締まりだけではなく、より抜本的解決を教育によってしようとした。民衆には規律を与えなくてはならないと。

③第二共和政の初期、フランス革命の衣を継承している共和主義者たちは、二月革命後すぐ、共和主義思想を民衆に広めていくために、初等教育にその意義を見出した。この改革はなかなか普及しなかったが、それでも、師範学校出身の教師たち共和主義的思想を獲得していくことになった。彼等は、民衆の教育の必要性、宗教団体による教育の問題性、教員の待遇改善等について発言を繰り返してきた。初等教育は普遍的なものであるから、貧者にも富める者にも平等に届かなくてはならない。だから、無償でなくてはならない。普通選挙が宣言された国において、市民は無知でいられる自由はない、・・・と。教育による人間的成長に期待した。

④民衆自身が教育に熱心になる。教育から得られる知識がよりましな生活に道を拓くことに気づき出した。都市の人たちは、教育の必要性を自覚しだした。このことを自覚的に主張したのは「アトリエ誌」である。

教育は諸々の自由の中でも大切なもの、精神の自由を与えることである。人間が平等で兄弟であることを知らせることにある。人間の利己的な性向を抑制し、社会の中でのその義務を教え果たさせるためにある。社会的な行動規範は献身である。このモラルは普遍的なものであるから、万人に届けられなくてはならない。したがって教育を受けることは権利であり義務でもある。教育は与えられるべきもので、売られるものではない。だから、社会の負担で、つまり無償の教育でなくてはならない。・・・と。

①と②は、今日の秩序の維持を、③は明日の社会秩序のための教育である。そして①と②は民衆を危険な階級として恐怖感を持っている。だから、上からの監視・統制・訓練を教育の目的としている。③と④は現状からの解放と将来の建設への希望の表明である。

現実の歴史は、1848 年の選挙で保守的な議員(七月王政期の政治家たち)が多数となった議会は、③や④の人たちの意見を無視して、第二共和政の教育改革案を葬り去った。これらの議員たちは、普通選挙を廃止し、さらに師範学校の廃止まで決議＊した。さらに、地方の農村社会に知識をもたらしていた民衆本の行商商人に対する許可証の義務化、さらにリーフレットの検閲、人々の情報交換の場であった居酒屋の閉鎖権を知事に与えている。このように、民衆への知識の普及を制限しようとした。田舎の地主＝産業家＝金融業者たちは、教育を受けた農夫は傲慢で怠け者になるとして教育の普及にもともと敵意を持っていた。それが、これらの保守層は、1948 年の 6 月のパリの人々の騒ぎ(蜂起)に恐怖したために、いっきに激しく反動化した。そして教育を反共和的で反動的なカトリックの教権下に置いた。彼等は、余裕のある生活は万人のものではないとして、無償の義務教育を否定した。彼等は自分たちの地位を維持するために、最後の砦として教会にとりすがった。そして初等教育の教員たちを、中央政府の代行者(知事)に従属する公務員とした。

＊師範学校の廃止の法案は大統領であったルイ・ナポレオンに拒否されて、これは実施されなかった。

さて、このような歴史を振り返ると、日本の戦後の保守党のしてきた教育政策に似ていることがよく分かる。フランスの当時の支配層は「余裕のある生活は万人のものではない」との意識で、民衆の教育による知識の獲得に否定なことが分かる。偏差値教育から落ちこぼれた民衆には従順という道徳を、ほんの一部の偏差値秀才とブルジョワエリートには理性的科学的思考を、・・・。支配階級の支配を根拠づける世論の形成のための教育を、・・・。つまりはイデオロギー装置の機能を発揮することが教育においては求められてきた。

しかし、一度人々の心に灯った思いは消え去ることはない。フランスの 19 世紀、カトリックの中にも次のように述べている人たちがいた。カトリックの「影響力の自由であ

って、自由を排除した支配ではない」「司祭は教員の代わりはできない」と、・・・。
★1840 年代に盛んに教育問題について発言した人たちは、挫折感と無力感に取りつかれて沈黙した。しかし、変化は確実にあった。当時はカトリック的社会主義志向の人たちが一定数いたが、それはもうはっきりと、反教権、反カトリックへと変化した。やがて、1860 年代になると彼等の運動は再度活性化して来たが、これまでの歴史的経験を踏まえて、フランス社会において教育についての主張は、プルードン、プルードン主義者、そして後のサンディカリストたちの思潮の中に現れてくるようになった。
★③のような理念に基づく教育は、ナポレオン三世の第二帝政後の第三共和制で、19 世紀の終わりごろに実現されることになる。徹底した政教分離政策(ライシテ)という反カトリック政策の下で、・・・。これが今日のフランス共和国の社会統合の基礎的基本的なものとなった。

ジョン・レノンとプルードン
―マルクス主義とは縁もゆかりもない、もう一つの「近代」の可能性―

青野　豊一

＊以下の文章は、雑誌「図書」(岩波書店)に書かれていた細見和之氏の文章をもとにして、私なりに追加・修正したものである。

ジョン・レノン 「イマジン」

Imagine /	John Lennon & Yoko Ono
和訳 Akihiro Oba	

Imagine there's no Heaven
It's easy if you try
No Hell below us
Above us only sky
Imagine all the people
Living for today...

Imagine there's no countries
It isn't hard to do
Nothing to kill or die for
And no religion too
Imagine all the people
Living life in peace

You may say I'm a dreamer
But I'm not the only one
I hope someday you'll join us
And the world will be as one

Imagine no possessions
I wonder if you can
No need for greed or hunger

A brotherhood of man
Imagine all the people
Sharing all the world

You may say I'm a dreamer
But I'm not the only one
I hope someday you'll join us
And the world will live as one

想像してごらん　天国なんて無いんだと
ほら、簡単でしょう？
地面の下に地獄なんて無いし
僕たちの上には　ただ空があるだけ
さあ想像してごらん　みんなが
ただ今を生きているって…

想像してごらん　国なんて無いんだと
そんなに難しくないでしょう？
殺す理由も死ぬ理由も無く
そして宗教も無い
さあ想像してごらん　みんなが
ただ平和に生きているって…

僕のことを夢想家だと言うかもしれないね
でも僕一人じゃないはず
いつかあなたもみんな仲間になって
きっと世界はひとつになるんだ

想像してごらん　何も所有しないって
あなたなら出来ると思うよ
欲張ったり飢えることも無い
人はみんな兄弟なんだって
想像してごらん　みんなが
世界を分かち合うんだって…

僕のことを夢想家だと言うかもしれないね

でも僕一人じゃないはず
いつかあなたもみんな仲間になって
そして世界はきっとひとつになるんだ

オノ・ヨーコについて―ジョンの告白―

「僕はとても嫉妬深くて、独占欲の強い男でした。単にヨーコのことで嫉妬深くなるだけじゃなくて、男と女に絡んだすべてのことに対して嫉妬深くなる……。とても不安な男だから、自分の彼女を小さな箱に閉じ込めて、鍵をかけておきたくなる。彼女と遊びたくなったらそこから引っ張り出して、遊び終わったらまた箱に入れて片付けてしまう……。人間は誰かに恋をしているときに嫉妬深くなって、恋する相手を 100%独り占めしたくなる。僕もそういう人間なんです。僕はヨーコのことを愛している。ヨーコを完全に所有したくなる。でもヨーコを窒息させたくはない。それは危険なことです。独占するあまり、死に至らしめることになってしまっては」

＊以下は「図書」2018 年 9 月号に掲載されていた細見和之氏の文章である。下線は、青野が強調のためにした。

細見和之 兵庫県、丹波篠山市在住。2007 年「アドルノの場所」で大阪大学から博士（人間科学）。2013 年 5 月より自分の詩に曲を付けはじめるとともに、高校時代のバンド仲間と the チャンポラパン band を結成、丹波篠山市を中心に大阪でもライブ活動も行ない、ソロでの展開をふくめて活動を模索している。2014 年から大阪文学学校校長。2016 年 4 月から京都大学大学院人間・環境学研究科総合人間学部教授。

先日、プルードン『貧困の哲学』(斉藤悦則訳平凡社ライブラリー)を優れた日本語訳で読んでいて、つぎの箇所に出会ったときに、不意に胸を衝かれるような印象があった。

宗教における神、政治における国家、経済における所有、人類はこの三つ重なりの形態のもとで自分自身を外在化させ、自分自身をたえず自分の手から引き離してきた。そしていま、われわれはこの三つをまとめて廃棄しなければならない。（プルードン『貧困の哲学』上、斉藤悦則訳、平凡社ライブラリー、P.544。

この一節にふれたとき、ほかでもない、ジョン・レノンの名曲「イマジン」のことが私の頭に浮かんだのだった。あの曲では、「イマジン(想像してごらん)」という言葉に導かれて、一番で「天国」と「地獄」が否定され、二番で「国家」が否定され、さらに三番では

「所有」が否定される。まさしくプルードンが「廃棄」を訴えている三つないし「三つ重なり」が順番もそのままに登場するのだ。一九世紀の半ば、一八四六年に刊行された『貧困の哲学』と一九七一年にアルバム『イマジン』に収録された「イマジン」のあいだのこの決定的な結びつきないし重なりを、私たちはどのように理解すればいいのだろうか。

レイ・コールマンによる伝記『ジョン・レノン』(上下、岡山徹訳、音楽之友社、一九八六年)を読んでも、あるいはレノンのインタビューを集めた大部な『ジョン・レノン　音楽と思想を語る――精選インタビュー1964―1980』(ジェフ・バーガー編、中川泉訳、DU BOOKS、二〇一八年)を紐解いても、当然ながら「イマジン」という曲は繰り返し話題にのぼっても、その歌詞がプルードンの思想と関係づけられたりはしていない。おそらくレノンが直接プルードンを読んだ事実はなかったのではないかと思われる。

レノン自身はしばしば、「イマジン」は彼の二番目の妻ヨーコ・オノとの本来合作と呼ばれるべきものだった、と語っている。彼が具体的にあげているのはオノの『グレープフルーツ』である。一九六四年に東京で初版が刊行され、一九七〇年に増補版がニューヨークで出版されたものだ。再販に際してはレノンがごく短い「序文」を書いている(「ハーイ！　ぼくの名前はジョン・レノン／ヨーコ・オノを紹介するね」というわずか二行がその「序文」である)。全篇にわたって、オノの優れた言語感覚がうかがわれる、特異な詩集のような本だ。とはいえ、レノンが触発されたのは、そこで繰り返されている「イマジン(想像してみなさい)」という命令形であって、宗教、国家、所有の否定というプルードンの思想とそのまま重なる歌詞の内容とは、無関係であるように思える。

しかし、直接的な結びつきがないにもかかわらず、一二五年の歳月を距てて、一方はフランス語の著作で、他方は英語の歌で、ほぼ同じ内容が語られ、歌われている、ということ自体が、ここではやはり重要なのではないだろうか。レノンが身を置いていた文化環境のなかにプルードンの思想が地下水脈のように流れていた、といってもよい。あるいは、一九世紀と二〇世紀において、およそユートピアについて考えるかぎりこうならざるを得なかった、ともいえる。

ジョン・レノンは一九四〇年に生まれ、一九八〇年に四〇歳で銃撃によって殺された。その四〇年は、プルードンの思想がマルクスの影にいちばん隠されていた時期かもしれない。プルードンといえば、マルクスの『哲学の貧困』によって「プチブル」として一蹴された思想家というイメージが長らく続いた。実際、日本においても、プルードンが本格的に紹介されたのは、三一書房の「アナキズム叢書」に三巻本としてプルードンが翻訳されたときのことだろう。プルードンの名を一躍知らしめた『所有とは何か』を収めたその第Ⅲ巻の翻訳が出版されたのは、一九七一年六月一五日、まさしく「イマジン」とほぼ同時期なのである(「イマジン」の録音は一九七一年七月。ただし、『所有とは何か』の翻訳自体は英訳版からの重訳の形で、戦前に出版されてもいた)。

レノンの「イマジン」の詞に関しては一方で、「夢物語」と批判的に捉えるむきもある。たとえば、レノンの活動を月ごとに緻密に追いかけたジョン・ロバートソンすらこう記している。「今となっては〈Imagine〉を、自分自身と世界への希望を歌ったレノン最大の傑作だとする神話と切り離して考えるのはひどく難しい。しかしその歌詞は、実のところはるかに複雑だった。『所有なんてない、と想像してごらん／はたしてきみにできるかな』」とレノンは、自分が富を捨て去ることはできないことを承知のうえで書いた」（ジョン・ロバートソン『ジョン・レノン大百科』速水丈・奥田祐士訳、ソニー・マガジンズ、一九九三年、一二六頁。この本の原題は「ジョン・レノンの芸術と音楽」）。

レノンとオノが自らの資産をさまざまな慈善事業につぎ込んでいたことはよく知られているだろう。それもまた、ビートルズに由来する莫大な資産を持つ者にのみ可能な贅沢の一種と見られるかもしれない。しかし、「所有の否定」を実際どう考えるかは、『所有とは何か』における「所有とは盗みである」という名高い言葉とは裏腹に、じつはプルードンにおいてもけっして単純ではない。さきに引いた『貧困の哲学』の一節において神、国家とならべて所有が明確に否定されているにもかかわらず、同じ『貧困の哲学』において、プルードンは所有を、彼にとってかけがえのない「自由」と結びつけてもいるのだ。

プルードンは、分業であれ、機械であれ、人類が生み出したものには基本的に肯定的な力が備わっていると考える。それは本来、生産力を高め、人類を豊かにするはずのものなのだ。けれども、それらがことごとく否定的な威力を発揮して、かえって貧困をますます増大させている。それが一九世紀の現実だった。だからといって、分業や機械を根絶しようとするのは間違いだとプルードンは考える。肝心なのは「均衡」と彼が呼ぶものに到達することである。平たくいえば、人類を総体として豊かにするようなバランスを、分業についても、機械についても発見することである。これはきわめて常識的な考え方といえる。もっというと、常軌を逸した現実のなかで、同じく常軌を逸した対案が跋扈するなかで、懸命に正気を保とうとしていたのがプルードンだったといってもよい。

所有についても、同じような方向で彼は考えていたに違いない。自他ともに認める「社会主義者」でありながら、そもそも、所有の否定から単純に帰結しがちな「共産主義」に対して、プルードンは一貫して激烈なまでに批判的なのである。そして、まさしくその点が、プルードンの思想を私たちにとってきわめてアクチュアルなものとしているのだ。

河野健二は『プルードン研究』の「はじめに」で、その点をこう評している。

プルードンの思想と行動が私たちに示唆するものは、一〇〇年間の時の経過をのりこえて直接的であり、アクチュアルである。このブザンソン生れの独学者〔プルードン〕は、第一インターに始まる共産主義運動の一〇〇年末のなりゆき、ロシア革命に始ま

る六〇年間のプロレタリア権力をあたかも知りつくしているかのように、私たちに語りかける。（河野健二編『プルードン研究』岩波書店、一九七四年、京大人文研））

プルードンを読んでいるとまさしく河野のいうとおりなのだ。一八四〇年代の時点で、当時の共産主義者たちの思想が実現されれば国家権力による非情な独裁に至らざるを得ないことを、プルードンは危機感をもって執拗に説いている。その後の社会主義革命の歴史は、まさしくプルードンの予言どおりに展開したとしかいいようがない。河野の文面は一九七四年に書かれている。つまり、まだ社会主義国が現に独裁的な力を発揮して、今後も発揮し続けると想定されていた時代に書かれたものであって、私たちはその後の社会主義圏の崩壊を目にしてすでに三〇年近くに至ろうとしているのだ。

とはいえ、「所有とは盗みである」とか、神、国家、所有をまとめて廃棄しなければならないというプルードンの激烈な主張が、重要な意義を有していたことも疑いがない。プルードンからすると、本来自由の実現と結びつくべき所有であればこそ、現存の所有形態は激烈な批判の対象であらねばならなかったのだ。そういう彼の思想はパリ・コミューンまでは公然とした影響力を発揮していたのだった。ジョン・レノンにおいても、神の否定が祈りの否定でなく、国家の否定が人間の共同性の否定でないように、所有の否定は事物との固有の関わりの否定ではなかっただろう。それでいて、あるいはだからこそ、「イマジン」という楽曲は私たちにあるべきユートピアをいまも示唆してやまない。

一九七〇年代にプルードンが日本でも本格的に紹介されながら深められることがなかったのは、あくまでマルクスとの対抗関係でプルードンが捉えられていたからではないだろうか。マルクスに厳しく批判されたにもかかわらず、独自の意義を有していたプルードン——。それはやはりどこかマルクスという亀のうえに乗せられたプルードンだったのではないか。そのかぎりにおいて、マルクスの退潮とともに忘れ去られるべきプルードンだったのではなかったか。

プルードンを読みながら、そして「イマジン」を聴きながら、ここから近代というものをやり直すことはできないものかと、私は一種の夢想に駆られる。マルクスとはいわないまでも、少なくともマルクス主義とは縁もゆかりもない、私たちの「近代」を辿りなおす可能性である。

・・

プルードンと娘たち　　クールベ画

著書紹介　細見和之 『「戦後」の思想―カントからハーバーマスへ』 白水社　出版社からのコメント

＜生きのびるために＞

18 世紀末にドイツのカントが提唱した「永遠平和」の理念から 200 年以上が経つ。この理念は、第一次対仏大同盟戦争のバーゼル講和条約後に掲げられたカントの「戦後思想」と言える。

ドイツを中心とした近代・現代の社会思想を改めて「戦後思想」と捉えなおしてみると、それぞれの思想家の思考が現実に根ざした生々しい思想として浮かび上がってくる。

本書は、それぞれの戦争の時代を生きた思想家がその戦争という圧倒的な現実にたいしていかに思考をめぐらし、どのような戦後思想を紡ぎ出していったかを論じていく。扱う対象は、カントをはじめとして、ナポレオン戦争をめぐるフィヒテとヘーゲル、普仏戦争の時代に生きたマルクスとニーチェ、第一次世界大戦期のハイデガーとユダヤ系の思想家ローゼンツヴァイク、そして全世界で数千万人の人びとが命を落とした第二次世界大戦後のアドルノ、アーレント、ハーバーマスに及ぶ。

いまでもカントの理念が大きな影響力をもち、EU(ヨーロッパ連合)の取り組みなどを思想的に後押ししていることを考えるうえでも、本書は示唆に富む。

〈ほんの少しの、青野の追伸〉

＊『経済的諸矛盾の体系、あるいは貧困の哲学』は、経済学の書物ではない。プルードンの書物は、今でいう社会学の書物である。それなのに、経済学の書物としてマルクス経済学の立場から批判されてきた。津島陽子氏などは、この批判のために研究していたとも言えそうだ。これは、マルクス主義の影響が強かった時代のモノであろう。社会経済は「市場での貨幣による商品取引」だけで成立しているのではないのに・・・。このことを、プルードンは指摘しているのに、このことを理解していない人たちが多い。プルードンは法・経済・宗教、つまりは人間存在を諸領域から横断的に思考している。一つの学問分野で評価できるものではないのだ。

＊プルードンの言う「宗教、政治、経済」を、これを交換関係の三形態に言い換えると、「贈与交換関係」「収奪・再分配の交換関係」「市場における貨幣による商品交換関係」となる。さらに、「ネーションという国民意識」「国家」「資本」と言い換えることができる。要は、三位一体の体制が問題なのだ。これをプルードンは「神」「国家」「所有」とも言い換えている。

＊プルードンは「所有」を批判したのであって、否定はしていない。彼の所有については、たくさんの留意がいる。私的「所有」そのものを否定して共同所有にしなくてはならないとしているのではない。所有による使用権を否定しているのではない。所有の対象となる物・モノを自分勝手に処分、「濫用」する権利を問題としているのだ。

これを言い換えると、「所有から」、「占有」へと、・・・。

「・・・人間はそれらに絶対的な所有権を有するのではなく、その用益兼者であるにすぎない。・・・所有者というその名は比喩として与えられたにすぎないことを忘れてはならない。」

『所有とはなにか』1840 年

他者を排除した*「自らの家と田において、ブドウとイチジクのもとで支配者となるという、果てしない魅力」こそが、所有者にとっては物質的な利益よりも根底にある。」*

（ブランキ氏への手紙）

このように、自分の所有から他の人を締め出す能力を、排他性を彼は問題とした。いや、これこそが、近代社会の「所有権」であることを指摘している。このような所有意識が、頑迷な保守思想を創り出している。農民たちの保守思想、大ブルジョワたちや旧来からの銘家出身者たちの戦前回帰思想をもたらしている。

フランスにおいて「所有」を明確に位置付けたナポレオン法典等での所有権の確立とは、それまでの封建的・そして重層的関係を廃棄して、封建的・共同体的制度から解き放たれた土地所有権の擁護であった。だから、この時点では「絶対性」や無制限の「排他性」を意味していたわけではない。それが、19 世紀の中葉では、資本主義経済の進展に伴い、大きくその意味を変えてきた。

＊さらにプルードンの思想について付けくわえると、所有の持っている絶対性と排除性は社会経済の持っている「潜在力」とは相いれることができないと、述べている。この「潜在力」の内容が、プルードン思想の肝なのだ。経済学の枠内に収まらない内容を有している。このあたりのことが理解できないと、マルクス経済学による批判に終始してしまうことになる。「潜在力」とは、（河野健二編『プルードン研究』の中の作田啓一氏の「プルードンの社会理論」に書かれている「現実の社会」という言葉の意味していることであろう。ここでも説明をしないとわからないであろうが、プルードンは、人間社会の底流には、この「現実の社会」というものがあり、日々の生活を表面的には規定しているのを「公認の社会」との対抗関係にあるとしている。

このことについて、プルードンは次のように述べている。

「われわれ人間がみな結合していないなどということがありうるのだろうか。・・・われわれがそうであることを欲しないときでも、事物の力、消費の必要性、生産の法則、交換の数学的原理がわれわれを結合させる。この規則のただ一つの例外は所有者の場合である。所有者は不労所得の権利によって、生産をしつつも、誰とも結合せず、したがってその生産物を他人と分かち合わずに済むし、誰も彼に自分の分け前を与える義務はない。」『所有とはなにか』1840 年

社会がもっている「潜在力」とは、このような意味である。

★ただ、先の『プルードン研究』の中で作田氏はプルードンの人民銀行構想を実現不可能なものとして否定している。これは、現在の資本制経済が絶対なものとしての見解であろう。社会経済体制

の改革・変更を通して、その変革過程を経由していくものとしての位置づけがなされていない。

＊このことを分かりやすく言い換えると、現在の所有を肯定しているシステムは、物を介して形成される関係を貧困化させているという意味である。物に対する絶対的支配は物の多様性や相互作用の多様性も制限している、とも言いえる意味である。『貧困の哲学(1846 年)』では、*「所有は、われわれを自由にするはずであったが、実際はわれわれを囚人にする。・・・所有はわれわれをお互いに暴君と下僕の関係に変えて、われわれを堕落させるのである。」*と、述べている。

＊また、彼の宗教論、神についての執拗な議論を何故しているのかを理解しなくてはならない。当時のドイツとは異なり一応は政治的革命を経たフランスにおいての、19 世紀の中葉においての意味を・・・。

彼の神についての文章は、「しつこい」。経済制度と哲学的な思想から見て、神と人間との闘いを追求しようとした。人は、神から遠いのだ。神は、人間より動物に近いのだと。神は、思考し反省することがないのだから。

「神は、・・・自然の全体の中に存在する。だが神は社会の中において、進歩する存在との対立を通じてのみ見出される。」

でも、彼は、宗教の否定はしていない。

まずは、この『貧困の哲学』のプロローグだけでも読まれることをお勧めします。ただし、一回程度読んだだけでは、彼の意図することはわからないであろう。ここらのことが分からないと、・・・。特に、マルクスの書物を読んできた人には、・・・、プルードンの思考についていけないことが予測される。

プルードンは最初期のころから、あらゆる対立や問題を一挙に解決する偉大な人物の可能性を否定している。「社会は自身の救済を自身の手以外に期待することはできない」(日曜礼拝論)としている。巨大な断絶を経てまったく新しい何者かの到来が歴史に画期をもたらすことはない、と述べている。

まとめとして**・・・プルードンの思想を、マルクスとの対抗関係で見てはいけない。彼はマルクスに批判されても、何にも気にしていない。無視するだけであった。思想の次元が異なり、会話が成立していない。マルクスからの提携の要請を、やんわりと断っている。このプルードンからの提携の拒否に、マルクスは激しく怒り、『哲学の貧困』を書くことになる。**

＊プルードンとマルクスの手紙のやり取りの訳文は、プルードン『革命家の告白』 山本光久訳(作品社)の最後に掲載。

『哲学の貧困』(1847 年)について　斉藤悦則氏の HP より

これは、マルクスによるプルードン批判の書。マルクスはプルードンが 1846 年に刊行した『貧困の哲学』のタイトルをひっくりかえしパロディの才を示すとともに，叙述の全体にプルードンへの悪罵をちりばめて，科学的社会主義の先達を言葉の勢いで乗り越えることを企てた。9歳年上のプルードンが労働者階級の出身でありながら 1840 年の『所有とは何か』で名をあげ，ヨーロッパ規模の知的スターとして存在していたのに対し，当時のマルクスはまだ無名のままパリ，ブリュッセルあたりをうろつくドイツ人亡命者にすぎなかった。

したがって，相手の頭の悪さを言いつのる本書は，知性を誇る著者の嫉妬心と功名心の産物と受けとめられることはあっても，フランス語で書かれたものでありながらフランスの知識人・労働者にはほとんど何のインパクトも与えなかった。プルードンも著者からこの本を寄贈され，読んでいるが，「批判」には何ら痛痒を感じず，むしろ著者を憐れむ。寄贈された本の欄外にプルードンはこう書き込む:「マルクスの著作の真意は，かれの考えそうなことはどれも私がとっくに考え，かれより先に発表しているので悔しいという気持ちだ。マルクスは私の本を読んで，これは自分の考えだと歯がみしている。それが見え見え。何というやつだ！」。たしかに，マルクスは批判をしているつもりだが，それは相手が到達した高みの，その本質的な部分で対決して，議論の次元を高めていくたぐいの批判ではない。相手の主張を勝手にゆがめたうえで，そのゆがみを攻撃する。たとえば，「経済的カテゴリーの良い面を保持して，悪い面を除去せよ」というのがプルードンの形而上学だと嘲笑する。この箇所へのプルードンの書き込みはこうだ:「ぬけぬけとした中傷！」。

しかし，マルクス個人の思想的成長にとっては，この著作はきわめて重要な位置を占める。マルクス自身，のちに『経済学批判』「序言」でこう述懐している:「われわれの見解の決定的な諸点は，1847 年に刊行された『哲学の貧困』のなかで，たんに論争のかたちではあったが，はじめて科学的に示された」。すなわち，パリ滞在中に「市民社会の解剖学は経済学のうちに求めねばならない」[同]と悟得して開始した経済学研究の最初の学問的成果が『哲学の貧困』であった。その「科学的」方法が『資本論』の方法の原型となっていくという意味でも，マルクス経済学形成史上「決定的な」作品である。プルードン批判としては当たっていないにせよ，マルクスはこの著作によってかれ自身の「以前の哲学的意識を精算する」ことに成功した。唯物史観がここで確立されてゆく。

斉藤悦則氏の HP より　　矛盾と生きる
――プルードンの社会主義――

「所有とは盗み」という言葉で有名になったプルードンである。しかし、彼の晩年の言葉によれば「所有とは自由」である。一方には激しい所有非難があり、他方には所有の礼賛がある。たしかに、彼の言葉の不整合をあげつらって、プルードンを「生きた矛盾」だなどと批判するのは簡単だ。また、プルードンを救うつもりで、彼の晩年の所有擁護を単なる逸脱とみることも不可能ではない。しかし、プルードン

はわけもわからぬうちに矛盾におちいったわけでもなければ、晩年になって自説を曲げたわけでもない。プルードンの思想のおもしろさは、彼自身が積極的に矛盾にこだわった点にある。

あるいは「矛盾と格闘した」と形容した方が、プルードンの主観的なまじめさにふさわしいかもしれない。しかし、彼の真意は矛盾をねじふせて、美しい解決を導き出すことではなかった。わかりやすさを求める民衆は矛盾のない社会を夢見たりするが、プルードンに言わせれば矛盾のない社会とは（ありうるとしても）活気のない「死んだ社会」にすぎない。われわれが、まじめさを武器にして、まなじりを決して（ときには血を流して）求めるべきはそういう社会なのだろうか。たとえ矛盾は解消しても、それは問題の解決ではない。プルードンは社会の問題の解決は求めたが、矛盾の解消は求めなかった。矛盾（プルードンの言葉によれば「アンチノミー」）こそが社会に動き（生命）をもたらすものだからだ。

プルードンの思想の味わいも、ここに由来する。プルードンの思想がゆれているように見えるのも、それは彼が社会の矛盾を丸ごとつかまえようとしているからにほかならない。われわれは以下で、プルードンが矛盾にこだわることによって大事にしようとしたものを見ていく。そして、それが今日の問題状況とどう響きあっているかも見てみたい。 以下略

＊マルクスの『資本論』は、社会の矛盾を丸ごとつかまえようとしてはいない。学問的には経済学(市場における貨幣による商品交換)の枠内で、そしてそれをイギリス国内の枠内で記述している。収奪・再分配という交換関係と贈与交換関係については初めから封印している。
＊斉藤悦則訳　プルードン『貧困の哲学』 平凡社ライブラリー　上・下
＊詳しくは、斉藤悦則氏の HP 参照。また、斉藤氏はたくさんの翻訳もされているのでネット検索を!

—未来の他者の呼びかけに応じるために—　(2022.8.17 修正版)

思考することの意味・・・自分の理想・夢を食べ、今を消費するだけではいけない・・・
—最悪・最低の選択とならないために—

青野　豊一

大澤真幸『新世紀のコミュニズム』*(NHK 出版新書)* を皆様に少しは読んでいただきたく思い、興味・関心を向けていただきたく思い、以下に書いていきます。皆様の抱えている現実、そして課題は人それぞれです。でも、このようなことに対して、人は何故思考するのか。そしてその思考の意味は?このような思索なくしては、未来社会は開かれないことは間違いないが・・・。だから、このようなまとめをしている。

この本は初心者にも理解できるように、丁寧に書かれている。「注」も丁寧に記載されている。学者ぶって難しく述べることはしていない。私たちは、この本を導きの糸として、より深く思考しなくてはならない。

5 月 14 日、今日も昨日からの雨が、いやいや一昨日からの雨が続いている。麦畑に行くと、この雨で麦が倒れ掛かっていた。熟して重たくなってきた穂先が、雨のために垂れ下がってきている。このような事態が続くと、今年も麦は等外となり、収入が激減する。等外では、国からの補助金も出ない。またまた、こうなりかねない。

今日(6/8)は、3 つの田んぼの代掻きをした。朝の 5 時から田に水を入れて、・・・。予定では 1.3 反程度の代掻きの予定であったが、急に苗が来ることになり、もう一枚、0.4 反の田の代掻きもした。そのため、今日は、ずっとトラックターに乗っていた。そのためか、今も身体が揺れている感じがする。

さて、代掻(か)きをしながら、最近のメールをしている皆さんのしていることの意味について考えた。まったく意味がないとは言えない。しかし、このメール交換がいかなる意味を有しているかについての意味付けが必要であろうと思う。単なるおしゃべりではいけないのだ。もっと徹底して語れば、それなりの意味を成すものとなろうと思われるが、・・・。さてさて・・・どうであろうか。そう、単なるメール交換から、自分の意見をそれなりにまとまった文章として提示することをしていただきたいと思う。それができているであろうか。ここが、大切なところであろう。そして、このようなことをすることの意味は、何なのか。ここの問い詰めなくして、次には進めないであろう。

思考することの意味

私たちが思考して活動することの意味付けとしては、大澤真幸氏の『新世紀のコミュニズム』(NHK 出版新書)の前書きに書かれていることを参考にして考えることが最

適であろう。ここには、大澤氏の明晰な問題意識が書かれている。大澤氏の書かれている具体的なことに賛同する必要はない。でも、問題意識は一読に値する。

大澤真幸『新世紀のコミュニズム』*(NHK 出版新書)* 目次を以下に掲載する。

第 1 章　人新世のコロナ禍

第 2 章　普遍的連帯の(不)可能性

1　簡単に理解できることなのに……　2　倫理的な洗練の極と野蛮の極

3　イエスの墓の前で　　4　動物としての人間の生　　5　禁欲の資本主義

6　もうひとつの時間

第 3 章　惨事便乗型アンチ資本主義

1　ソフィーの選択のように　　2　ベーシック・インカムは可能か

3　現代貨幣理論の盲点　　4　惨事便乗型アンチ資本主義　5　脱・私的所有

第 4 章　脱成長のための絶対知

1　人新世の危機に抗するために　　2　悪い報せとよい報せ

3　交換価値か、使用価値か　　4　科学知の運動　　5　絶対知の逆説

第 5 章　新世紀のコミュニズムへ

1　知と無知　2　新世紀のコミュニズムのために　3　資本主義に内在するコミュニズム

＊さて、この本で述べているコミュニズムは、ソ連のような「国家社会主義体制」のことではない。でも、コミュニズムや共産主義や社会主義は手あかのついた言葉であるために、どうしてもマイナスイメージを持ってしまう。そこで、「アソシエーショニズム」とした方がよいであろう。この言葉は、人々の協同参画の力によって成り立っている理想社会を思考(指向)している思想(運動)のことである。アソシエーションとは、社会集団の類型の一つ。一定の目的を果たすために、同じ関心をもった人々が人為的・計画的につくった集団をさす。コミュニティと対置される言葉である。このことについては、補説 7 を参照。まとめとして、最後に記載した。

＊この本からの引用は*斜体*、その他は要約である。下線は強調のためにに青野がつけた。私の意見と説明は、青野と明記している。

・・・

社会秩序を大きく混乱させる破局的な出来事を私たちは何度も体験してきた。・・・いずれも大きな危機ではあったが、新型コロナウイルスのパンデミック＊は、少なくとも一つの点で、未曽有のことだったと言える。・・・新型コロナのパンデミックは、文字通り、真に全地球的な規模のものだった。＊前書き

＊パンデミック―人獣共通感染症(伝染病)が世界的な大流行をみせること。なかでも生命に関わるような症状を伴う感染症のパンデミックは、人類にとって脅威である。人類の歴史を通じて、

天然痘や結核、ペスト、インフルエンザなどのパンデミックが数多く発生している。最も致命率の高いパンデミックは、黒死病として知られるヨーロッパの 14 世紀のペストのパンデミックであり、2000 万人以上が死亡したと言われている。
このような細菌やウイルスによる病気は昔からあったが、全世界的な同時流行は、20 世紀後半から始まった。インフルエンザ、エイズ、高病原性鳥インフルエンザ、SARS（重症急性呼吸器症候群）等であった。
さて、このようなことは、昔々からあったことなのだ。特に人々が集まって暮らしだした、国家の成立とまでは言い難い都市国家らしき集落は、このような感染症で簡単に崩壊している。このことについては、『反穀物の人類史—国家誕生のディープヒストリー』ジェームズ・G・スコット(みすず書房)を参照。補説 1 に解説。

さて、この危機は感染症についてだけのモノではなく、経済の問題であり、生活全般の問題である。さらに、政治の在り方、さらには倫理的な問いを突き付けられたものであった。つまり、すべてに関わっている。だから、専門家などいない。私たちが考えなくてはならないことであり、よくわからなくても、行動として、とりわけ政治的な行動として現実化していかなくてはならない。

*これに匹敵する規模の破局的なことが起きる頻度が急速に高まっていくと観測する十分な根拠がある。コロナ禍が、たまたま運悪く 2019 年に始まったわけではなく、人新世＊の環境変動の一環として生じている可能性が高い。＊*前書き
＊人新世(Anthropocene アントロポセン)—「人類の時代」という意味の新しい時代区分。人類が地球の生態系や気候に大きな影響を及ぼすようになったということ、人の活動がこの地球という生態に大きな影響を与えている時代となっているということを意味している言葉である。ただ、全地球的に大きく影響を与えだしたのは、近代になってからである。青野

例えば、地球がこのまま温暖化がさらに進行すれば、異常気象だけではなくシベリアの永久凍土の中に閉じ込められていた未知のウイルスが出てくるかもしれない。人新世は、人類がウイルスに感染する確率が高まる時代であり、それが世界上に一気に広まる確率も極めて高い時代である。今後、次々と未知のウイルスや病原菌が人間社会に全世界的に蔓延するかもしれない。この可能性が高いことは、間違いない。100 年に一度の災厄が、常態となるかもしれない。台風に地震、そして風水害、さらには高潮などに毎年襲われる可能性も高いことも間違いない事態となっている。私たちは、この人新世に深く深く踏み入っているということを理解しなくてならない。

こうした出来事に直面した時、勝負は、この出来事からどれだけ多くを得るか、にかかっている。パンデミックは、コロナ問題だけではない。それ以上のものである。その

ことをしかと自覚するためには、私たちが、パンデミックを人新世の先に待っている破局を予告する〈しるし〉として受け取ることができなくてはならない。＊前書き

だが、私たちは、(今のこの)危機の渦中にあっては、何か大きな社会の転換や考え方の変化の必要を強く実感するだろうが、終わってみれば、・・・小さな改革がなされただけ、ということになりかねない。このような時、強引に理想を取りに行く英雄主義は、支持も得られないし、現状維持よりも悲惨な結果を生む。

＊「小さな改革」ということさえ、その実現が難しい現状である。相も変わらず現状維持の政治選択がなされている。このような事態に対処するには、どうしても国家的行政の力や地方自治体の取り組みがなされなくてはならないのに。それなのに、国民の多数派は現状維持を選択している。東日本大震災で多くの被害を受け、東京電力の原発事故による放射能汚染で多くの人たちが避難したのに、いまだに原発の維持を主張する人たちがいる。このことについてきちんと考えない人たちの方が、多数派なのだ。近欲にとらわれた意識、金銭の損得に強く執着している人たちの言動をよく聞く。これは、どうしてなのか。何故なのか。

ここに書かれて事はすぐには実現されない。ここで予言めいたかたちで書かれたことは、大きく外れたとされるに違いない。にもかかわらず、私は、目指すべき一原理的には可能な一理想について書いておくことに意義があると考える。…挫折し、満たされなかった願望を残すためである。＊前書き

実際に生ずることは、おそらく、・・・小さく妥協的な改革である。・・・危機や破局の最終的な乗り越えには至らないであろう。＊前書き

しかし、こうした穏健な改革の連続だけが、・・・。

*現実主義的で不徹底な改革の繰り返しが、結果として最終的に・・・正しい、**徹底した変革になるためには、真の理想が「満たされなかった願望」として残っていなくてはならない。満たされなかった願望を何とか実現しようとする反復として、個々の改革はなされていくからである。挫折した願望が、幽霊のように未来の改革者たちに取りつき、彼らの現実主義的な改革の反復を理想主義的な変革へと漸近させていくのだ。***

＊前書き

青野の意見　―社会の進歩は、諸要素の新しい組み合わせの試行錯誤で!!―

特に問題なのは、このような現状維持の政府(保守政権)を批判している人たちの言動である。現在の政権を強く批判している人たちは、ともすると、夢の世界へ、理想の社会ということだけに思いを馳せている人たちがいる。でも、これは間違っている。私たちとしては、この理想へと向かう手段が最適化されるところに、目的を設定しなくて

はならない。特に、政治的意見と行動では! 政治に関する限り、理想が高ければ高いほどいいのではない。夢に偏ったことを主張する人たちを支持するだけではいけないのだ。手段を、方法を最適化したところに目的を定められる人こそ、政治に携わる資格があると言えよう。こうすることで、よりよい未来の可能性を、現実の中に見出していける。現実に合わせて、その方策をさぐらなくてはならない。理想によって現実を否定するのではなく、**現実の中に理想が実現する糸口を見出していく事が大切である。**

また、大澤氏の言う「*強引に理想を取りに行く英雄主義は、支持も得られないし、現状維持よりも悲惨な結果を生む」*ということについては、19 世紀からのマルクス主義的思考とその実践に、問題点が明瞭に示されている。このことについてもっと言えば、マルクスを含む当時のドイツのヘーゲル左派の思考形態にこの問題が示されているようだ。当時の後進国ドイツの知識人たちは、遅れを取り戻す一発逆転の思想を求めていたのだ。

このような思想に心惹かれる人たちに示したいのは、プルードンの人間観・社会観・宗教観であろう。プルードンは述べている。人間とは、「多極的で不調和な存在であり、最も高い徳行と、最も恐るべき罪とを同時に行い得る存在」であるとしている。この徳と罪とのあいだでなされる争いは、「彼の魂の本質は対立する引力間のたえざる妥協であり、彼の道徳はバランス装置であり、一言で言えば、そしてその一言がすべてを表しているのだが、折衷である。」「人間はその本性によって、罪人である。すなわち人間は、本質的に悪を成す者ではなく、むしろ不完全に作られた者であり、その宿命は自らの内で永久に自身の理想を作り直すことである。」このように、極めてカント的なことを、述べている。

マルクスやフォイエルバッハ達はドイツの後進性からの脱却と社会のさらなる進歩を求めて、高い理想的なことを述べ、ともすると神にとって代わる人類の理念を述べている。弁証法という便利な思考装置を使って・・・。でも、そのようなものはあり得ないことである。人は反省という手探り的に漸進的に進歩する不調和な存在であると、プルードンは述べている。そして、「我々の理想は無限ではなく、**均衡**である」と。分裂した諸存在からなる「**均衡**」の理念を提示している。社会の進歩は、諸要素の新しい組み合わせの試行錯誤でなされていくと、している。このような思想はマルクスたちから見て、まさしくプチプル的であると思われた。劇的な一大変革を望んでいる人たちから見て、極めて微温的である。

さて、宗教について、次のようにも述べている。このような不調和で不完全な人間の性質を一足飛びに否定しようとする願いが宗教の起源にあると。「自らの諸能力の均衡を見出すことに絶望した人間は、」宗教に「いわば自らの外に飛び出し、無限の内にこの至高の調和を求める。この調和の実現は彼にとって、最高度の理性・力・幸福である。」だから、このような現実の人間の諸条件を否定している宗教は、「社会に

対する冒とく(悪)」であるとしている。されど、宗教を、否定はしない。彼の人間観からは、宗教の否定はない。

現状維持の政府を批判し、社会変革を目指している人たちの言動は、悲しいかな、夢の世界に傾き、現実政治に関わっている野党に対して厳しい。そして、夢を語る政党・人を支持しようとしている。そして、そのことを、メールの上で語りだす。このような人たちは、自分の理想・夢を食べて満足しているようだ。これでは、何の改革もなされないことになってしまう。もたらすものは、絶望だけである。ここに問題がある。青野

＊引用文は、すべて『貧困の哲学』より、この書物の序文では、「私は神の存在を仮定する、と述べている。まずは、ご一読を!!

第一章　人新世のコロナ禍

人新世の危機とは何か。もちろんそれは、地球の生態系のトータルな破局である。人類を含む多くの生物種を絶命へと追いやることもありうる破局である。コロナ禍は、そうした破局の予兆と解さなくてはならない。

第二章　普遍的連帯の(不)可能性

このコロナ禍のパンデミックを通して学んだことは、金持ちと貧乏人の差が、階級差がより鮮明化したことである。そしてそれなのに、人々の意識は政治変革へとはなかなか向いていかない。個々人の利益に凝り固まり、「今だけ・自分だけ・お金だけ」の意識に取りつかれている。政治の在り方を変革しようという方向へ向かない。他の人と、隣の人と連帯する回路がつぶれてきていることが多い。これは、どうしてなのか。ここが、問題である。そして、人々の意識も急には、そして大きく変更しないであろうことが予想される。自分の利益、物欲に深くとらわれた行動を続けることが、予測される。

＊このような意識状況となったのは、日本社会が 1970 年代からの急激な繁栄、そして 80 年代のバブル景気等を通して、人々の意識の在り方が大きく変化したためである。もう、昔のような階級意識に基づく闘争が成立しなくなってしまった。社会党が消滅した。消費・情報文化に漂う人々の群れがあるだけだ。リースマンの『孤独な群衆』に書かれているような状態となっている。だから、近代文学は、終焉したのだ。日本社会では個人の主体の確立をめぐる人間模様を記述した文学は読まれなくなった。人々の意識は、リースマンの言う「内部指向」型の思考形態から「他人指向」型へと大きく変化したためである。

以前のように幼年期から青年期にかけて人生を生き抜く自分なりの**羅針盤**づくりをするのではなくして、周囲の他人の動向を検知する**レーダー**機能を身に着けることが、幼年期からの人間形成性と言っていってよいような状況となってしまったためである。羅針盤づくりから、レーダー機能の強化が、人間形成の目的となっている。このことについては、見田宗介『現代社会の理論』参照　青野

＊それに、日本の議員代表制という政治制度は、未来への視線より、政治変革より現実の利益を優先の結果を導いてしまいかねないものとなっている。そして議院内閣制という制度は、未来社会を見据えた政策を実施するには適していない。現状維持の、小手先の対応に終始する政治となりがちである。大統領制に比べて、諸課題に対応することに遅れてしまいがちである。一周遅れの政策をしている現実がある。現実の危機的状況に対して、対処療法的政策しか実施できていない。 青野

そして、このパンデミックには国際的な連帯が必要なことであるが、現実にはこれとは反対のことが起こっている。国家間の利己性がむしろ強化され、コロナ対策についても、不平等さがより目立ってきた。経済的に弱い国や地域の人たちは、パタパタと死んでいった。国際連帯が築けないのだ。全世界的な連帯が必要なことは頭では理解しても、実際にしていることは逆のことである。

コロナ対策としては、人間の移動制限によるウイルスの封じ込めであろう。そのためにも、コロナ感染症については、一国だけの対策では解決できないことは、直ぐ理解できる。それなのに、・・・。利己主義そのものの言動が吹き荒れている。

また、この新型コロナ対策としては、経済の問題が大きな比重を占めている。このことは多くの世界の指導者たちも分かっていた。でも、実際になされた政策は、そうではなかった。各国家の協力連帯がなされるためには、どこかの一国が自国の利益を抑制して指導的立場に立たないことには、難しい。

これまでは、第二次世界大戦後の世界では、一応アメリカがこのようなことをしようとしてきた。いつもアメリカにとって都合の良い政策のためになされていても、建前としては、世界的立場ということを掲げていた。それがアメリカの国力の低下のために、世界は、新しい「新帝国主義段階」へとなっている。もう、かつてのようなことはあり得ない。経済的には、中国が台頭した。アメリカと中国は、ことあるごとに対立している。激しい言葉のやり取りを通して、・・・。亀裂ばかり目立つ。もはやアメリカの経済力を越えた中国が何か国際協力体制を提起しても、アメリカにとって、それは中国が覇権の確立のためにしているとみなして、米中の対立の要因となっている。昔の覇権国家であったアメリカは、中国のなすこと一つ一つに批判の目を向けて、マスコミを通して世界中に吹聴している。

＊アメリカは、ねたみ根性そのものの政策をしている。世界の絶対的な覇権国家から第二位の地位に落ち込んだために、中国に対する妬みそのものの言動をしている。これは私が研究会で今まで繰り返し述べてきた田舎の毒そのものと同じ思考形態であろう。このままでは、第三次世界大戦まで、人類絶滅の核戦争まで、・・・この可能性まで考えてしまいかねない情勢である。青野

＊では、国家を単位とした連帯に期待しても、それは無理なのだろうか。でも絶望してはならない。今後の 100 年間を大きく左右する様々な問題は一国単位では解決で

きないのだから。国家間関係の在り方を変更しなくてはならない。それなのに、これらについて問題をより深刻にしているのが、実のところ「国家」なのだ。問題は、国家間関係なのだ。では、この国家間関係をよりよくしていくことの展望については、カントの「永久平和論」の視点を参考にするとよい。絶望しないために! まず現実的な方策としては、WHO やユネスコ等の非政府の国際機関の強化をしていくことが考えられる。 青野

このような意識を抱くのは、・・・、実は、破局はまだ先のことであり、温暖化で水位が上がりどこかの国が水没しても、それは他人事であり、ひょっとするとその程度で収まり、自分たちに関係する破局は到来しないかもしれない、と思っているからなのだ。

コロナ禍では、WHO とか国連がもっと強力な指導性を発揮すべきなのに、それができなかった。アメリカは、中国の批判ばかりした。特に、前トランプ大統領対立ばかりあおり、国内のコロナ対策を放棄した。そのために、感染者と死者は、どの国よりも多かった。そして感染率と死亡率も、飛びぬけて高かった。

＊このような意識は、私たちの周りにもたくさんある。福島の原発事故があったのに、これについては、今や他人事である。いやいや、あの当時から、原発の危険性よりお金のことばかり話す人たちが、私たちの隣に何人もいた。このような人たちは、いつもお金にまつわることに心がとらわれていて、今や公務員の年金についてのねたみとひがみ根性に取りつかれている。そして、実は、彼らは額に汗して働かないのだ。額に汗して労働することなく、金銭が手に入ることを夢見ている。「道路ができないかなぁ」「工場が立たないかなぁ」と、・・・。「自分の所有している土地を売りたいなぁ」と・・・。また、貧しい人をだます「オレオレ」詐欺と言われているようなことをする。 青野

普遍的な連帯が必要な時に、逆に、利己的な争いがより一層露骨なものとして前面に現れるのはどうしてなのか。

利己的なのは遺伝子レベルから、私たちに備わっていることなのか。そうではなくして、連帯感の機能する範囲をもっと広く拡大していける潜在的な可能性をもっているはずである。遺伝子レベルと身体としての人間というレベルは、異なっているのに、「利己的遺伝子」という言葉を使って自分の行為を正当化している人たちがいる。遺伝子レベルと身体的レベルでは、その意味がまつたく異なっているのに、・・・。人は普遍的価値にも共感するのに。

では、国家間関係では、何故利己的な国家運営がなされていくのか。何故、階級格差がどんどん拡大していくのか。何故、連帯できないのか。このことについての答えは、別のところにある。

経済の問題

感染症対策と経済活動の両方をしなくてはならない、という現実がある。しかしこれは、・・・。感染症対策が徹底されないのは、日々何万人もの方たちが感染し、そして一定数の人たちが確実に死んでいるのに、・・・。どうしてこのことより経済活動を重視するのか。なぜ、徹底した感染症対策が実施できないのか。

まずすることは、人の移動を制限し、経済活動を一時的に停止していくことであった。人が動けば、接触すれば感染の確立が高くなるのだから。でも、徹底した感染対策は、できなかった。これをすると、生活苦となる人たちが多くいるためである。命より、経済活動、金銭を入手できないと、今の経済体制では生きていけないためである。このような事態となるのは、私たちが資本制経済の中で生きているためである。これは、はっきりしている。

コロナ禍をその一部に含む人新世の破局(例えば気候変動問題)を克服するには、脱成長経済でなくてはならないことははっきりしているのに、このことについて考えると、今日・明日の生活が成り立たないという恐怖感に取りつかれている。社会経済の変革という道が、最初から否認されている。

それともう一つ、資本主義体制しかないと多くの人たちが考えているのは、「自由」ということに関してであろう。他の政治・経済体制ではこの自由が抑圧されるという思いを多くの人たちが抱いている。でも、この「自由」には、いろんな意味があるのだが、このあり方についての思索が必要となる。私たちはこの「自由」を享受しているのか。この「自由」を享受しているのは、誰なのか。ここまで、思考は及んでいない。ただ、「自由」という言葉に踊らされている。

今の私たちは、自由に生きているのではないのに、資本主義経済体制は他の政治経済体制より自由があると刷り込まれてしまっている。階級的な格差は厳然とある。このことについては、初めからあきらめて除外している。もっと自由になるために思考していないのだ。このような自由観に取れつかれて、ますます金銭にとらわれて、お金さえあれば、今より自由になれるという意識にとらわれて、そして自ら不自由になろうとしている現実がある。そして自分の近くの人たちへの妬み意識にとらわれている。

＊これは、「所有」についての意味の再検討が必要であるということを示している。この「所有」については、プルードンの理論が導きの糸となるであろう。彼は使用権を認めている。しかし、絶対的な使用権、他からの介入を排除することの問題性が説かれている。このことについては、別のところで提案したい。青野

GDPは下がり、失業者も増え、多くの人が収入を減らして、消費も落ち込んでいるのだから、経済は基本的には悪化しているはずだ。しかし、その経済状態の指標であるはずの株価が上がっている。これは、どうしてなのか。

コロナのパンデミックで経済がマイナス成長であるのに、株価は急落していない。ここに、答えの一つがある。資本主義というシステムへの執着といってもよい事態であ

ろう。資本主義というシステムでは、確実に貧しい人達が救済されない。このことははっきりしているのに、・・・。

さて、このことは、物質的にも、似たことが起こっている。商品でも「成功した、よく売れる商品/ゴミとして廃棄される物」という区分が、階級区分と同じようになされている。この経済システムでは、いつもそれまでより安価な経費で生産される目新しい商品開発がなされなくてはならない。この新しい物・モノが従来の価値体系の中にこの差異をもたらさなくてはならない。そうしないと利潤が発生しないことになる。新商品が次々と誕生するということは、それはまた次々と廃棄物が出て来ることになる。壊れたから廃棄物になるのではない。新商品の開発によって、廃棄物・ゴミが出現してしまう。

＊このことは、豊かな物質的環境の中にいるのに、実は私たちはこの豊かさを享受・感受できていないということである。マスコミの垂れ流す情報の中でおぼれながら、他の人と比べていつも飢餓感や優越感にとらわれているのだ。「欲望は、他人の欲望である。＊」という現実に振り回されている。 青野

＊この言葉はフランスの精神科医であり哲学者でもあったジャック・ラカンの言葉。

さて、大切なことは、

「新型コロナウイルスの侵入という偶発的な事件を、この〈始まり〉のための合図として活用する事、・・・この事件を人新世の先に待っている破局を予告する〈しるし〉として受け取り、破局に対する真の闘いの〈始まり〉とすること。100 年後にもなお人類が繁栄しているかどうかは、これにかかっている。だが、何を始めればよいのか。」

第三章　惨事便乗型アンチ資本主義

誰もが国家的エゴを抑えて、そして階級的な差別を克服した連帯が必要なことは、一応は、心の片隅では理解している。でも、この連帯はなかなかできない。このようになる原因を思考していくと、現在の資本主義経済体制への「あくなき執着」を見出すことになる。

このコロナ禍では、この資本主義という経済体制をめぐって、かつてなかった選択を迫られた。経済を優先するか、命を優先するのかという選択を。世界中のほとんどの国々で、細部の相違があっても、同様な選択に迫られた。そして、ほとんどの国で、経済優先の選択を、一時的であれ手放した。経済の停滞・縮小ということになる移動制限・ロックダウンを選択した。

＊アメリカでは、世界一の感染者と世界一の死亡者を出した。病院に入ることのできなかった貧困者たちは、たくさん死んだ。これは、まさしくトランプや共和党支持の富裕者たちは、多くの貧困者たちについての配慮した意識などない、ということなのだ。同じ国民として見ていない。自分たちの階級的利害さえ守れたらそれでよいとの意識である。国民意識が分解しているのだ。アメリカは、これからはちょっとした

内戦状態となろう。国内的テロが散発的に発生することが予測される。これは、実は日本のことでもある。その程度の差がアメリカとは異なるだけである。 青野

人の移動の厳しい制限、飲食業の時間制限と人数制限がなされた。世界の国や地域では、ロックアウト、つまり都市封鎖がなされた。外出禁止である。たくさんの人たちが失業し、企業が倒産した。

だが、これで安心というわけではない。未知のウイルスや感染症の世界的同時流行は、またまた突然襲ってくることが予想される。こうなると、人類は今後、同じような選択を迫られる可能性が極めて高い状態が繰り返されることを覚悟しなくてはならない。そしてまたまた、経済活動を縮小し一時的停止することになる。これは、利潤を求めてあくなき経済活動をしてきた資本主義という経済システムを、この原則を否定する方法を採用しなくてはならないことになる。でも、この選択は、「より良い選択」としてはなされていない。「より悪くない選択」しかない。

徹底した感染の抑止と、今までのような自由な経済活動は両立しない。だから、今後またまた起こりうるパンデミックでは、この選択の繰り返しは、今までの社会経済体制の大きな変革ということを意味しているものになり得ることを意味している。こうするしか、他には策がないのだ。

そして、さらに「でも」と問いを発しなくはならない。やはり、命を優先して経済を犠牲にするのは、今の経済の仕組みでは不幸をもたらすだけである。だから、両方を取らなくてはならないのだ。これは、間違いない。でも、それができ得るのは、現在とは異なる経済体制であろう。そうするしか両立できないのだから・・・。

まず考えられることは、暫定的な政策としては、国民に一定の金額を支給することが考えられる。実際に、そうなされた。また、企業に操業短縮補償をし、特に飲食業には他業種に比べて手厚い保護がなされた。

しかし、これで良いことはない。明らかに足りないのだ。このコロナ禍のように何年にもわたって流行して、感染が収束しないのだから・・・こうなると、支給の範囲、そして金額の増加、さらに長期の給付が必要となるが・・・。

今後新たに発生する未知のウイルスや感染症に対しては、どうすべきなのか。この政策の先に見えてくるのは、「ベーシックインカム」である。これは、すべての人に、無条件に定期的に現金の支給をしていくことである。しかし、これは実現が可能なのか。財源は、どうなるのか。現状では、国債の発行しかない。国家財政は、破綻しないのか。

破綻しないとの説—MMT 理論—政府はいくら借金しても大丈夫という理論

この説は、私たちが貨幣で税金を納めていることに基づく。税金を徴収されることで、そして行政の予算執行として貨幣が支払われることで、貨幣は流通することになる。

この紙切れに価値があると信用して。これは、納税しないと、不正に補助金を受給すると罰せられるという強制力を持っているからである。だから、税を支払う。税を国民の義務として。この意識が持続されていれば、国家財政は破綻しないと、MMT 理論では言う。政府は必要な時、いくらでも貨幣を発行すればよいことになると。国民が政府を信頼していれば、・・・。そして、現在の資本主義経済が順調に発展しておれば・・・。しかし、このようなことは、持続可能なことなのか。政府は、いくらでも支出を増やし続けていっても、大丈夫なのか。そんなことはない。このことを、心から信じている人はいないであろう。この MMT 理論を述べている人たちも、・・・。

＊実際の市場経済では、国家予算よりはるかに多い貨幣が流通している。税と国家予算の執行による信用の創造という意味だけでは説明できないのだ。歴史的には、この政策のために経済が度々破綻してきた歴史がある。第一次世界大戦後のドイツ、第二次世界大戦後の日本、戦時国債は紙切れとなった。このことを忘れてはならない。

青野

「命か、経済か」という選択ではなくして両方を取ろうとすると、・・・。はっきりしていることは、今の資本制経済体制では不可能なのだ。これは、はっきりしている。MMT 理論に基づく政策ではできないことである。

〈では、どのような社会経済体制にならなくてはならないのであろうか〉

この社会における格差が大きいのは、本来公的なもの、社会的共通資本(コモンズ)であるべきなのが私的に所有されているためである。とりわけ大きな格差として現れているのは、社会的共通資本としての知識の私有化である。

「IT 関連の知識や技術は、基本的には、社会的共通資本と見なすべきものの代表である。しかし、それらは、いわゆる「知的所有権」によって私的に所有され、囲い込まれている。」

この知的所有権は、例えば、英語を使って話すたびに誰かに賃料が入ってくるとするようなものである。このようなことは特定の個人や企業に帰するものとはできないものであるのに。アマゾンやグーグルがインターネット等の仕組みを発明し世に広めたわけではないのに、私的なものとして囲い込んでいる。土地も地主が作り出したものではないのに、自分のものとして他者を排撃している。アマゾンの最高責任者のジェフ・ベゾスの資産は、アメリカの中産階級の年収の 200 万年分あるという。そして新聞社ワシントンポストを買収してオーナーとなっている。

彼らの情報資本は以前のように自然と労働力から利潤を得るのではなくして、ネットの中(アマゾンやグーグルの私有地)をさも社会的共通資本(コモンズ)のように人々に自由に使用させて、そこから利益を得ている。そう、人々の個人情報を収集している。

そしてこのネットに広告等掲示している業者からは使用料を徴収している。ネットで品物を注文すると、物等の販売を掲示している業者から使用料が入る仕組みである。スーパーの支払いまでネットでできている。彼らは巨大な資産を得ている。ここに大きな問題がある。

このような情報空間は、ほんらいは社会的共通資本と見なすべきものなのだ。サイバースペースをコモンズとするべきなのだ。そうしないと、クリック一つで金銭の移動がなされて一部の人たちに富が集まることになる。さらに、ネットの中に蓄積された個人情報は、弾圧・抑圧の手段となりかねない。さらに、アマゾンやグーグルはこの**知的所有権**を守るために、強力な国家権力を必要とし、支えとしている。ここにも、大きな問題がある。

＊デジタルテクノロジーの問題については、補説 2 参照

第四章 「人新世(Anthropocene アントロポセン)の危機に抗するために」

「新型コロナウイルス禍は、人新世のコンテキストにおいてその意味を評価しなくてはならない。それは、人新世に固有の危機の一つであり、人新世の未来に待っているかもしれない破局の予兆である。だから、こう問わなくてはならない。」

「人新世の破局的な危機に抗するかたちで、どのような対策、どのような社会構成を対置したらよいのか、と。」

「破局が、ちょっとした「取引」によっては回避できないことを知った後で、そして抑鬱的な絶望を越えて積極的に、我々は、どのような社会構想を提起し、実現すべきなのか。それは、当然、我々の生活様式の根底からの改変伴うはずのものだが、それは何か。」

＊これについて、大澤氏は一例として斎藤幸平氏の『人新世の「資本論」』で書かれている「脱成長コミュニズム」を挙げているが、私はこの著者である斉藤氏の意見を全面的には賛同していない。斉藤氏はマルクスの未発表の草稿を独自の視点で読み込むことで新しいマルクス像を提示したが、私としては、あそこまでマルクスに固執することはないと思う。なんでも何でもマルクスの言葉から説明することはない。彼も 19 世紀という時代的限界基づいているのだから、そしてヘーゲル思想という特殊な思想に基づく思考なのだから、その他の人たちの知見も、そしてこれまでの歴史を踏まえて思想を提示すべきであろう。青野

「生産手段はもちろんのこと地球そのものさえもコモンズ(共有地)として管理する社会である。しかも、その社会は、「脱成長」、つまり経済成長の呪縛から解放されている。」

＊だからと言って、ソ連のような社会をイメージしてはならない。これには、多様な方法があろう。私的所有の相対化、まあ、プルードンの言う占有であろう。保有権、つまり管理権はあっても、他からの干渉に対する徹底した排除権はない。プルードン

の書物は、新しい社会における所有の形態の模索である。 青野

世界的に見て、現在先進国は世にいう豊かな生活をしている。大量生産・大量消費・情報化という生活をしている。だがこれは、実は、発展途上国からの資源とエネルギー、さらに労働力の収奪に基づくものである。そのために、発展途上国では生態系が破壊されたり、先進国の豊かな生活から出て来るゴミの捨て場となっている。先進国では技術革新のおかげで環境汚染も克服されたとされていても、その実、因果関係を全体としてみれば何にも解決されていない。表面に可視化されている部分だけを見ると、・・・。さも、問題が解決しているかのごとき装いがされているだけなのだ。

経済成長にともなう環境負荷は、当然なこととして増加する。新技術の開発で、解決されるものではない。技術革新で効率化されると、実はその商品は低価格化されてさらに消費が増えていくことが予想される。そして廃棄物が増えることになる。技術革新でそれにできうることと、できないことがある。大気中から二酸化炭素を減らしたり、放射性物質を取り除く装置などできないのだ。これは、単なる夢である。そして技術革新でエネルギーをより効率的に使用することも、その限度がある。100%にすることはできない。どうしてもロスがあり、残りは自然環境へ捨てるしかないのだ。熱効率を 100%にはできないのだ。

資本制経済とは、どこまでも資本の蓄積を求めて競争していかない限り、敗北者となる。この経済体制では、経済成長は必須となる。だから、経済成長の呪縛から解放されている別の社会経済体制を創り出していくしかない。

現在の経済体制の中で法人税の引き上げ、そして社会保障の拡充ができ得るのであれば、・・・とうの昔にできていたであろう。これは、今の体制への甘い夢物語でしかない。だから、来るべき破局を避けるためには、資本主義体制の破棄をしなくてはならない。しかし、人々の資本主義への執着は、強い。未来社会を脱成長・縮小社会とするには、目先の利益にとらわれている人たちにとって魅力に乏しいことになる。

＊街はシャッター街、田舎は耕作放棄地がどんどん増えている。それなのに、相も変わらず自民党を支持している。生活が確実に苦しくなってきているのに、・・・。だからこそ、人々の意識は「今だけ・自分だけ・お金だけ」となっていく。そして、ますます保守化している。 青野

来るべき社会は、貧しい社会?

ここに、大きな誤解がある。資本主義経済体制は人々を経済的に豊かにするものではない。それなのに、・・・。ここに、早くも間違いがある。

・・・貧困・欠乏は、本質的に資本主義に内在しているのだ。資本主義がなければ、貧困もない。・・・資本主義には逆説がある。余れば余るほど足りなくなる、と言うほかない逆説が、である。一方には物の過剰があり、他方には物の不足がある。両者をなら

せば問題は解決しそうに見えるのだが、それができないのが資本主義である。資本主義の根幹でもある価値増殖が前提としている「搾取」、その搾取のために必要な差異が、この「過剰/欠乏」として現れているからだ。

マルクスはこの差異の創出を「資本の原始的蓄積」と呼んだ。これは資本主義経済の始まりの時だけに生じるのではない。これは、歴史的には、繰り返し反復されてきた。

＊この資本主義の各段階ごとのまとめの図式は、柄谷氏の作成したものを参照。主導的「資本」、主要生産物(世界的商品)、国家のあり方、エートス、社会心理、主要芸術等についての記載されている。

しかし、この差異は、先進国においてはリスクを他に転嫁することで、発展途上国へ振り向けることで、この差異・格差が見えにくくなってきている。さらにしかし、このリスクの外部化にも限界がある。階級格差は、今や先進国に逆輸入されようとしている。

資本主義を捨てれば、貧しくなるわけではない。逆に、資本主義の中にいるからこそ、大半の人は貧しいのだ。

＊さて、以上のことに、さらに付け加えてないといけないことがある。脱成長・縮小社会となっても、成長・発展を目指さなくてはならない分野や領域がある。このことについてはこの本では書かれていないので、補説 3 を参照

来るべき社会は、自由のない社会?

また、資本主義社会では、他の体制に比べて自由が確保されていると思っている人たちがいる。確かに、「消極的自由」の確保は、これまでのどの社会システムより、資本主義社会では保証されている。でも、これには、たくさんの??が付く。

消極的自由とは、まわりから自分の行動をコントロールされるようなことがなく、自分のやりたいことを自分で決められているように放任されている状態、のことを言う。

例えば、前近代の江戸時代は職業を選ぶことは基本できず、親の仕事を引き継ぐしかなかった。それが、近代の資本主義社会では、建前としては職業選択の自由が認められている。親の仕事を引き継ぐことをしなくてもよいことになっている。

労働者と資本家は形式的には自由な意思による対等な契約となってはいるが、実質はそうではない。自分の意志で、いつでもその会社で働くことを止めることはできない。日々の生活のことを考えると。でも、別の自分の個性にあった働き場があれば、・・・。これがなしうる場合もあるが。

だから、建前としては、資本主義経済体制は、個人の消極的自由は保障されている。だから前近代と比べて自由度は高いと言える。アメリカは、資本主義経済の本家では、この消極的自由は世界一保障されている。

＊でも、そのために、貧富の格差ははなはだしい。この消極的自由の最大限の保障

がアメリカでは国是となっているために、社会保障は極めて弱い。セーフティーネットは、整っていない。病気になったら、貧乏人は死ぬしかない。医療保険制度が整っていないために、病院に行けば高額の医療費を支払わなくてはならない。青野

＊このように、アメリカの自由度は、ロシアや中国と比べて、そして日本と比べても高い。でも、他からの制約がなく商売を始めても、何かを始めても、それが成功へとつながる人は、万に一人であろう。多くの人にとって、この自由は享受できていない。アメリカの自由は、このような意味になっている。さらに、この自由で、自由競争で成功して金持ちとなった家族は、遺産相続で次の世代も金持ちとなる可能性が高い。この状態が続くと、これはもはや封建社会と似て来る。「消極的な自由」を最大限保障することで、金持ちにとって、資本家たちにとって都合の良いシステムとなっている。この現実を知った上で、アメリカや日本における「自由」の在り方を考えなくてはならない。例えば、この消極的自由度の低いロシアや中国を批判する人たちがいるが、それはおかしいのだ。単純に比べられるものではない。アメリカ発のマスメディアの情報に踊らされているだけである。青野

アメリカの富の格差　2020 年上半期　FRB 連邦準備制度理事会報告
・上位 50 人の金持ちの資産額の合計＝下位半分の 1 億 6500 万人の資産の総額
・上位 1%の金持ちの資産総額＝下位半分の人たちの資産総額のおよそ 16 倍

＊アメリカやカナダの北米大陸白人たちにとって、19 世紀から 20 世紀初頭にかけては、ヨーロッパ(旧世界)のような因習のない、この「消極的自由」が保障されていた。当時の世界のどこにもないような、まあ一つのパラダイスと言ってよいような状況となっていた。貧しくても、西部に行けば自分の土地が得られる。苦しくても頑張って働けば生きていけるという夢を抱くことができた社会であった。まだフロンティアが、あったのだ。ヨーロッパやアジア諸国に対して、新世界の春を謳歌することができていた。当時、北米大陸の児童文学で少女たちを主人公にしたものが書かれている。「若草物語」→「赤毛のアン」→「あしながおじさん」に書かれている社会状況が、この時代の様子を表している。でも、この時代と現代は大きく異なっている。ここに描かれているアメリカ社会と現代社会は、その質が大きく異なっている。別の社会になったことを忘れてはならない。「若草物語」の時代は**南北戦争(1861-1865)の直後、**「赤毛のアン」の時代**は 1880 年～1890 年代前半、**<u>この二つの物語には、独立自営の人たちの作り出したコミュニティが、リースマンの言う「内部指向型」の人物が描かれている</u>**。それが早くも、・・・。**「あしながおじさん」(1912 年)の時代背景は20世紀初頭のアメリカ。貧富の格差がはっきりとしかけた社会である。都会では、財を成した富豪たちのヨーロッパの王侯貴族をも上回る豪華な邸宅ができ、そのまわりには貧困層のスラムが広がり、・・・、アメリカ社会が、確実に階級的に分裂してきた時

代であった。この「あしながおじさん」を「社会主義」へと人を勧誘する書と評する人もいる。でもこの社会主義は、マルクス主義とは異なり自己責任に価値を置くアメリカ型社会主義思想である。この本では「消極的自由」が最大限に認められていたアメリカ社会の問題が、記述されている。主人公は親や知人のいない孤児院で成長した少女である。この孤児院に資金援助している大富豪が少女の作文力を評価して、大学へと進学する費用を出してくれることになった。月に一度この富豪(あしながおじさん)に手紙を書くことを条件として、・・・。この手紙の中に、アメリカ社会が変わってきている現実が述べられている。国家行政による所得の再分配を、貧民対策が必要であることを、社会問題の解決が必要なことが、書かれている。青野

＊脱成長社会の実現には、このような自分のしたいことを自由に行えるという余地は狭くなるであろう。社会全体のことを今より深く考えて行動をしなくてはならない。物質的な経済成長をさせないのだから、分野・領域によっては今より縮小しなくてはならないことになる。そうなると、この消極的な自由には制限をくわえなくてはならないことになる。このことについては、思考に値するものである。 青野

＊「積極的自由」と「消極的自由」についての説明は、補説 4 を参照。

未来の他者との応答について、積極的自由の発揮

「目の前の他者の呼びかけに応えることすら、難しい。まして、未だ存在しない未来の他者の呼びかけを受け取り、それに応えることなどできるのだろうか。」

未来の他者とは、このままではやがて破局が到来することで苦しむ人たちのことである。今の自分を犠牲にして、未来社会のために脱成長社会を建設していくなんて、自分の自由な活動を縮小していくなんて、このようなことに人々は振り向くのであろうか。

＊本当に、この通りのことを思う。私の周囲でも、会話が成立しないことが多々ある。この縮小社会研究会に関わった人でさえ、会話が難しくなっている。自分の興味・関心と利害のことだけ主張する人、自分の主張ばかりして、それに対する意見を私が述べると、「そのようなことは聞きたくない。もう、帰れ。」と言われる。また、現実具体の日々の労働を体験することなく理論だけの人もいる。厳しい現実に遭遇すると、ノスタルジーへと逃げ込んだり、理想社会という夢にすがりつく人たちがいる。会話を通して、相互の意見の交換を通して、なんていうことは夢物語のようである。研究会で発表された文章を印刷して持っていくと、「もう持ってくるな。読まないのだから。」と、抗議の電話がかかる。自分が固く信じている事に共鳴している人とは付き合い、それ以外の人との関係を断とうとしている。自分の信じていること以外の知識を受け付けないのだ。研究会に一緒に参加したのに、・・・。これは、私たちが年を取ってきたということ、そして思考力が無くなってきているということ、自分の生活で金銭的に窮屈になり、他への妬み根性が露骨に出てきているためである。田舎

では、いや都会でもそうかもしれないが、・・・特に、公務員への妬みとひがみ意識はすさまじい。このような意識が、大阪では「維新の会」へと票が流れたようである。以前革新政党への支持を強烈に示していた人が、もはや差別排外主義者となっている。このような時、物事を根底から再度思考することは大切であろう。私たちは何を問題として、どうあるべきであると考えているのか。その実現に向けての道筋はどのようにしたらよいのであろうか。基本から、考え直さないといけない。 青野

＊このような現状について、さらに深く認識するために『家族と社会が壊れるとき一不平等な社会をどう生きるか?』是枝裕和、ケン・ローチ(NHK 出版新書)を紹介したい。貧困や差別に苦しむ家族や人々といった、社会の見過ごされがちな側面を一貫して撮り続けてきた二人の映画監督の対談と書下ろしの文章が掲載されている。彼らの目に、不寛容・不平等の増す世界はどのように見えているのか。コロナ禍で拍車がかかる分断と格差をいかに乗り超えるべきか。搾取する側・される側という、単純な二項対立に終わらない複雑な現実の姿を、深い洞察と想像力によって浮かび上がらせている。 青野

「他者の呼びかけや要求に応ずることが、常に自由の制限を意味するわけではない。逆に、他者の呼びかけを通じて自由が構成されることさえある。」

しかし、このような効果があるのは、その人の前に他者が姿を現しているからである場合が多い。見えていない他者には、私たちの反応は弱いのではなかろうか。

先進国では、搾取や収奪を発展途上国に外部化してしまい、そのために苦しんでいる人たちのことは見えなくなってきている。良心的に苦しむことなく、自分たちを誇らしく語ったりしている。

そして、未来の他者は、現在の発展途上国の人たち以上に遠い。時間的に外部である。でも、過去の他者には、私たちはしばしば心がとらわれている。死者の呼びかけや期待に応じようとしてきた事例がよくある。死者を裏切ることは、生きている者を裏切るより難しい。

では、未来の他者の呼びかけに応じることはできるのか。未来の他者とは、このままではやがて、地球規模で確実に到来するであろう破局に苦しむ人たちのことである。*「いかにして終末の破局を直視し、かつ前向きにこれに対抗することができるのかという問いと、未来の他者といかにして出会うことができるのかという問いは、まったく同じものになる。」*

さて、未来の人たちへの応答をすることは、地球規模で確実に到来するであろう破局に苦しむ人たちに対する配慮ある行動をすること、脱成長社会の建設をしていくことは、自由の喪失であろうか。いやいや、そうではないのだ。未来の他者の呼びかけに応じることは、自由の喪失ではないのだ。これを一つの自由の実現として、「積極的な自由」の実現として考えることができるのではなかろうか。「積極的な自由」とは、あ

るものより別のもの（別のこと）により高い価値があるのだ、ということを理解し、その価値を実現するために自律的に行動することである。

青野の意見

より価値のある事、未来の他者のことを考えて行動していくことには、大きな意味があることなのだ。未来は、私たちにとって可能なことは、未来を積極的な自由の行使の場としていくことである。これしかない。私たちは、未来の破局を防ぐために、より倫理性をたかめなくてはならない。そうだ、私たちは、ここで決断して跳ばなくてはならない。でも、・・・、このようなことはなかなか実現しない。

〈例えば、カントの思考のように!〉

このような事を思考する時、カントの思想に、特に『永遠平和のために』と『世界市民という視点から見た普遍史の理念』に学ぶところが多い。この著作は、短い。でも、その意味するところは、何回も読まないとくみ取れない。是非、ご一読を! 絶望に陥らないために、!!

カントは、具体内容のある条件付きの道徳よりも、無条件の義務としての、人間として当然なこととして迫って来る格率(形式)を述べている。そして、正義は公的に主張するものであるから、法に対する尊敬を優先するようになると述べている。法それ自体が自らに従わせようとする普遍化作用、公的に認められるものでなくてはならないという存在理由を持っているから、政治を制約させる力が生まれて来るとした。

人間の本質を善として平和を求めても、善としての積極的な自由の発揮を求めても、そのような理想論は心地よく聞こえるが、それは無力であろう。今までの歴史が、それを示している。カントは人間には根源悪があるので道徳の内容ではなくして形式(格率)を、法それ自体の存在理由(法の形式的原理、法への尊重)で諸国家行政を法の下に立脚さそうと考えた。時間をかけて、・・・。国際社会では、各国は争いながらも、自分の有利なようにするためには、建前上は法に敬意を払っているがごとき態度を示さなくてはならないと。ここに、未来社会へ、国際平和への希望を見出している。

＊補説 5 参照

私の暫定的なまとめ一今を消費しただけではダメである!

ここで、再度「前書き」に提示した問題に戻る。＊以下は、青野の意見

データーと科学的推論から来るべき破局に対処するよう多くの人々に求めても、これまでの生き方の変更を迫っても、悲しいかな、「積極的自由」を発揮しようとはなかなかならないことが予測される。将来を見越して当然だとすることがなされないのは、世の常である。では、どのようにして・・・。私たちには何ができるのか。

社会的共通資本(コモンズ)が拡充されていくには、悲しいかな、コロナ禍のようなパンデミックが繰り返され、それ以上の破局危機に遭遇しないと、・・・。その反復を通して、少しずつ・・・。であろう。そして、ある時どうにもならなくなって、最低の選択として、遅すぎた決断として、一気に社会が変わらざるを得ないことになる可能性が高い。

だけども、現実のこの事態をきちんと見れば、そして未来へと視線を伸ばすと、実は私たちには、破局までにはそんなに時間は残されていないことが分かる。

温暖化の暴走が始まると、恐ろしいのは深海のメタンハイドレートが空気中にてくることだ。シベリアの永久凍土の中、深海の低温・高圧の中で氷状態になっているのが溶け出して来ると、これはもう、2 億 500 万年前の生物の大絶滅のようになってしまいかねない。メタンは酸素と触れ合うと二酸化炭素と水になり、またまた地球の温暖化、そして酸素濃度の低下となる。私たちは生きていくことができなくなる。

だから、私たちは、より深く苦闘して思考しなくてはならない。遅すぎた決断では、最悪の破局を食い止めることはできないことになる。・・・。問いは、最初に戻ることになる。

それと、実は、資本主義経済体制自体が、自己崩壊していく傾向を有している。自己崩壊と言っても、手をこまねていてはならない。私たちが何にもしなくてじっと待っておればよいということではない。自己崩壊の傾向があるというのであって、私たち自身が主体的に取り組まなくてはならないことは間違いのないことである。ここで大切なことは、既成の体制の崩壊は、今までの歴史では、その崩壊の主原因はそれまでのシステムの内部にあったということだ。

だから、この崩壊をさらにはっきりと推し進めるという「積極的自由」を、私たちはしなくてはならない、ということであろう。より良い**価値を実現するために自律的に行動することが、私たちには求められている。**

＊資本主義の自己崩壊の傾向性についての説明は、本書を読まれることを望みます。

さて、今まで述べてきたような思考過程は、どのような意味があるのか。これについては、大澤氏が前書きに書いている。再度引用したい。

*現実主義的で不徹底な改革の繰り返しが、結果として最終的に・・・正しい、**徹底した変革になるためには、真の理想が「満たされなかった願望」として残っていなくてはならない。満たされなかった願望を何とか実現しようとする反復として、個々の改革はなされていくからである。挫折した願望が、幽霊のように未来の改革者たちに取りつき、彼らの現実主義的な改革の反復を理想主義的な変革へと漸近させていくのだ。***

深く思考していくことは、積極的自由の実現のために、大いに価値のあることなのだ。そう、幽霊となって多くの人々の肩に憑依することなのだ。たくさんの多様な幽霊を創

り出すことが、今の私たちの役目であろう。そのためには、多くの人との会話・おしゃべりが、そしてメールを通した意見の交換が必要であろう。しかし、その会話がそれなりのまとまった形、思想として提示されないと、人々の肩に憑依することは難しい。後の世に伝わるには、メール交換では弱い。メール交換では、個々人の思考の活性化に役立っても、それは今を消費しているだけになりかねない。夢や理想を食べていることになりかねない。ここが大切なところである。今のままでは、未来の改革者たちに取りつく力は、はなはだ弱いことになる。私たちは、今何をなすべきなのか。このことについて考えなくてはならない。

このような漸進的な歩みが、来るべきコミュニズム、人新世のコミュニズムであろう。ただこの漸進的な歩みの時、「消極的自由」はやはり大切にされなくてはならない。でも、制限しなくてはならない自由もある。またこれを抑圧して「積極的自由」を強要しないように注意しなくてはならない。しかし、強制しなくてはならない場合もあろう。ここが、難しいところであろう。先に述べたアメリカを例として説明したような自由は、当然のこととして抑圧しなくてはならない。このことについての説明は、補説 3 に述べている。

だから、市場での貨幣による商品交換を、廃絶してはならない。この交換関係で作り出される関係性は、従来の呪術的とも言いえる贈与交換関係の毒を中和させる働きがあるからだ。新しい積極的な自由は、ノスタルジーとしての昔の相互扶助の復活ではなくして、個々人の消極的な自由を発揮して行うことが社会的経済的な格差をもたらすものではない関係性が形作られてくる社会において、よりよい効果をもたらすであろう。

そこでは、「自由」は対他関係を基にした相互的複合的な自由へと変わらなくてはならないであろう。この「複合的な自由」の中身については、まだまだ具体的には語れない。ここまでが、限界である。これ以上具体的には語れない。

この複合的相互的な自由へと思考を伸ばしたのが、プルードンである。このことについても、補説 3 を参照。

＊私なりの意見として、未来社会を展望するときの留意事項を補説 6 として記載。

補説 1　　反穀物の人類史　国家誕生のディープヒストリー

通常、人類の定住と穀物栽培の開始が国家の誕生を促したと考えられている。この本は、これまでの定説を否定する。この定説は、マルクス主義に基づく歴史書によって繰り返し語られてきた。しかし、この説は、少し考えればおかしいのだ。このことを、メソポタミアの歴史を通して丁寧に語られている。

たとえば、最初に発見された作物栽培と定住コミュニティの遺跡はおよそ紀元前１２０００年前のものであったが、メソポタミアのティグリス川とユーフラテス川の流域に見いだされた最古の国家の遺跡は、紀元前 3300 年ごろのものだ。

作物栽培が始まってから、国家ができるまでにこれほどまでの時間がかかっている。それは、なぜか。

メソポタミア地域では旧石器時代の定住の考古学的証拠が次々と見つかっており、「農耕の開始によって定住が始まり、文明が生まれ国家が誕生した」という従来の歴史観はかんぜんにくつがえった。イラクというと私たちは砂漠を思い浮かべるが、先史時代、この一帯はティグリス川とユーフラテス川がつくりだすデルタで、広大な湿地が広がっていた。海岸線は現在よりずっと川上にあった。このようなデルタでは、そもそも農耕を始める理由がなかった。灌漑などしなくても、毎年の洪水によって土壌が入れ替わるのだから、放っておいても植物は生えてきた。定住が始まったのは農耕のためではなく、移動しなければならない理由がなかったからだ。古代メソポタミアの南部では、ほぼ農業なしに定住する人びとがあちこちに見られ、住民数が 5000 人に達する「町」まであった。その当時から狩猟採集民は、篩（ふるい）、石臼、すり鉢とすりこぎなど、野生の穀物や豆類を加工するためのあらゆる収穫具を作り出していた。三内丸山遺跡などで縄文人の定住が広く知られている日本では当たり前だと思うかもしれないが、西欧ではこれは「大発見」だった。従来の古代史は、現在の地形に引きずられていた。ちょっと考えればこれはおかしいとわかる。巨大なデルタがゆたかな自然を育んでいたからこそ、人々が集まってきたのだ。

紀元前 1 万 2000 年頃には、メソポタミア全域で定住の断片的な証拠が見つかっている。作物化植物と家畜の断片的な証拠がぽつぽつと発見されたのは紀元前 9000 年、コムギなど主要な基礎作物の栽培が確認されるのは紀元前 8000 年だから、3000～4000 年ものあいだ私たちが現在いうところの集団的な営みとしての農業を営まずに定住が続いたことになる。

さらに述べれば、そもそも、人類は定住しても本格的な農耕には向かわなかった。それが重労働であったからだけではない。さまざまな疫病、寄生虫など多くの障害をもたらしたからだ。実際、最初期の国家の大半は、疫病や黒死病のような流行病によって崩壊した。この崩壊の繰り返しであった。

それに、人々が定住しても狩猟採集を続けたのは、そもそもそれが可能な場所を選んで定住したからだ。だから、定住農耕生活はなかなか定着しなかったし、その必要もなかった。また、狩猟採集をしているかぎり、人口が増えすぎることはなく、トラブルが生じても、すぐに移動できた。だから、定住そのものは、農業の発展も国家の形成ももたらさなかった。

古代社会で国家の形成を可能にしたのは、人々の奴隷化ではなかろうか。しかし、この奴隷という言葉の意味は、従来とは異なる。著者のスコットの述べる奴隷とは、このような戦争捕虜・奴隷という意味より幅広い意味である。

公的な奴隷制がもっとも発達したのはギリシアと初期ローマで、どちらも、奴隷制国家であった。これは南北戦争前の南部アメリカ合衆国にも当てはまる。一方、メソポタ

ミアやエジプト、そして中国等に成立した今まで「アジア的専制国家」と言われてきた地では、「奴隷」はギリシャなどとは異なった意味であった。

国家なるものが形成されるには、他の集団からの脅威を感じなくてはならない。他民族、他の生活様式を営んでいる人たちを支配し統治するために、国家組織は作られる。また、他からの支配に対抗して、その武力に対して防衛のため国家機構ができたのであって、国家なるものはその地での農業生産力の向上で余剰生産物ができ、そして身分秩序、統治機構が形づけられたものではない。内部的に自生的に形成されるものではない。他との対抗関係で、国家は他の政治集団に対抗して形成されるのだ。ここを、間違えてはならない。定住と穀物栽培の開始が国家を形成した主要因とする説は、現在も多くの人たちが抱いている理論である。マルクス主義者でない人たちまで、・・・。

当時の政治的軍事的権力は、侵略した地の民を奴隷としたり、防衛という目的のために支配下の人々に強制力を行使して奴隷化した。しかし、この奴隷とギリシャの奴隷とは異なる。歴史上では、まず都市国家間の戦争の結果として捕虜が生じたが、彼らはギリシャやローマ的な奴隷にはならず、臣民として受け入れられたのである。また、征服されたコミュニティ全体が強制的に移動されたりもしたが、彼らも臣民となった。のみならず、これらの古代の国家では、国家機構の要にある官僚たちも、宦官（かんがん）や奴隷（臣民化した被征服民）であった。その意味で、国家は人民の隷従化、すなわち「臣民」化の形成によって生じたといってよい。そしてこのような臣民に農業労働が強要されたのだ。穀物栽培が大規模化したのは、国家が生まれて灌漑がなされてからだ。国家こそが「農業革命」をもたらしたというべきである。そして、多量の余剰生産物が生産されるようになった。この余剰物が生まれることで、階層的身分的国家秩序が固まったのだ。国家は他の国家に対して、国家足りうるのだ。国家内部の経済的なことから自生的に成立してくるものではない。

James C.Scott　1936 年生まれ。イエール大教授。

地主や国家の権力に対する農民の日常的抵抗論を研究。著書に『実践　日々のアナキズム　世界に抗う土着の秩序の作り方』『ゾミア　脱国家の世界史』など。

補説　デジタルテクノロジーの問題

21 世紀は、コンピューターが管理するこの仮想空間の中に記録され蓄積されている。それまでの「主体的に判断する私」を超えて、第三者にみられる私の行為、あらゆる行動が、この仮想空間に蓄積されている。

電話の通信記録、クレジットカード、街中の監視カメラ等を通して、この仮想空間に記録されている。だから、この空間の管理者がある意図でこの蓄積されたものを集めれば、「私」個人についての詳細な情報がすくさま出て来る。でもこれは、蓄積された

行動・身体の集まりであって、私個人がどのように考えているかということとは別物である。

しかし、このシステムでは、身体と観察された行動が、私であるとされていることを意味している。そこには、主体的に思考して行動する私、私のしたことに責任をもとうとする私は、コンピューターに蓄積された「私」によって抑圧されてしまうことになりかねない危険性がある。これまでは、意識する「私」が大切なことであるとされてきた。それが、まさしく大きく逆転してきている。ここにおいては、「私」の拒否という行動は、何の意味もない。見えざる機械が私たちを、認定している。同一なものとして特定し認証している。

そしてさらに問題は、このシステムの管理者たちも、実は、このシステムから出ることはできないのだ。テクノロジーを操る特定の個人も、逃れられない。

このようなデジタルの眼は、私の意識や意思を置き去りにして、身体と観察された行動と関係して、・・・。この傾向は、さらに強化されようとしている。ここに大きな問題がある。

補説 3　　歓喜と欲望、「変化と移動」の大切さ

—フランス社会主義、プルードン思想の復活!—

●さて、この時大切な事を、見逃してはならない。社会経済の成長が鈍化した後も、縮小しても、**人には歓喜と欲望が満たされ得る可能性が必要**である、ということである。このことを忘れて縮小社会の倫理の押し付けをしてはならない。「足るを知る」なんて言う倫理的な思想を強要してはならない。欲望を禁圧してはならない。社会は、「成長、そして変化と移動」がなされることで健全になるのだ。この視点を、忘れてはならない。そして、生きて行くには歓びが、この期待が持ち得るという状態の社会でなくてはならない。だから、**歓喜と欲望は、必要より根源的であるとも言い得る。これを感じ取ることができないのであれば、生きていることの意味を失うことになりかねない**。だから、必要という下限が満たされていて、この上の歓喜と欲望へと開かれていないといけない。

さて、縮小社会でさらに成長・変化することが健康的であるのは、非物質的な様相を変えていくことであろう。この在り方を変更していくことが大切な事となる。歓びとしての情報の発信と交換は可能性としてありうるのだから、この方向へと、欲望と感受性を転回していくことしかない。考えられることは、このような文化活動の意味を高めていくことが大切であろうと思われる。このようなことをするアソシアシオンを創り出していくことであろう。そこでは、先に記述したようなこれまでのモノづくりの「自負心」ではないかもしれない。その在り方が、その質が変わっていることであろう。だから、未来に対して諦めの意識を抱くこともないようだ。

これまでの近代の思考を引き続いてしている人たちにとって、成長の停滞した世界

は魅力の少ないものと感覚されるであろう。けれども、この時代の転換期を乗り越えた人々にとっては、*「アートと文学と思想と科学の限りなく自由な創造と、友情と愛と子供たちとの交歓と自然との交感の限りなく豊饒な感動とを追求し、展開し、享受しつづける」*かもしれない。そして、さらに楽しむことのできるものとして*「社会的な生きがいとしての仕事、共存の環としての仕事」となるであろうと、見田氏は示している。* ＊見田宗介『現代社会はどこに向かうのか』(岩波新書)

「・・・人間にとって究極の幸福が、金を稼いだり権力を持ったりすることではなく、文化や自然を楽しみ、友情や愛情を深める、それこそが本来求めている価値だからです。貧しい社会ではそれは不可能です。豊かにならないとできない。しかし、豊かになった人がそうした価値を求めるのは、きわめて自然なことだと思います。」 ＊『二千年紀の社会と思想』見田宗介　大澤真幸　太田出版

物質的に限りなく豊かになる必要はない。生存しえる物質が保障されならば、無理して物的な経済成長をしなくてもよいのだ。富が社会内にそれなりに行き渡れば、今迄とは違った物・人・情報の交換関係が成立できることになる。

でも、このような文化・芸術・そして人的な交わりを大切にする活動を重視するには、社会保障のシステムが整っていないことには、・・・。生存しえる物質が生産されそれが人々まで届かないといけない。これが生産されない、保障されない縮小社会は、富の奪い合いをして、先に記載した産業革命期のような悲惨な社会状態となってしまう。そして、人々はまたサン・シモンのような思想を追い求めことになりかねない。化石燃料の枯渇という条件でこのようなことを繰り返せば、それは人類の生存に直結する大問題を発生させることになる。

それともう一つ、縮小社会で大切な事は、社会的移動の容易な社会にならなくてはならないであろう。社会が健全であるには、住居の移動と社会的階層の移動が、そして適正な競争が無くてはならない。また、男女間の結びつきと離脱も、そして子育てがもっと容易なものとならなくてはならない。つまりは、多様な家庭の在り方が、社会的に承認されていなくてはならない。社会は、「変化・移動」がなされることで健全になるのだ。このようなことを通して歓喜と欲望が満たされ得る可能性が開かれていなくてはならない。そして、繰り返すが、そのためにも、社会保障のシステムが整っていなくてはならない。

●また、物づくりのアソシアシオンを否定してはならない。ここにも、当然、歓喜と欲望は存在する。品物も、物づくり技術も、化石燃料の大量消費をしなくても変化し改良されていく。より一層磨きのかかった工夫されたものが作られていくであろうことは、間違いない。

〈縮小社会研究会代表　松久寛　談〉

技術革新への期待は技術者にも強いです。それは、期待というよりは、困ったことの先送りという処世術でもあります。農業の大規模経営は機械、農薬、化学肥料を

使用したものであり、その原料は鉄や石油です。これらは地下深くにあったものを地上に持ち出し、結局 CO2、プラスチック、鉄くずなどの廃棄物を空気、海、土に捨てます。廃棄物を地下深くに埋めるには、膨大なエネルギーが必要であり、それはまた新たな廃棄物になります。環境（空気、海、土）は、これまでは無限の存在のように思われていました。現在は廃棄物の量が大きくなり、それによる環境の変化が人間にとって都合が悪いほど大きくなりました。もともと、技術によって環境をよくすることは不可能だったのです。地下の石油を燃やし出た CO2 を再度石油にして地下に埋めることはできません。現在の技術とは、化石燃料のエネルギーを使って物を大量かつ高速に製造することです。化石燃料を使わないと江戸時代の生活になります。江戸時代も化石燃料を使わないという条件での技術は発展していたのです。

だから、未来の縮小社会では、品物は大工場ばかりで生産されるのではなく、小さなアトリエで職人たちの手で作り出していなくてはならないであろう。そしてさらに、大工場の生産現場は、労働者たちの自主管理で運営されているシステムとなっていなくてはならない。利潤をひたすら求める経営は、もう成り立たなくなっているのだから、・・・。たくさんのエネルギーを使用した大工場・大企業、大店舗では採算が合わなくなっている。そして、自営農民と自営の商人たち、そして自営の小さな仕事場(工場、アトリエ)が成り立ちうる社会となっていなくてはならない。そう、前半に述べた「フランス社会主義」の歴史が示してきたように、・・・。プルードンが述べているように!!

補説　4　「積極的自由」と「消極的自由」について

消極的自由は「～からの自由（liberty from）」、積極的自由は「**～への自由**（liberty to）」とも呼ばれる。さらに説明すると、**消極的自由（Negative liberty）とは、個人の行動・選択の自由が他人によって干渉されないこと。積極的自由（Positive liberty）とは、ものごとの価値の優劣を知り、より高い価値の実現のために自律的に行動することである。**

この消極的自由、積極的自由は、アイザイア・バーリン（Isaiah Berlin）によって提唱された概念である。これは、それまでの政治学を中心とした分野で当たり前のように使われてきた「自由」という概念について、2 つに区別して使うべきことを主張したものである。

これまでの思想たち、ロックやルソー、そしてミルにしても、また、フラカス革命にしても、自由を実現するために社会を変革しようとした運動であったとみなすこともできる。こうして近代社会でまず追求されたのは、**「消極的自由」であった**。

しかし、社会の近代化・資本主義化が社会の隅々まで浸透するにつれて自由であるがゆえの問題が生まれるようになった。たとえば、個人による財産、生産手段などの私的所有が認められた結果、経済活動が自由になり「市場での

貨幣による商品取引」が圧倒的な主導経済体になると、その結果支配する資本家と劣悪な環境で働かされる労働者という階級格差が広がることになった。つまり、単なる「自由放任」では、かえって誰かの自由が疎外されてしまう、という問題点が生じている。そこで、「自由」という概念について区別する考え方が登場した。

さて、積極的自由に価値があり、消極的な自由は価値が低いとみなしてはならない。「言論の自由を守るために、あなたも革命運動に参加しなくてはならない。」「このデモに参加しなければならない」と言われたらどうでしょうか。これは、押し付けがましい「積極的自由」であり、自由の実現のためにあなたの**行動、選択が規制される**ことになる。リベラリズムの態度を「持たなければならない」と強制されること（積極的自由）は、かえって個人の自由の障害になることを忘れてはならない。

そのため、バーリンは消極的自由は守られるべきで、そしてさらにその押し広げてよりよい社会を創り出す自由という権利を、既存の国家は認めるべきであると考えた。

ただ、自由をこの二つの分類で考えることは、よくない。人間社会の自由とは、そんなに簡単に事が済むものではないであろう。具体的出来事を通して、多数の人たちとの関係性を通して形づけられていくものだから。

＊**アイザイア・バーリン**（Isaiah Berlin）1909 年にラトビアで生まれたバーリンはイギリスに移住して大戦中は外務省に勤務した。戦後に大学で政治学を教授し、本書『自由論』では自由という政治理念を論じ、政治的自由に関する議論を呼ぶことになった。特に本書に含まれる 1958 年に作成された第 3 論文『二つの自由概念』は自由を消極的自由と積極的自由に分類し、その政治的意義について論じた論文として自由を巡る議論にしばしば引用されている。＊ウィキペディアより

理念等によって人々を積極的自由の発揮へと強要することなく、自然な形で社会改革がなされていくような社会システムを整備していくという視線が必要となる。このことについてはプルードンのアイディアが、交換関係の整備が有効となろう。交換に基づく多様性と効率性に依拠しつつ「相互」的関係性の構築をしていくことを目指さなくてはならない。

「理性をもった被造物のあいだで社会が存続するためには、自由の相互関連、自由意思による相互作用、相互参加がなければならない。このことは、もう一つ別の原理、すなわち権利の相互主義的原理の助けなしでは生じえない。正義はその本性からも、その形式においても、交換的である。・・・社会は諸個人相互の活動と共同のエネルギーから生まれる。言い換えれば社会はその表現であり、その総合なのである。この有機体のおかげで、もともとは同じように貧しい諸個人が、自分の才覚や器用さや働きを通じて、専門家になり、自分自身の活動と自由をかつてないほど発展させ、増大

させていく。・・・自由のみに頼ってすべてを行おうとすれば、自由は縮小する。これに反して自由を折り合わせることによって、自由は倍加するということである。」

『革命と教会における正義』1858 年

「他人の自由の中に自由の制約を見出すのではなく、その補完物を見出すのであり、最も自由な人間とは、同胞と最も緊密な関係を保っている人間なのである。」

『革命家の告白』1849 年

革命的であろうとする分だけ狭量になっていく人間をプルードンは嫌った。人は互いに異質であるからこそ、その結びつきは内容を豊かにするはずだと考えた。

補説 5 絶望に陥らないために、 カント的思考

格率(行為を決定する個人の行動原則)には、善いことも悪いことも含まれる。誰もが善いと感じる行動原則のであれば、それは間違いのない道徳となる。カントはこれを述べている。普遍化可能な格率は、それが法則として成り立ち、それは全員がその法則に従うという形で秩序が形成されると考えられるような行為規則である。誰に当てはめても、建前としては、これを否定できないものである。この**形式**のもたらす働きに、カントは有効性を認めている。以下にいくつかの抜き書きを提示したい。

「法の概念を政治と結びつけることがどうしても必要であり、法の概念を政治を制約する条件にまで高める必要があることを、・・・。」

「人は法の概念をあっさりと放棄してしまうことはできず、法の概念に尊敬の念を抱いているのであり、このことが人間には法に従う能力があるという理論を、力強く承認しているのである。」

「道徳とは、無条件に従うべき命令を示した諸法則の総体であり、すでにそれだけで客観的な意味における実践であり、人間はこれらの諸法則にしたがって行動すべきなのである。」

「理性の内容的な原理から出発するか、形式的な原理から出発するかをまず決定しておく必要がある。理性の内容的な原理は、意志の任意の対象としての目的を重視するものであり、理性の形式的な原理は、目的の持つ内容そのものは問わずに、外的な関係における自由だけに依拠して、・・・。」

「実践哲学においては、この形式的な原理を優先する必要があるのは疑いえないところである。この形式的な原理は法原理として、無条件的な必然性を備えているからである。これと比較すると、内容的な原理が強制力を持つのは、設定された目的の経験的な制約の下で、その目的を実現しうることが前提となっている場合だけなのである。」

「国家における国民と国家間の関係に関して経験によって与えられているさまざまな関係から、法学者が普通想定するような公法のすべての内容を捨象してみよう。すると残るのは公開性という形式である。いかなる法的な要求でも、公開しうるという可能性を含んでいる。公開性なしにはいかなる正義もあり得ないし、・・・。」

＊『永遠平和のために』（中山元訳　光文社）

6　**〈未来社会を展望するときの留意事項、今はここまでしか言えない〉**

一見すると、現在の社会とあまり違わないように思えるかもしれないが、そうではない。社会の基本的枠組みは、大きく異なっている。その時、以下のことへの配慮は大切なことであろう。

① 人々が高い問題意識をもたなくても、人間の意識がすっかりと変わらなくても、人々が高い道徳性を持たなくても、できうる内容と方策を思考しなくてはならない。今までの歴史の中にある思考の種、「導きの糸」を見つけなくてはならない。また、未来構想を展望している人を絶望へと導かないものを、思考の軸を見出さなくてはならない。

② この理想へと向かう手段が最適化されるところに、目的を設定しなくてはならない。このことについては先に述べたので、繰り返さない。相も変わらず、夢の世界に浸りたい人が多い。

③ 縮小社会では、「軸の時代Ⅱ」では、社会が徹底した地方分権になっていなくてはならないが、国家そのものを否定してはならない。確かに、強権的な国家ではいけない。しかし、国家は必要なのだ。世界には、様々な自然条件や歴史を有している地域・国家がある。均一ではないのだ。このことを、忘れてはいけない。この違いを含みつつ、世界平和を実現して社会のシステムを変更していくには、どうしても国家はいるのだ。国家があるからこそ、その様々な諸国家を公的な法の下に束ねていく事ができるのだ。周囲の人や地域との露骨な敵対関係になることが防げているのだ。そもそも、他国の統治に組み込まれたくなければ、自ら国家を形成するしかない。それをする意思がなければ、他国に組み込まれるだけである。どちらにしても、国家からは逃れられない。

プルードンはアナーキストの元祖と言われているが、これは間違っている。確かに彼はアナルシーを説いた。しかし、アナルシーと無政府主義とは異なる。日本語に翻訳が、間違っている。彼は徹底した地方分権を説いたのだ。1789 年のフランス革命後は、それまでの分権的なフランス社会を全否定して徹底した中央集権となった。パリが、すべてのフランスを代表することになった。この 19 世紀のフランスの在り方を批判してアナルシーと述べたのだ。

人間的に道徳的に悪い人ほど、自分の利益と保身を優先する。他の人たちが法に従い、自分は法の支配から免れることが良いことになる。まさしく、「安倍」政権のように、法に従わず国家予算を流用しても追及されないことが良いとする。しかし、このようなことは、長くは続かない。人々は心の底では互いに対立していても、自分一人が得をしようと思っても、建前としては法に従うという建前を捨てることはできない。だから、社会秩序や国家の形成に、人々が道徳的に優れた状

態になる必要はない。利己心と自己保存の要求があれば、とりあえず平穏な社会と、この状態を保障する国家は形成される。このようなことを、カントは述べている。

＊「軸の時代」はヤスパースの言葉である。詳しくは、縮小社会通信 9 号「縮小社会へ、「軸の時代」、最適社会の実現へ―フランス社会主義、歴史の事実、その「尾ひれ」―」を参照。

④ それと大切な事は、市場での貨幣による商品交換を、廃絶してはならない。この交換関係で作り出される関係性は、贈与交換関係の毒を中和させる働きがある。さらに、この商業は、貨幣による商品の交換関係は、国家間対立を緩和する方向に働くこともある。確かに、この商品交換という交換形態は植民地からの収奪に向かったり、戦争を無理矢理にも起こさせた歴史がある。しかし、世界各地が貿易で結びついているならば、露骨な国家間の対立へとは成り難い状況ともなりうる可能性がある。第三次世界大戦を防ぐことができる。だから、貿易の在り方を、交換の在り方を、地域間、国家間で常に調整していくことは必要となる。また、露骨な利己的な利益の追求を自然に抑えていくには、「利子のつかない貨幣」が流通するシステムが、現在とは異なる貨幣が必要となる。さらに「生産・消費協同組合」で人々の基本的な暮らしを支えられる状態でなくてはならない。このような、多様な交換システムも共存していることが必要になる。市場での貨幣による商品交換の毒を緩和していくものとして、・・・。

⑤ 私的所有を否定してはならない。確かに、大土地所有とか、大資本家たちの私的な所有は、制限しなくてはならない。でも、農民たちの耕作する田畑は、そこで作物を栽培する土地は、その人たちのものである。その資産は、子孫へと受け継がれるべきである。農地の維持は、この私的所有という形態なくして維持できない。また、中小企業の経営も、その家族の努力なくして維持できない。生産協同組合というアソシアシオン(アソシエーション)による経営体もあり、そして個人経営の企業や農園も必要なのだ。

⑥ モノの取り合いにならないためには、物質的に、情報的に、そして諸々のモノが豊かにあり、すべての人々に、欲しい時に行き渡らすことができなくてはならない。それは、現代社会における消費と情報にあふれ溺れかけている状況とどのように異なるのか。現代日本においては、先進国においては、物質的には、人が生きて行くことにはもう足りている。さらにたくさんの物が必要ではない、と私は思うが、・・・。しかし、物がもっと豊かで便利な事を追い求めている人たちがいる。問題は、分配のあり方なのだ。どのように分配を、誰が、どの機関が行うのが良いのか。しかし、分配的正義を求めすぎると、強力な中央集権的な国家体制を要請してしまうことになってしまう。やはり、分配的正義ではなくして、交換的正義の実

現を実現できるシステムでなくてはならないであろう。ここでは、プルードンのアイディアが有効であろう。

縮小社会通信 9 号「縮小社会へ、「軸の時代」、最適社会の実現へ―フランス社会主義、歴史の事実、その「尾ひれ」―」の中の後半、「3-2 縮小社会へ、・・・非物質的な様相を変えていく!」に記載しているように、19 世紀のフランス社会主義の思想が、今度は成功するような社会システムでなくては、・・・。

⑦ そして、私たちが、個人的なエゴに深くとらわれない精神性にならなくてはならない。今とは異なる別の人間性を、「今だけ・自分だけ。お金だけ」の意識にとらわれてしまわない人々がたくさんいなくてはならない。そして、今までとは異なる哲学・宗教思想が広まらなくてはならない。

しかし、このようなことは、ありうることであろうか。個々人のエゴの放棄など、とてもできうることではない。人間が内面的な弱さと道徳的欠陥を持っている存在であることを忘れてはいけない。さらに、現実には、生きていく時に人間に求められる「努力」の意味を見逃している人たちが多いということを、忘れてはならない。だから、人間にはこのような多くの問題を持っていても、エゴを強く抱くことがあっても、それが大きな害とはならない、このエゴを自然に抑制する交換関係が必要となる。人は大きな社会的変動・動乱・自然災害等を経験することで、悲劇を共通体験することで、社会的連帯感の高まりがあれば、その精神性は変化するであろう。理想社会の建設の前には、悲惨な体験を経験することが必要となるようだが、でも、このようなことは世代交代で忘れられてしまう。この前の悲惨な戦争体験が、・・・忘れられようとしている。だから、人がエゴに深くとらわれても、それが大きな悪とはならないように抑制していく多様な交換関係が、社会システムが必要である。よこしまな思いは、誰も抱くものなのだから。

さらに問題がある。大澤氏は人間の精神構造について、「人は贈り物を、彼方の「不定の他者」である第三者から受け取ると感じてしまう心性があり、ここから「収奪・再分配」機能としての政治権力が生まれて来た歴史がある、としている。「負債を魔術的に逆転させる他者」として王の誕生を述べている。だから、社会システムの改変をしても、またまた王国が、中央集権の権力が誕生するかもしれない。人の精神構造がすっかり変わってしまうなんてことはあり得ないことなのだから。経済的大混乱の中で、再度ファシズムの到来となってしまいかねない。だから、このようなことを抑制するシステムがいる。人間の精神構造は歴史的に変化してきたのだから、新しく社会システムを構想すればよいのだ。

しかし、その時は、その未来社会が「新しい中世」社会となりかねないが、私たちの抱く理想社会は近代社会を経由した上での、今までとは質の異なる社会性でなくてはならないであろう。繰り返すが、中世社会へと逆戻りしてはならない。

⑧　徹底した地方分権社会となること、アルカイックな社会となる事を目指さなくてはならない。そのためには、まず国家間対立のない世界が成立していなくてはならない。少なくとも、戦争という事態にならないための世界連邦の成立がなされていないといけない。国連の機能の充実・強化がなされなくてならない。でも現実は、国家間対立の激化である。でも、国連の機能には国家間の問題の調整だけではない。非営利団体等の組織がある。まずは、この機能の強化が必要であろう。

さて、繰り返すが、モースの「贈与論」に書かれているような共同体内、社会内に取り込まれてしまった人間を、素晴らしいと言えるのであろうか。近代社会で生きてきた者にとっては、このような社会の中で生きて行くことはとてもできないであろう。ここが、問題である。モースの述べているような共同体内でのみ生きることが素晴らしいなどとは、とても言えない。新しい中世なんてことでは、・・・。映画「猿の惑星」で描かれていたのは、まさしく中世社会であった。人類が愚かにも核戦争をしてしまい、生き残った少数の人たちは言葉を喋れないようになっていた。地球を差配していたのは猿から新たに進化した人(サル)であった。彼等の社会では、サルたちは中世社会そのものの価値観で生きていた。このような映画であった。これでは、未来に、何の希望もないことになる。

⑨　人口的には多すぎない。システムにとって最適な規模でなくてはならない。適切な人口政策がなされなくてはならない。行政としての強制もしなくてはならない。中国の行ってきた「一人っ子政策」のようなこともしなくてはならない時もある。アルカイックな社会では、適切な人口政策を実行することは難しい。だから、強権を持つ国家が必要となる。でも、これでは、徹底した地方分権にはならないことになる。ここにも、難問がある。人口抑制の強制ではなく、人々に納得させていくことを、意識を繰り返し説かなくてはならない。

⑩　地球というシステムを考慮した物・人・情報の交換関係を築かなくてはならない。そのためには、社会経済が縮小することを、当然のこととして受け入れなくてはならない。これを受け入れることを、しなくてはならない。もう理性的に考えれば社会経済が縮小していくことは仕方がないとは思いつつも、さらなる成長を、経済の活性化を願っている人たちが、大多数である。今のままでは、温暖化は止まらず、石油エネルギーが枯渇へと向かい、・・・。もう、地球というシステムを維持する臨界点に近づいている。現在、何らかの原因やきっかけで世界経済が失速すると、今の社会体制ではすさまじい悲惨な事態となることは、誰にも分っている。

だから、徹底した教育と宣伝が必要となる。それも、ある時期、この教育と宣伝を強要することも必要となろう。一時的に強制がなされるのであれば、それは、最適な手段であると言えよう。

補説 7　アソシエーションについて

これは、現在、社会変革を志向する多くの論者の間で広まりつつある言葉である。「アソシエーション」とは、自立した諸個人の自由で対等なネットワーク的連合を意味する言葉である。

19 世紀にはアソシエーション論は盛んにおこなわれた

19 世紀には、オーエン、フーリエ、プルードン、シュティルナーなど、多くの社会主義者の目指す理想像は、民衆が協同組合的に連合して民主的に生産する世の中だった。また、ミル等の一見資本主義擁護派の巨頭のようにみなされている論者達も、現状の資本主義のような経済体制長続きせずやがては協同組合的社会に変わっていくものだと考えていた。このように、19 世紀にはアソシエーションは広く流布していた思想であった。

そしてマルクスもまた、同じようなことを考えていた。彼は、未来社会を指すのに「社会主義」とか「共産主義」とかいう言葉はあまり使ってなく、圧倒的多くの部分では、協同組合的社会」とか「自由な諸個人のアソシエーション」などと呼んでいた。その中身は、集権的国有指令経済などではなく、自立した諸個人の自由で対等な連合にほかならないとしていた。

20 世紀にはアソシエーション論は消えた

ところが、このような議論が 20 世紀に入る頃から消えてくる。ソ連では、「一国一工場」モデルに基づく国有中央指令経済を目指した。そしてロシア革命の「成功」の威力によって、社会主義と言えばこのようなものであるとのイメージが一気に広がったのである。他方それに対抗する社会民主主義者もまた、手段として議会を通じた平和的手法をとることが違うだけで、国有計画経済という目指すイメージは同じだった。これには、エンゲルスの思想が大きく影響した。

資本主義を擁護する側もまた、行政エリートによる経済への国家介入を唱えたケインズの議論が主流となった。ファシズムも含め、右から左まで国家権力に依存する社会を志向する議論ばかりになってしまった。

アソシエーション論の復活

それが 1990 年代ぐらいから、また一転、世界中でアソシエーション論が復活しだした。ソ連や東欧の体制の崩壊によって、国有中央指令経済モデルの破たんが明らかになったためである。そしてもう一つの原因は、近年NPOやNGOや協同組合などの事業が盛んになり、その活動が社会変革への有効性を示し始めていると解釈されてきたためであろう。しかし、またまだ、この言葉さえ知らない人たちが多い。

＊このアソシエーションに基づく社会のイメージとしては、補説 3 の後半のプルードンの「自由」についての見解を参照。また、カント的に言えば、**「汝（なんじ）の人格と他者の人格の内なる人間性を手段としてのみではなく、常に同時に目的として扱うように行為せよ」(実践理性批判)のような社会となろう。**